三つの惑星が交差する世界で英雄達は生き続ける

kanchira

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
三つの惑星が交差する世界で英雄達は生き続ける

【Ｎコード】
Ｎ６２８３Ｖ

【作者名】
ｋａｎｃｈｉｒａ

【あらすじ】
どこか遠い宇宙に、一つの太陽系が存在していた。
太陽を中心に三つの惑星と様々なコロニーが周囲を回り続けている。
その惑星は四つの種族が存在している。
まずは基礎となった普通のヒトであるヒューマン。
そして彼らから派生し、誕生した三つの種族。
キャストと呼ばれる人口知能を持つロボットが支配していると言われても過言ではない惑星「パルム」
水と自然が豊かでニューマンが人口のほとんどを占めており、巨大

な宗教組織であるグラール教団がその惑星の中心となっている「ニューデイズ」
住人のほとんどはビーストで、豊富な資源を持ち、非常に厳しい自然環境で裏組織であるローグスが事実上取り仕切っている惑星「モトゥブ」
そしてその三つの惑星と種族を一つにし、世界を滅亡から救った組織「ガーディアンズ」
外宇宙から飛来した他の生物を滅ぼす「ＳＥＥＤ」を滅ぼして世界を救ったが、
戦争が終わっても惑星は周り続け、まだ人類は生き続けなければならなかった…
この世界での一つの大きな問題を、彼女達はどう解決していくのか…
：元のタイトルは　小さな翼と小さな光　です

第一章ー１　出会いと始まり（前書き）

初めまして、ｋａｎｃｈｉｒａと言います、カンチラって読みます
小説を書くのは久しぶりなので、日本語がおかしい場所があると思いますが
その時はコメントなどで教えてくれると嬉しいです

第一章－１　出会いと始まり

――それは遥か遠いところのお話
母なる太陽と　３つの惑星を持つ「グラール太陽系」
そこに住む「ヒューマン」と彼らから生まれた
「キャスト」「ニューマン」「ビースト」は
外宇宙より飛来した
謎の生命体「ＳＥＥＤ」による襲来を受け
滅亡の危機を迎えた
しかし４つの種族は心を一つにして戦い
激しい攻防の末　これを封印した
――それから三年後
グラールには　ＳＥＥＤとの攻防の傷跡が未だ深く刻まれ
資源枯渇が深刻な問題になっていた
外宇宙への移動を可能とする
「亜空間航行理論」が提唱され
再興の道を外宇宙への
大規模な移民計画に求めた
政府　軍　３惑星の企業は結束し
「亜空間航行」の実現化へ向けて動き出していた
「グラールの新しい未来」を願って――――

――――――

【フォトン】
このグラールの科学技術で基礎となっているエネルギー。
この太陽系では惑星だけでなく、宇宙空間にもフォトンは存在している。

フォトン粒子をフォトン・リアクターに取り込むことで利用している。
フォトンは精神エネルギーに感応する性質を持っており、
フォトン・リアクターは精神エネルギーの大小により出力を変化させる。

【テクニック】
フォトンを媒介にして発動する科学魔法といった所。

【シールドライン】
フォトンで出来ている薄い膜を服の上などから張り巡らせ、
鎧や甲冑など仕様せずとも強力な防御力を得ることができた。

【ナノトランザー】
要するに、保存に制限のある四次元のポケットである。

【ヒューマン】
普通の人間。

【ニューマン】
ヒューマンから精神力等を強化した種族。
寿命は短く、打たれ弱いのが弱点。

【キャスト】
ヒューマンから製造されたロボット。
意識を持つキャストが登場し、独立した存在となった。
機械であるが故に合理主義で、キャスト至上主義等が存在しいる。

【ビースト】
モトゥブの厳しい環境に対応すべく遺伝子改造された種族。

肉体を動物的に変化させる特殊能力「ナノブラスト」を使用できる。

【ＳＵＶウェポン】
同盟軍の専用衛星から専用の武器を転送させる。
攻撃力が高く、必殺技になる事が多い。キャスト専用。

【ナノブラスト】
ビーストにのみ使用できる特殊能力。
一時的に肉体を動物のように変化させる事で圧倒的な攻撃力を得る事が可能。

【旧文明】
数千年前～1万2千年前にＳＥＥＤにより滅亡した先文明。
太陽系の各地に「レリクス」という形で文明が存在した事が明らかになった。
Ａフォトンリアクターと呼ばれるエネルギーを中心としており、
現代の文明より遥かに高度な技術や文明を所持していた。

【レリクス】
旧文明が遺した遺構。
ＳＥＥＤが襲来以来、多くのレリクスが新たに発見され、
稼動し始めているのが観測された。

【スタリティア】
レリクスの中に残っていた旧文明の大型起動自立兵器。
ＳＥＥＤ無き今はレリクスの守護者として、侵入者を撃退するだけの兵器となっている。

―――――

私は今、最近発見されたと言う海底レリクスの調査をしにきている
先ほどまで人が溢れ、ざわついていたこのレリクスは今は私と
このエミリアという少女二人しか居ない、その理由は一つ
突然地震が起きてしまい、その影響で出入り口が閉まってしまった
そして逃げ遅れたエミリアは私と一緒に助けがくるのを待っている
…この状況はむしろ、私にとって誰も居なくなった状況は都合がよかった
エミリアを放っておいてレリクスの奥に進んでもよかった、むしろ進むべきだった
けども、私の心のどこかでエミリアを放っておく事に違和感を感じ、結局、エミリアと救助を待つ事にした……

「ねぇ…私達、閉じ込められて何時間たったのかな…？」

「…12分34秒です」

私はすかさずエミリアの質問に答える
エミリアは小声で「すごっ」っと言う再び黙ってしまった
こんな状況の場合、私はエミリアと会話して不安を紛らわせるのが良いのだが
…どうも会話を長くしようとしてもそっけなく返してしまう…

「……はぁ」

さっきから隣で何度も繰り返されてる溜息も、こんな短時間で聞きなれてしまった

「…どうしてこんな事になっちゃったんだろう…

どうして、ここはやばいってあれだけ言ったのに……」

――――――

今思えば、数分前
私はおっさんに連れられてレリクスの調査をする事になってしまった
おっさんが依頼を取りに行っている間、急に頭痛がして、地震が起こって
そして…閉じ込められてしまった
私はこんな薄気味悪いレリクスから出ようとして、必死に扉を叩いて出ようとしてた
でも、それは結局無意味な事だった
そんな時、後ろから足音がした
とても嬉しかった、私だけじゃなくて、他の人がいるという事実が
でもその足音は私には向かわずに、私の後ろの周囲を探るような動きだった
私はつい嬉しくって、調子に乗ってしまい…

「…ちょっと」

私は足音の主に無理矢理でも接触しようとした
早く接触して、誰でもいいから人と話がしたかった
だけども……

「ちょっと！無視しないであたしに声…かけて…よ…」

言った途中に振り返ってみると、そこには私より年下の女の子が立っていた

身長はとても低い、としか言えず、金髪で腰まで髪の毛が伸びている、
頭の先っぽに少し大きなアホ毛があるのが特徴的だった
ただ、それ以上に感じるモノがあった

「……」

冷たい目で私を見る目と、体から溢れ出る殺気のようなものだった
冷ややかな視線はともかく、殺気と言うよりもプレッシャーに近いものかもしれない
…正直、上手く表現をすることは出来ない「何か」をこの私より年下の女の子が発していたこと
その「何か」に私は思わず恐怖を感じ、その場に座り込んでしまった

「ひっ……」

私より年下の子供のハズなのに、体の全身で感じる恐怖に私は思わず怯えてしまった
凄まじい「何か」を持つ問題の少女が私に近づいてくる
目の前には恐ろしい殺気を持つ子供…もう駄目だ――と思ったけど

「大丈夫？」

女の子は私に、手を差し伸べてくれた
その表情はなんだか穏やかな感じになっていた…のかな？
この女の子が恐ろしく無表情な為、私は戸惑ってしまう…
少なくとも、私はこの女の子が居てくれてとてもよかったと思ってる
少女は入り口付近に座ったから、私もそれに続いて女の子の右側に座る
隣に座っている女の子はナノトランザーからとある有名な炭酸飲料

水を取り出した

「飲む…？」

「あ、どうも……」

私は女の子の手に持っていたグレープ味の炭酸の缶を開け、中身を飲んだ

「ねぇ、そういえば……って、えぇー！？」

私はビックリして大声をあげてしまった、女の子がうるさいと言わんばかりの表情をしている

だって、そこには大型の１．５リットルのペットボトルを飲んでいる女の子の姿があった

しかもさっき開けられたと思われるその大型ペットボトルは、既に半分以上を飲み干していた

普通なら驚いてしまう光景なんだろう

「そんなに飲んで大丈夫？」

さっきから私はこの女の子、見かけ私より年下であるハズの少女に驚かされてばかりだった

「…大丈夫」

少女はそう言った後に

「まだまだ一杯あります、もって後五日分は…」

どうやら、私の大丈夫の意味を間違えているようだ

「そうじゃなくてー…まぁ、いいや
まだ名前、聞いてないんだけど……」

「…レイ」

この女の子、レイはそれ以上は言わなかった
ただ、これ以上聞くな、という感じの方が正しいのかもしれない

「……ふ、ふーん。あんた、そういう名前なんだ
あ、あたしはエミリア。エミリア・パーシバル」

私もレイが名乗った後に名乗る、だって名乗ったならちゃんと返さなきゃね

「えっと、その……これからしばらくは
一緒だから…その、よろしくね」

レイはあまり人と話したがらないらしく、あまり会話が長続きしない
私より年下なのに、大人びてるなーとか落ち着いた雰囲気を出していた
さっきまで出していた殺気が嘘のようだった
でも、最初に心配かけてくれた時以外、あまり言葉に心がこもっていないような気がした
他になにか目的があって、その為に言葉を利用しているような……
自分で言ってなんだけど意味分かんないな
…しっかし、なんだか不気味で、私より年下だけど大人びてて無口な子供でも
誰か一人がいるだけで、こんなにも違うんだなぁ…

――――――

先ほど出会ったこのエミリアという少女は、さっきから独り言が多い
私に聞いてほしいのか、それともただ単純に無意識に言ってしまっているのか
もしくは、閉じ込められた恐怖を紛らわそうとしているのか…

「……」

もうそろそろ大丈夫だろうか…？
幸いにも、ここのレリクスは先ほどまで大勢の人がいたのだ
突如起こった地震により入り口が封鎖されてしまった
逃げ遅れたのは私とエミリアのみ、それ以外は全員が脱出した
さっきエミリアがおっさんと言う人と一緒に居たということらしいので
エミリアを見捨てない限り、救助が来ないという事は無いのだろう
私は立ち上がり、レリクスの奥に進もうとした時

「ねぇ、まさか奥に進む気！？」

急にエミリアが私に向けて話かけてきた

「無理無理！やだやだ！危ないって！」

何を根拠にそんな事が言えるのだろうか…？
そういえば、最初にエミリアをみた時にはここも危険だ、とか言っていたような…

「ここ、未開のレリクスなんだよ？すっごい危ないんだよ？」
まるで私がレリクスの危険さを分かっていないような、そんな口調だった
「…私は奥に進んでみます、出口があるかもしれませんので」
本当は嘘だ、奥に出口がある訳がない
レリクスの入り口は基本一つだ、過去に幾つかのレリクスを見てきたが、
出口が複数見当たるというのは私の中には存在しなかった
「あっ…ちょっと待って！一人で行っちゃうの！？」
エミリアは心配そうな素振りをしながら、私の後に付いてくる
「行くから！あたしも一緒に行く！」
そう言ってエミリアは私の後についてきた
ここで救助を待ってから奥へ向かえばよかったと、後悔する事になるなんて
———この時はまだ、何とも思っていなかった

第一章ー２　捜索と敗北（前書き）

いきなり原作崩壊してオリジナル展開になります
今後ともこんな展開が続いていきます

第一章ー2　捜索と敗北

「うわぁ……」

私は目の前の状況を理解したくなかった
原生生物が二匹、ウロウロしていた所を
レイはいつの間にか二匹とも倒していた、という事
そしてもう一つは、レイの手に持っているのはスライサーだった
スライサーは打撃武器であるにも関わらず、遠距離で攻撃できるのが特徴の武器なのだが
原生生物に向かって武器を使って直接「殴り」倒したという事

「えっ…？ちょ、ちょっと……」

私はいきなりの出来事で何が起こったのかわからなくて
今、やっと原生生物を倒した、という事実を認識する事ができた

「え、えーとね、今更こんな事言うのもなんだけど…
あたし、今まで戦闘とかした事ないの…だからさ
後ろ応援してるから、頑張ってね！」

私より小さい女の子でも、ここまで強いなんて…私はホッとした気分になった
レイがいれば、私はこのレリクスを脱出できる、という希望が湧いてきた
そうだ、無事に出られたならおっさんに文句を言ってやろう
…これ以上考えるとハラがたって仕方がなくなるから考えないけど

―――――

突然起きた海底レリクスでの地震
あまりにも突然の出来事で人々はほぼ全員パニックに陥った
恥ずかしい事に、俺もその一人だった
あの場を流されるように地上へと脱出していた

「ちっ……あの馬鹿、どこへ行きやがった…」

先ほどから少女の親と思われるピンクのコートを着たビーストが少女を探している
しかし、本気で心配しているような様子ではない
俺は周囲を見渡してみるが、少女と思える姿をした人は誰一人も居なかった
…俺の記憶には確かもう一人、少女がいたハズなのだが、その少女の姿も見えなかった
もしかすると二人ともレリクスの中で閉じ込められているのかもしれない

「クラウチ！」

後ろから赤いクイーンティリーゼスを着たヒューマンの女性が走ってきた
なんだか焦っている様子で、ビーストの男性…クラウチと言うのだろう、クラウチを呼んでいる

「クノーか…どうした？」

エミリアという少女を探していたピンク色のコートを着たビーストは

どうやらクラウチという名前のようだ
そしてこの赤いヒューマンの女性の名はクノーと呼ぶようだ

「ここで地震がありレリクスが封鎖されたと聞く、エミリアは無事か？」

今にもクラウチの胸倉を掴んでまでも聞き出そうとしている雰囲気だが、
それを押さえつけているのがよく分かる
しかし、クラウチは無神経そうに言った

「あの馬鹿…逃げ遅れやがった…今頃レリクスの中に……」

その瞬間、パンッと頬を叩かれる音が周囲に響いた
クノーがクラウチをの頬を叩いた

「っ…！何しやがる！」

クラウチは怒っている態度でクノーに問いかける
クラウチが怒る理由は分かるが、それ以上にクノーが怒る理由も分かる
正直言うと、クラウチは自分の娘の安全も何も確認せずに一人で脱出した
これじゃあ非難されても当たり前だ

「クラウチ…アナタには失望した」

クノーもまた怒っていた、俺にはその怒りの意味がよくわかる
冷たい声でクラウチを一蹴した後、クノーはレリクスの入り口へと進んでいく

未開のレリクスにどんな危険が待っているか想像もつかない、
旧文明の遺産であるスタリティアが起動したり、侵入者を排除する
為の罠が
レリクスには幾つも存在する、そんな中で一人で行くというのは無
謀すぎる行動だ
しかし俺もあの封鎖されてしまったレリクスに未練がある
決して未開であるレリクスの調査をし、その宝を独り占めるといっ
たような未練ではなく
助けを求めているかもしれない子供を放っておける性格をしてはい
ない、といったところか
俺と彼女、クノーは目的と行動が一致している、俺はクノーに声を
かけた

「一人では救助もままならんだろう、俺も手伝おう」

――――――

私、クノー・オーガストは怒っていた
突然クラウチとエミリアが行ったレリクスに地震が起こり、入り口
が封鎖されてしまったと聞き
急いで駆けつけ、クラウチに状況を聞くと、クラウチはエミリアは
取り残された、と言ったものだ
私は怒った、なぜクラウチがエミリアを気遣って一緒に脱出しない
のか、保護者としての責任は無いのか…
…いや、今はエミリアを救助する事を優先させるべきなのだろう
私は一人だけでもレリクスに侵入し、無理矢理にでもエミリアを救
おうとした
その時……

「一人では救助もままならんだろう、俺も手伝おう」
突如黒いキャストの男性が私に協力する、と言ってきた
例えレリクスのレベルが弱くてもエミリアの状態によっては協力者が必要な状況もありえる
それに相手がレリクスの財宝を目当てだったとしても道中ならば戦闘の役に立つだろう
私は黒いキャストの善意を断る理由が見当たらないので是非とも協力してもらおう

「…わかった、私の名はクノーという。
しばらくの間だがよろしく頼む」

「俺の名前はバスクだ、バスク・ウギン。
戦闘職はハンターだ、前衛なら任せろ」

彼、バスク・ウギンは接近戦を用いるハンターだ、私は補助を担当するブレイバーなので
ハンターである彼の存在は頼りになる
ブレイバーという職業は補助を担当するだけじゃあない
身軽な戦闘スタイルで小型の武器を得意とし、敵によって臨機応変に対応できる職業だ
だがしかし、身軽な為攻撃を回避しないと受けるダメージが大きいのが弱点と言えよう

「ふむ…なら後方支援は任せてもらおうか」

私は彼、バスク・ウギンと共に二人でエミリアの救助に向かおうとした

「…ちょっと待った、どうやってレリクスの中へ入るつもりだ？」
突然、黙っていたクラウチが私たちに話しかけてきた、私は壊してでも入る気だ、と伝えるが
「レリクスの扉はちょっとやそっとの力じゃ開かねぇよ
…俺がナノブラストでこじ開ける」
「そう言ったのなら、私たちと共に来るのだろうな？」
「当たり前だ、こうなった責任は俺にもあるしな…」
クラウチは渋々な態度ではあるが、エミリアを置いていった事に若干の責任を感じているようだ
もし何の反省もせずにこのまま帰ったりしていたら、ただじゃおかなかっただろう
もちろん私もその時はもうクラウチの事を見捨てるつもりだったろう
私たちは三人でエミリアを救う為にレリクスの奥へと進んだ

――――――

私たちはレリクスの奥、大きな円状のホールへと出た
奥に見えるのは先へ進む扉、地震の影響なのかドアはロックされていた
最も私は壊してでも先へ進むつもりでいる
中間地点とはいえ、周囲に待機中の自立起動兵器…スタリティアがいては気になって仕方が無い

「ずいぶん奥まったところまできたけど……」

「多分、ここは中間地点だと思いますが？」

「え…でも、このまわりに見えてるのって
全部、大型の自立起動兵器だよ？」

「動かないなら問題は無いです」

私は武器をナノトランザーに収納し、シールドラインを外す
シールドラインは強力な攻撃も耐える事ができる薄い膜のようなシールドで
装備している間は私の周囲をシールドラインが守っている
その防御力はダルク・ファキスといった強力なエネミーの攻撃も防いでくれる
グラールの技術じゃこれが当たり前で、鎧など着ている人はコスプレしかいない

「ふぅ……」

大きすぎる大広間で私たちは座って休んでいた
そして以前に連れて行ってもらった時の事を思い出す
こういう場所はモンスターは出ないが途中で何でかショップ等がある
ごくわずかな人しかいなかったが、それでも若干の人の話し声や雑音などはあった
しかし未開のレリクスという事もあってそんなものは一切ない
静寂
ただそれだけがあった
そんな状況にエミリアが耐えられなくなったのか

「……ねぇ、早く奥まで行こうよ」
エミリアは休憩せずに先へ行こうと言い出した
私は常に最前線で戦っていた為、疲労が溜まっている
少しでいいから休ませてほしいのだが……
「アナタは疲れてないの？」
「う…それはそうなんだけど……」
戦闘の訓練もしていないエミリアは私のペースについてこれずに
追いついてくるのでやっとだった
それでもまだこんな事を言うのはレリクスが怖いからなのだろうか？
過去に何かトラウマがあったのなら、早く出たいのも頷ける
それでも私についてこないで入り口で待っていた方がよかったので
は…？
「……ねぇ」
またエミリアが私に話かけてくる、黙っているのが怖いのだろうか
「どうしてアンタはこんなに戦えるの？私より同じか、年下なのに
……」
確かに、普通なら15歳で傭兵なんかしないだろう
だけども、私は小さい頃に自分自身の無力さを感じた
自分自身が無力であった時が憎たらしかった、そして血が滲むほど
訓練をした
そして半年前、やっと傭兵になる事ができた、しかし目的の依頼は

あまりにも無さ過ぎた
そしてあったのはほとんどくだらない仕事ばかりでも、それを引き受けてメセタを稼ぐしかなかった
…私が傭兵になった理由を言ってもエミリアは納得しないのだろう

「さて、そろそろ行きましょう」

私が立ち上がると同時にエミリアも立ち上がった
その瞬間、エミリアの後ろから巨大なスタリティアが降ってきた
着地した瞬間、左の鋭い三本の爪でエミリアを攻撃しようとした

マズい…！

私はエミリアを思い切り突き飛ばし、武器を手に持った

シールドラインを装備している暇は無かった

「きゃっ」

エミリアが転ぶ、これでエミリアは攻撃は当たらない

私は武器でスタリティアに切りかかると同時に

スタリティアも私に切りかかった

その瞬間、私の体から紅く吹き出る大量の血

それと同時に真っ二つになったスタリティア

シールドラインが無ければただの貧弱な小娘に過ぎなかった私は

このまま死を受け入れるしかないようだ

目の前が真っ暗になっていく……

死ぬというのは、こういう事なんだのか、と感じる

もっと他に考える事は沢山あるけど

なんだか考える気はまったくしなかった

そのまま何も考えずに私に意識は闇に落ちていった……

しかし不思議な事に、最後に感じたのは

まるで親に抱きしめられているような優しい光の暖かさだった

第一章ー2　捜索と敗北（後書き）

バスクやクノー、クラウチのキャラがおかしいのは
製作者にとって扱いにくいキャラなんだからと思ってくれれば結構
です
修正したのはいいけどまた修正するかもしれません……

第一章ー3　入社と状況確認

「……？」

目を開けてみると、そこは見知らぬ天井だった
背中の感じだと医務室とかそういった場所ではなく、ソファーに寝かされているようだ

「……オゥ　気がついたネ！」

横に視線を逸らしてみると、緑色の髪をした女性のキャストがいた
腰まで伸びている長い髪形に、左上にバラ？のような花をかざっており
チャイナ服のような服を着ていて、なんだか美しいと言う表現を表しているキャストだった
私は寝転がっていた体勢から椅子に座る体勢へと変える

「チョット　待ッテテネ！」

そう言うと彼女は

「シャッチョサン　シャッチョサーン！」

なんだか独特な声で奥のデスクにいる人を呼んでいる

「…あぁ？」

なんだかやる気の無さそうな眠気がありそうな男の返事が返ってくる

「お客サン　起ッきシタヨー
シャッチョサンも起ッきシテヨネー」

「あー……」

男は再びやる気のない言葉で返事をした

「お客サン『リトルウィング』へヨウコソ～」

どうやらここはリトルウィングという名前らしい
名前だけだとどんな場所でどんな企業なのかは分からないが
…そもそも、どうして私はこんな所にいるのだろうか…？

「ワタシ、チェルシー。ヨロシクネ」

「…あ、どうも…初め……まして…」

記憶の整理ができないまま挨拶をしてしまい、混乱気味に言ってしまった
本来ならここはどこ？といったような質問をするべきだったような
……

「はい、ハジメマシテネ～礼儀正しい人で気に入ったヨ
今後ともご指名ヨロシクネ！」

混乱して適当に言ったのだが、
このチェルシーって人に良いイメージで思われたかもしれない
…でもご指名とはどういう意味なのだろうか？

「シャッチョサン、シャッチョサーン

お客サンがお待ちヨ～」

…さっきから結構呼ばれてるような気がしたが
まだ来ないつもりらしい、怠け者なのだろうか？
チェルシーがシャッチョサンと呼ぶこの人物は
ピンク色のコートを着たビーストの男性のようだ

「まぁ待てって、今通信中だ」

どうやら通信中のようだ
先ほどは怠け者なのだろうかと早とちりをしてしまい
この男性をマイナスのイメージで考えてしまっていたようだ
……どっちにしろ、机の上にあるイカガワシイモノが写っているので
真面目に働いているようには見えないのだが

「おう、俺だ俺。今すぐ俺んトコまで来い
…あぁ？イヤだ？甘えてんじゃねぇぞ！」

「アラアラアラ～
それじゃ、ワタシから軽く説明するネ～」

チェルシーは通信が長引くと思ったのかこの施設等の事について説明し始めた
どうやら、ここはリゾート型のコロニーで名前は「クラッド６」と言うようだ
その中にある民間軍事会社がルトルウィングだと言う事
ここは事務所で基本的に事務の仕事はここでやっているそうだ、じゃなきゃ事務所に意味が無い

「アナタ、シャッチョサンが連れてきたお客サンネ～

いままでずっと寝てたのヨ。ぐっすり、すやすや
寝る子は育つって感じダッタネ」

正直、この人にどうやって言葉を返したらいいかわからない…
チェルシーに対してはずっと沈黙していたまんまだった

「よーぉ、気分はどうだ？」

横から先ほどのビーストの男性が声をかけてきた

「おうおうおう、面白いぐらいわけがわかんないって顔してるな
んじゃま。軽く説明でもしておくか」

このまま男性は説明をし始める
男性の名前はクラウチ・ミュラーと言い
この軍事会社「リトルウィング」を取り仕切っているらしい
どうやら軍事会社（笑）となっているらしく、
何でも屋と同じような扱いらしい
私も参加しようとしていたレリクスの調査にも参加していたらしい
しかし、あの地震と封鎖の事もあり、閉じ込められた人の救出任務
に変更されたようで
私も助けられた一人に入っているらしい、ただあの時は二人しかい
なかったような気がしたが
助けられた私は無傷だった為、一旦リトルウィングに預けられたら
しい
…しかし、話が妙だ
私はあの時、エミリアを庇って死んでしまったハズだ
それとも奇跡的に生きていたのだろうか？
無傷、と言うのも気になる
少なくとも原生生物との戦闘で少量のダメージは受けていたし

私の体を見たのならそんな事言えるはずが無い
それにあの時いたエミリアという少女だって……
…そういえば、エミリアはどうしたのだろうか？

「…あの」

「おう、どうした？」

「私と一緒に、少し年上のような女の子がいませんでしたか……？」

「あぁ…そいつならな……」

と、クラウチが言った瞬間に、この事務所のドアが開く音が聞こえる

「おっ、ちょうどいいタイミングだな。さっさと入れ！」

クラウチがそう言った後に出てきた少女は……
金髪で赤い服を着ていて羽のようなものがあって…
とにかく特徴的なこの少女は、間違いなくエミリアだった
見た瞬間に唖然としてしまい、しばらく言葉が出なかった

「……あのさ、おっさん…今日くらい勘弁してよ
あたしがどういう状況だったか知ってるでしょ？」

「知らねぇし、興味もねえから勘弁しねぇよ
それよりお前、客の前でそんなツラするんじゃねぇ」

「…えっ？」

クラウチの一言でエミリアははっとこちらに気づいた

「あっ、は、初めまして！
…って、夢の中で会った、ような……」
「残念ながら、夢の中じゃありませんね」
どうやらエミリアはあの出来事を夢として認識していたらしい
…ただ、私にもどこまでが現実なのか今一わからないのだが
「え…？もしかして…レイ…？」
「はい、レイです」
しっかり名前も覚えられているようだから、現実なのだろう
「やっぱりお前ら知り合いだったんだな」
ちょうどいい、と言わんばかりにクラウチが会話に割り込んでくる
「お前さん、フリーなんだろ？
丁度いい、このままうちの会社に入っちまえ
うちは確かに小さな会社だが、お前みたいな経験者には
ボーナスもはずむぜ？特にお前さんは…」
「待ってください」
無理矢理私はクラウチに喋らせるのを止めさせる
「…私の事を知ってるみたいですね」
「当たり前だ、でなきゃこんな勧誘しねぇよ

それに、だ。今ならいないよりはマシ程度の
パートナーもつけてやるよ」
もしかすると、この人の言っているパートナーというのはエミリアの事かもしれない
ただ戦闘経験の無いエミリアに戦闘経験を積ませるためだけに私を勧誘しているのか？
それとも他に意図があるのか……
「へー、珍しく太っ腹だねー」
「何人他人事みたいな顔してんだ。お前のことに決まってんだろ」
やはりパートナーというのはエミリアの事らしい
確かにレリクスではテクニックを使って少しは助けられたが…
「ええっ！？」
エミリアが驚く、しかしこういった話は事前にしておくべきなのだろうが…
私も突然に勧誘され、エミリアは突然相棒にされ…やけに強引である
「どうだ？試験も無しで、パートナー付きの仕事だ。
わりと破格の条件だと思うぜ？」
確かに破格といえば破格かもしれない、今まではフリーの傭兵として何度が仕事を探してきたが
所詮フリーという事と、私は１８歳以下の少女という事もあって仕事ができたのは2、3度だけだった
その中で望む仕事ができた事はあの海底レリクスを除けば一度も無い

「……一つだけ、条件があります」

「何だ、言ってみろ」

「パルムのレリクスの仕事を私に優先させて下さい
…そうしたら、入社します」

「…分かった、それじゃ、決まりだな
実はお前さんの部屋も用意してある
おい、エミリア。コイツをマイルームに案内してやれ。
パートナーなんだから、仲良くな」

「ちょっとおっさん！
パートナーとか勝手に決めるな！あたしの意見も聞いてよ！」

エミリアはクラウチに抗議する、が……

「……ほぉ、お前、それはつまり一人で働きたいってことか？」

「う…そういうわけじゃ…」

「偉そうなクチは一人で稼げるようになってから叩け！
おら、命令だぞ！返事は！」

「うー……！」

最初はクラウチに抗議してたものの、反論できずにクラウチに従った

「はぁ…わかったよ。それじゃ、居住区に案内するから、着いてき

て……」

私は事務所から出て、辺りを見回してみる
中心に何かに移動するテレポーターらしき装置と、それを囲むように
にできた五つの扉
一つはこの事務所の扉、その左は緑色の居住区、左斜めのドアは青
でショップらしい
右斜めの赤い扉はスタイルショップと言い、家具や服装を販売して
いるようだ、右側の茶色はカフェのようだ
居住区に入り、エミリアに案内されて自分のマイルームの中へ入った

「ねぇ、ベット借りるね……」

といってエミリアは案内されたばかりの部屋で寝られてしまった
パートナーマシナリーを起動する、青いダンサー型のＧＨ４２０だ
私は丁度このタイプのパートナーマシナリーが欲しかったので丁度
よかった
けれども設定をしなければならない、起動は簡単だけれど、問題は
名前
パートナーマシナリーの名前を考えるだけで１、２時間はかかると
いう人は結構多い
私は適当に子供の頃に見ていた絵本を思い出し、その本のタイトル
っぽい名前で
「ニャンポコ」と名づける、名前は後で変えらるから特に問題は無い
まだパートナーマシナリーの「ニャンポコ」を起動させる必要はな
いと思いそのままにしておいた
ドレッシングルームの中をのぞいてみるとシャワーがあるので、ひ
とまず私はシャワーを浴びる事にした

「……」

体の汚れを落としながら、私は考える
体を見てみてもあの大型のモンスターから受けた傷は見当たらない
あれだけの攻撃と出血の量から見ると、間違いなく傷は残っている
はず
だが、そんな大きな傷は見当たらない、どういう事なのだろうか
本当に夢だとしたら、一体どこまでが現実で、どこまでが夢なのか…
…それよりも、あのレリクスの奥に望むモノがあったのかも知れな
かったのに…
シールドラインを外してしまうという失態をしてしまった
後に聞いたが、あのレリクスは封鎖されてしまった為、しばらくは
入れない

「……っ…！」

私自身の体を見ていると、目が回り気分が悪くなる
これ以上シャワーを浴びる必要も無いだろう、とにかくレリクスの
出来事は気にしない
それ以上に私はやらなきゃいけない事がある、という事を決して忘
れてはいけない…

「ふぅ」

体の汗や汚れを落とした後、ドレッシングルームから出てみるが、
エミリアはまだ眠っているようだ
眠っているエミリアを無理矢理起こす必要は無いと思い、そのまま
放っておいて部屋から出ようとした

「……待って」

突然背後から何者かに、声をかけられた

第一章－４　旧文明人と接触

「……待って」

突然後ろから何者かに声をかけられた

「ここでなら…二人で話ができそうだから……」

私は振り返り、その姿を確認してみると、エミリアだった、が……
なんだか様子がおかしい…体から光のようなモノを出し、それがエミリアの頭上に集まり
その光が固まって女性の姿が現れた、女性の背後には魔方陣のようなものが浮かんでいる

「私はミカ。訳あってこの子に宿る意識のみの存在です」

「意識のみ…？」

「はい、この姿も、状態も、すでに失われた古の技術によるもの」

「…と、いう事は…アナタは旧文明人？」

「失われた技術を旧文明のものと言うのなら、私はそういう事になりますね
途方もない過去に、この星を生きていた
原初の文明を持ちうる人類。それが、私たちでした…」

ミカという人は、どうやら旧文明人の復活を止めさせてほしいようだ
かつて旧文明の時代にもＳＥＥＤが襲来していたようで、それを撃

退したようだが
惑星のＳＥＥＤの汚染が凄まじく、とてもではないが住めるような状況ではなかったようで
強力な浄化をした後に、環境に適応させたヒューマンを創り出し、ある程度の文明に達すると
旧文明人が肉体を奪って復活すると言う計画らしい

「突拍子もない話、とお思いでしょう。ですが、いずれも事実なのです。
…どうか、この忌まわしい計画を阻止する為に、力を貸していただけないでしょうか？」

…正直、突然すぎて何が何だかわからなかった
ただ、このまま放っておくとグラールがヤバいという事だけはわかった

「この子は…心を閉ざしきっていて、私の声を認識してくれないのです…」

「…エミリアがアナタを認識できない理由は分かりました
…ですが、この計画をどうやって阻止するのです？
それに、なんで旧文明人が計画を阻止しようとするのですか？」

「確かに私は旧文明人ですが、現代への回帰を望んではいません」

「旧文明は滅ぶべくして滅んだ、という事ですか……」

「はい、おっしゃるとおりです。世界は次の世代に任せるべきなのです
…それに、貴女にとっては、すでに私の存在は他人事ではないの

です」

「アナタは普通の人には見えない、と言いたいのですか？」

「……はい、普通ならあり得ない事です」

「…どうして、私はアナタを認識できるのです…？」

「…貴女はあのレリクスで、一度……」

ミカの表情が曇る、これはもう間違いないと言ってもいいだろう

「死んでいる……？」

「……はい、貴女の肉体は、自立機動平気に砕かれ、一度は完全なる死を迎えました

その時、エミリアの強い願いによって発現したプログラムが貴女の身体を再構築しているのです」

「…つまり、今の私は……」

どうやら現在進行形で身体の構築が進んでいる真っ最中のようだ

普通ならもっと派手な行動をするのだろうが、なんだか恐ろしく冷静な私であった

……多分、それは今の私以上に不死身を見ているからであろう……

「…それより、エミリアは無事？」

なんで私はエミリアの心配なんかしているのだろうか？

「疲れていたのでしょうね。今は浅い睡眠状態にあります。
心配せずとも、もうすぐ目を覚ましますよ」

ミカは母親らしい表情と声で言った
なんだかこの旧文明人がこのエミリアの母のような存在に感じる
それにしても、最初に出会った時はエミリアはどうでもいい存在だった、
レリクスに取り残されようが、入り口で一人で待ってようが私には関係無かった
……しかし、見殺しにはできなかった、するわけにはいかなかったようだ
その結果が死んでしまい、目の前の旧文明人と話しをできる結果となった

「……ふぁ…」

エミリアが目を覚まそうとしている
しかし、人の部屋のベッドで勝手に寝るとは…最も、そのおかげで今の状況が把握できたのだが

「そろそろこの子が目を覚まします。詳しくはまたいずれ……」

そう言うとミカは光となり、エミリアの中に入っていった
それと同時に発現をするエミリア

「ふぁ…ちょっと寝ちゃった、かな？
…あれ、なんでこっち見てるの？」

「…よく人のベッドを使って勝手に寝れますね、と呆れていた所です」

「う……だ、だってスッゴク疲れてたし…」

私はエミリアの言い訳を適当に聞き流し、話を変えてマイシップを紹介するという事なので
マイシップの場所へと向かう事にした
その場所は中心のテレポーターで、そこを使うと一瞬でマイシップ内へ移動できるようだ
基本は中心の円形の端末で自動で移動できるようになるらしい、私は登録されていないから
まだ使えないようだけど……

「あ、そう言えば仕事で思い出したけど…
私のパートナーカード渡しておくね」

気づけばエミリアの話を少し無視していた私は
エミリアからパートナーカードを貰った

「これでよし、っと」

全てやり遂げたようだ…と思ったら、エミリアが何かを思い出したのか、私に言ってくる

「あ、言っとくけど、この会社ではあたしの方が先輩なんだから、きちんと敬うようにね」

…ミッション中は私がリーダーになるし、エミリアは戦闘では特に役立たないので
戦闘の面で言うなら私の方が先輩なのだが…
特に気にならないので敬うようにするよう心がけよう

「はい、わかりました」

「……あんま変わらないね、まぁいっか！」

どうやらどうでもいいようになったようで
まぁ、その理論ならエミリアはクラウチを敬わなければならないし、
面倒くさいのは嫌なのだろう

「レリクスでアンタも私も無事だったしね！」

まぁいっか！というのはあのレリクスでの体験も含まれているようだ

「それで、さ…あの時なんだけど…その……
私が死にそうになった時、助けてくれたよね……
あの時は、夢でも嬉しかったかな……」

「…そう…ですか……」

顔が真っ赤になって俯いてしまう、人からこんな事を言われたのは
久しぶりで
…それで、エミリアの気持ちが凄く私にも伝わった
ここでエミリアが私を気遣ってくれたのか

「うぅ…そんな真っ赤にならないでよ…言ってる私も恥ずかしいん
だから…」

なら言うなよ、とも思ったけど、人に感謝を感じたらそれを言葉で
伝える
感謝された、と感情で伝わってても、言葉で伝えると二倍は嬉しく

なる

「だめだめ、ストーップ！
あたしの話ばっかりでずるいから、あんたの事も色々教えてよ！
なんてったって！あたしたちは「パートナー」なんだからね！」

エミリアは、私自身の事を知りたいようだ…けれども

「エミリア、せめて私と肩を並べるくらいに強くなったら、私の事を教えます」

今の私なら自分の事は決して教えないし、教えたくない
けれども、エミリアに対しては全てを許してしまいそうな感じがする
しかし、全てを話してしまったら、エミリアはそれを受け止められるのだろうか？
いずれにせよ、私と肩を並べられるという時には全てを知られているかもしれないけれど…
このまま私はマイシップから出ようとしたら

「あっ！ずるい！そんな事言わないでさ～！」

エミリアは私の後に付いてくる
それに思わず私はクスリと少しだけ笑ってしまった

…なんだか、久しぶりに笑った気がした

第一章ー5　職場仲間と説明

とりあえず、入社したのはいいものの
急には働けず、とりあえずクラウチからエミリアの事を聞いてみようと思う

「あぁ？何か聞きたそうな顔してやがるな？エミリアの事か？」
どうやら表情で読まれてしまった、私はそのまま「はい」と答えた

「…あいつは、常連だった店のママに保護してやれって押し付けられたんだよ」

…一体どんな店に通ってたのか想像が付かないが、とりあえず適当に頷く
とりあえず話を短くすると、エミリアは望まれぬ形でクラウチに引き取られた
このままだとニートまっしぐらな為、働かせよう、との事らしい
一応戸籍上は家族ではないか？と聞いてみると
エミリアとは家族じゃない、とキッパリと言い切った
上司と部下の関係だ、とハッキリと言った
その後に、エミリアを自分で働けるようにしろ、それ以外は好きにしろ、と言われる
私は「了解しました」と言い、事務所から去っていった

「む…お前は……」

マイルームに戻る途中、黒いキャストに声をかけられた
私はめんどくさいなぁ…とも思いつつ振り返ってみた

「海底レリクスで会ったな。覚えているか？」

「覚えてません」

私は適当にあしらって部屋に戻ろうとするが……

「そうか…ならせめて、話を聞いてくれないか？」

…何だかいいえと言っても話を勝手に言いそうな人だったので
とりあえず話を聞いておくことにした

「…話だけですよ？」

「あぁ、無論、そのつもりだ、まず……」

このキャストの男性の名はバスクと言うらしい
バスクの話によると、どうやらレリクスで私達の救助活動を手伝っ
てる途中
クラウチからスカウトがきてリトルウィングに入る事にしたそうだ
その時から私をリトルウィングに引き込むような事を考えていたら
しい
そして私の事を身元を調べるより前に私をルトルウィングに所属さ
せようと考えてたらしく
クラウチはかなり人を見る目があるようだ、との事
ただ本当の事は、エミリアを一人前にできるようにする事、なので
エミリアと仲が良ければ、私以外でも勧誘するような気がした
それと、私は結構有名な新入社員らしく、将来有望株のようだ
最も私は昇格など興味無いし、エミリアを一人前にしたら会社を辞
めるつもりだ

「…見ない顔だな…君がレイか？」

横から赤いクイーンティリーゼスを着た女性が話しかけてくる

「私の名はクノー。リトルウィング所属の者だ。
君にとっては先輩となるのだろう。」

「それで、俺のパートナーだ」

「うむ、私は一人でもよかったのだが、
色々と都合がいいのでな、是非組ませてもらう事にした」

バスクの話からクノーと一緒に私を救助してくれた一人らしい
その時に息が合ったのか気が合ったのかバスクの入社と共にパートナーになったそうだ

「君が悩みを持ったりしたら、いつでも相談に乗ろう。
敵対しない限り、私達は君の味方だ。いつでも話しかけてくれ」

「…わかり、ました……」

ありがとうございます、と消えそうな声で言った後、何だか恥ずかしくてマイルームに戻ってしまった
人に優しくされるのは随分久しぶりのような気がして、そして感謝の言葉一つも言えない私が恥ずかしく思った

――――――

「どう思う？」

俺はパートナーであるクノーに問いかけた

「…まだ分からないな、ただ……」

「このままじゃレイは自分を追い詰めてしまう…か？」

「正解だ。流石元教師だな、よく分かっている」

彼女の言うとおり、俺は元教師の立場だった
俺はクノーの経歴を知り、お互いに子供を見守る存在として、エミリアとレイを見守る事にした
エミリアの保護者であるクラウチは役には立たない、レイに至っては保護者もいない
だから俺達が二人を見守るという自主的な任務をする事にした

「それで、この問題を解決するには？」

「そうだな…レイを追い詰めている問題を解決してやればいい、が……」

その問題が問題である、恐らくレイが追い詰められている問題は…
間違いなく、あれである、一時期グラールを騒がせたあの事件が原因なのだろう
果たしてレイは自分自身の問題を解決できるのか……

――――――

私はできたばっかりのパートナーカードをエミリアに私は
エミリアは興味津々に私のパートナーカードを見ている
そして私のファミリーネームに疑問を持ったようだ、予想はしていた

「ねぇ？アンタのハークスって、もしかして……」

私は何も答えなかった、答えても意味は無いから……
エミリアは私の考えを察したのか、それ以上は何も言わなかった

第一章ー５　職場仲間と説明（後書き）

これにて一章は完結です
オチのつけ方が全く分かりませんので適当に終わらせてますが……

第二章ー１　何か言ったか？ごくつぶし

「よぉ、来たか」

クラウチに呼ばれて私とエミリアはクラウチのデスクの前に立つ

「お前さんはともかく、エミリアには丁度いい仕事を見つけてきたぞ」

クラウチはデスクの上に写真を置く

写真は白髪のビーストの男性を写していた

「コイツを探してきて欲しい、捜索対象者の名は「ワレリー・ココフ」

５１歳男性、種族はビーストだ

今、コイツの船はモトゥブのクロウドッグ地方と場所が特定している」

「で？おっさん、この人がどうかしたの？失踪者の捜索だったりするの？」

「いや、俺が前に金を貸したヤツ。つまり借金の取立てだ」

エミリアがギャグマンガのように横に壮大にズッコける

ズッコケた後エミリアは体勢を立て直して再びクラウチのデスクの前に立つ

「それおっさん個人の依頼じゃん！それに場所が分かってんなら自分で行けばいいじゃん！」

エミリアは大声で抗議するも

「何か言ったか？ごくつぶし」

その一言でエミリアは完全に黙り込んでしまった
クラウチは昼間っから酒を飲んだりいかがわしい写真を見てたとしても一応これでも
働いているのである、まだエミリアよりは社会的には偉い
そんな事よりも、本人が依頼と言っているなら断れないものもある
それを聞くために私はクラウチに問いかける

「ちなみに……」

私は黙って親指と人差し指でわっかを作る
つまり' 報酬は？' という意味である、クラウチにはそのジェスチャーの意味が通じた

「俺がワレリーに貸したメセタの半分、お前らにやるよ…
五万メセタ貸したからな…一人辺り１万２５００メセタってトコだな」

個人的な依頼だが、報酬は十分すぎる程に豪華だった
パルムのレリクスの調査の依頼も無いし、断る理由も無かったので
私とエミリアは
二人でモトゥブのクロウドックグ地方へと向かった

――――――

マイシップが地面に着陸する、私たちの周囲にはたくさんの船があった
その数はおそらく三十か四十ほどあるのだろう
「おっさんはへんぴな場所って言ってたけど…
その割には観光プラント並みに船がおおいじゃん」
「人が多くても少なくても、結局人を探すのに変わりはないです…
むしろ人が多いと目撃情報があって有利かもしれませんよ？」
「そっか、そうだよね……」
エミリアは理不尽な依頼を受けてイライラしているのだろう
そして私がいった言葉を気休めに使っているようだ
「あーあ…おっさんは依頼は私物化するし、昼間から酒は飲むし…
私の言う事聞けってワケじゃないけど、どうしたら真面目になってくれるのかなー…」
「…まず私たちが依頼を成功するべきですよ」
まずは自分の行動や態度で見せ付けて、自分たちはこんなにしているんだとアピールする
そしたら周囲の人もその態度で真面目になったり不真面目になったりするかもしれない
少なくても時間はかかっても人は良い方向に変える事はできる
「えぇ？そんな事でおっさんが態度変えたりすると思う？」

「人は簡単に変われます、良い方にも悪い方にも……」
「…ん？あれって人じゃない？」
私の言葉を最後まで聞かずにエミリアは人っぽい方を指し示す
そしてその人はこっちに気がつくとこっちに向かってくる
「おい、お前達。こんな所で何してるんだ？」
話しかけてきたのは小さなビーストの男性、肌が黒い
ビーストには小ビーストといった種類の人がいて、そのビーストは子供の身長で成長が止まってしまい、そのままの身長で成人する種類のビーストだ
だから小さいビーストを見かけても子供と言ってはいけないのが常識だ
「あたし達、人を探しに来たんだけど……」
ビーストの男性は私の顔を見ている、そういえば私もこの男性に見覚えがあるような…
なんとなーくお互いの顔を見ていると、また小さいビーストの女性が走ってくる
「駄目だよトニオ、こっちには人っ子ひとりいなかったよ……あれ？」
今度は黒いビーストの男性と違い、色白のビーストの女性だった
あの女性の方が私の顔を少し見た後、はっと気がついた様子で言った
「あんた、もしかしてレイ！？」

突然女性は私の名前を言った

――――――

私はいきなり何が起こってるんだかわからなかった
初めましてと思ったら久しぶりでした、というような状況だった
レイも動揺している、もしかするとこれは昔3歳の時にしか会ってない叔父さんくらいの
微妙な関係かもしれない…多分こんな説明で合ってるだろう
それにしても…身長が小さい
多分ビーストの方は小ビーストって種族なんだろうけど、レイは病気なまでの身長の小ささだ
15歳という年齢の割には7，8歳の子供くらいの身長しかない
そんな低身長を見下ろす快感に私は酔いしれるはずもなく
ただ会話の置いてけぼりはどうにかしようと心のどこかで思っていた

「あのー…レイ、こちらの方達は…？」

私はレイに疑問を問いかける、こんな状況なら一番聞きたい事No，1だろう
けれども三人は私の声を聞く暇が無いというか、無視しているというか
どんなに声を出しても見ない聞かない

「レイはどうしてこんな場所に？」

「人探し……」

「丁度いいな、この辺りのヤツら、なんでか知らんが全員で奥に進んでいるようだった。
目的も行動も一致しているようだしな、しばらく俺達と組まないか？」

「…はい」

勝手に話を進める人たち、私の存在は蚊帳の外だった

「それじゃ、決まりだな」

三人は一旦カーシュ族の村へ向かってみる事にしたようだ
男性の方はトニオ・リマといい女性の方はリイナ・リマ
後で聞いたけれど二人は夫婦で傭兵をしていて
文化保護地区の見回りの依頼を受けている最中にこれほどまでに大量の船
状況を調べなきゃーならないといった時に私たちが来たようで
なんで人が奥に行ってるのかとか目的も一致していてしばらく一緒に行動する事にしたようだ

…それにしても、なんで私ハブられてるんだろ？

第二章ー２　人は変わりますよ（前書き）

サブタイトルは章ごとに変わります
ぶっちゃけ適当につけてます
無くてもいいかなーとは思いましたが
なんか寂しいのでつけました

第二章ー2　人は変わりますよ

「ほら、見て！あれがカーシュ族の目印だよ！」

リィナはなんだか記号か文字かも分からない絵を指している
エミリアは興味深そうにその文字を眺めている
トニオは俺にはさっぱりだぜといったような雰囲気を出している
私にもさっぱり分からない、というより文字として認めたくない
さっきまで私たちは船が大量にありながら人が誰もいないという事態を調べるため
人々が向かったと思われる「カーシュ族」の村へと進む事にした
そのまま進めば捜索対象者も発見できるかもしれないので、私たちは一時的に共に行動する事になった

――――

「あっ…道が燃えてるよ！」

道中、橋を発見したのだが、それ以上にも橋が燃えていて渡れる状況ではなかった
別の道はある、人工的に作られた扉が橋の間逆の方向に存在していた

「多分、カーシュ族がやったのね。仲間にしか道がわからないように…」

しかしそれ以上に気になるのが燃えてる橋の傍に咲いている小さな紫色の花

…どうして橋の近くに咲いているのに花は燃えないのだろうか？
私は試しに咲いていた花を抜き、炎の中に入れてみる
すると花は燃えずにそのままの形で存在していた

「さ、行きましょう……」

炎は本物ではなく、カーシュ族によって作られた人工的な燃えない炎だった
本物みたく燃える音は出る、しかし実際には燃えないようだ
自然を愛するカーシュ族で草木を燃やす炎を侵入者を拒む理由で使うとは思えない
燃えない炎は幻影以外にはありえない、私たちは幻影の炎の中を進んでいく

――――

道中、黒い炎があったり機械に文字が書かれてたり紫の花が答えだったりと
カーシュ族のトラップは全て潜り抜けてきた
再びカーシュ族の文字を見つけ、リイナが読み取ろうとしたら…

「あ、それ…この先の道のりについてだ」

以外な人物から文字の答えが語られた、エミリアは普通にカーシュ族の文字を読んでいた

「今までの目印と違ってかなり詳細に書いてあるね。これが最後なのかな？」

「…なんで読めるんだい？」

リィナはエミリアに問う、当たり前だ
こんな短時間でカーシュ族の文字を理解するだなんて普通じゃない
私もさっきから見てはいるが、まったく文法や意味がわからない

「なんでって…さっきからリィナが読んでるのを後ろで見てたし…
…」

それだけで覚えられるような単純な文字ではないのは確かである
もしくはエミリアは本当はすごく頭が良いのか

「それにしたって、理解早すぎねぇか？俺はさっぱりだぞ」

「私も」

私は正直に言った、まだこの文字が文字である事を私は認めていない
いくらいだ
この文字は記号だ、と言っても違和感は無い

「わかるって！絶対わかる！ちゃんと見て無かっただけだよ！」

なぜかエミリアが焦る、何を焦っているのだろうか
脳ある鷹は爪を隠すというし、ここで天才とバレたら計画が～みた
いな感じなのか
どんな計画かはまったく想像できないけど

「ほら、もうすぐそこなんだし、早くいこー！」

エミリアは勝手に先へ進んでいってしまう
感じる敵意、同じ瞬間に聞こえる言葉

「お前、止まれっ！！」

突然の少年の声、その声は怒りを感じさせるような言葉
マズい、エミリアは何が何やらという状況になっている

「エミリアっ！」

私はエミリアを蹴っ飛ばす
その瞬間にエミリアの頭があった場所にフォトンの矢が飛んできた
飛んできた方向には弓を持って構えている少年の姿があった

「そこかっ！」

トニオが右手にクローを持ち、少年に突撃する

「もらったぜ！」

跳躍し、少年の目の前でクローを使い少年を倒そうとするが

「はあああっ！」

少年は円形の魔方陣のようなものを右腕から出す、赤く光っている
その魔方陣は
炎のミラージュブラスト「ヌイ」を召還させるミラージュユニット
だった
ヌイの姿はファンタジーに出てくるような炎の魔人を再現したよう
な姿だ

外見は赤く、頭には角が二本生えており、下半身は無く浮いている
そして最も特徴的なのは自分の体とおなじ大きさもある大きな右手だった
ヌイは右手から非常に強力な炎を放ち、敵を焼き払うミラージュブラストだ
トニオの前でヌイは炎を放つ

「何ッ！！」

「あぶないっ！」

トニオに炎があたろうとした瞬間、リィナが横からトニオを押し、炎を回避する
私はこの時が少年に攻撃する最大のチャンスと感じ、私もミラージュブラストを使う
円状の魔方陣は変わらないが、私がだすのは青色のミラージュユニット
その名は「コンル」体全身が鋭くできており、その姿で回転しながらの体当たりで攻撃する
回転していったコンルはそのまま少年に当たり、少年はそのまま倒れた

「油断大敵……」

「え！？ちょ、ちょっと！…こんな事して大丈夫なの！？」

エミリアはこんな事をして大丈夫なのか、と質問してきた
相手から攻撃してきたわけだし、トニオ相手に本気で殺しかかってきたし
むしろ死ななかった事を幸運に思うべきだと私は思う

その事を言うと、トニオとリィナは顔を合わせて視線で会話をしたように見えた

「アンタ、変わったね……」

「人は変わりますよ」

ちなみに、ミラージュブラストはカーシュ族が使っていた能力のようなものだった
それが世間に知られ、かつてブラスト技と言われる俗に言う' 必殺技' が無かった
だからヒューマンとニューマンにとってはミラージュブラストの技術は受け入れられた
…でもまだ開発段階、オリジナルであるカーシュ族のミラージュブラストの方が威力は高い
そんなミラージュブラストを直撃したらどうなるか、シールドラインで持ちこたえるのか…
今私が使ったミラージュブラストは' 試作品' だった
試作品であるが故に、威力は低いものの無いよりはマシと思い使っていた
使用したデータは直接本社に流れるためレポート等の提出が無いのは救いだった
ミラージュブラストは全属性分そろっており、私以外にも試し撃ちしている人がいるようだった
私の弟に炎のユニット、氷が私、雷がどこかの社長、土がフォトン研究者、
光が幻視の巫女、闇がどこかの社長の息子、というのはなんでか覚えている
ミラージュブラストの存在は世間に知られてはいるが、その元がカーシュ族だという事は知られていない

まだ販売もしていないため、多くのヒューマンとニューマンは待ち焦がれているだろう

「それにしても、カーシュ族って普通の人なんだね……」

「カーシュ族っていうのは種族じゃない、知能を持った原生生物とかじゃなくて
あたい達のような文明を持たずに原子的な生活をしている「部族」なのさ」

「種族じゃなくて、「部族」ねぇ……」

「…さて、俺達は一旦コイツを治療する為に一度船に戻るが…
お前ら先に進んで村の様子を見てくれないか？」

「えっ…それ、逆の方が良くない？」

「わかりました、ほら、エミリア」

私はエミリアの手を引っ張って無理矢理奥へ進んだ

「ねぇ、いきなりどうしたの？」

「私たちの船に医療器具はありません…
それに、村の様子が気になりますから……」

私はそう言って誤魔化していた
本当の理由は私の存在を知っている人と一緒に居たくなかった
ただ、それだけ……

第二章ー３　ありがと……レイ……

「なにこれ…ひどい…一体何があったっていうの…？」

道中、私は黒い煙と焦げ臭い臭いを感じ取り、カーシュ族の村へと急ぐが、
目の前は火の海でカーシュ族の村であった場所は炎が全てを焼き尽くし、
その姿を無残なものへと変えてしまっていた。
途中に戦車のように硬そうな原生生物がいたものの、
地面からの攻撃には耐えられなかったようで、即死した。
村の中心部分にはこの事件の主犯者と思われる者達がそこにいた
そのリーダーでありそうな人物、銀髪で黒い革ジャンを着ており、
その黒服は手には赤くて薄いノートのようなものを持っていた。
そして何よりも、明らかにカーシュ族だけではなく、普通の人と違う雰囲気を持っている。
殺気とプレッシャーの塊を放つようなそれは異常な存在感を出していた。
雰囲気からすると、カーシュ族の村を焼き払ったのは恐らくこの人たちだろう。
黒服の周囲には仲間と思われる人たちが２０人程おり、
この人数を全員と相手をするのは少し骨が折れそうだ。

「悲願への道はこれで開かれた。…貴様達にもう用は無い。
　いずこへなりとも、自由に去るがいい」

リーダーっぽい人物、通称黒服がなにやら言っている。
事件は終わったから好きなように去れ、とでも言っているのか……
エミリアは視線を黒服の横に移動させると、はっとした表情で私に

言った。

「ってか、あの黒服の隣！あいつ、ワレリー・ココフじゃん！」

エミリアは叫ぶようにいった、その声で視線が私たちに集まる。
私にだけ言うのなら小声で話してほしかった、と思う。
しかし私も気がついていなかったが、確かに隣にいるのは
今日の依頼の捜索対象者であるワレリー・ココフだった、写真とも
完全に一致している。

「む…？貴様達、ここで何をしている」

黒服が私たちに問う、背後にある熱気と自分達がやらかした事など、
まるで当たり前だ、というような態度だった。
でなければ、普通の人間なら目撃された事件で逃げてしまうだろう、
それに犯人らしい黒服は目的の品物を盗んだ際にさっさと逃げず、
この場に居続けている。
そんな事態も普通ではない、さっきも言ったとおり、普通の人なら
既に逃げているだろう。

「それはこっちのセリフ！こんな酷いことして…これ全部、あんた
達がやったの！？」

エミリアは怒るように黒服に言う、しかし黒服はまるで私たちの事を
見下し、何か哀れなものを見るように答えた。

「だとしたら、どうする？その脆弱な力で、私と刃交えるか。「消
え行く存在」よ」

「消え行く存在…ですか、まさか旧文明人……」

「ほう、魂を昇華できぬ者が我々の事を……ならば貴様から消してやろう！」

黒服が叫んだ瞬間に私は武器を構えたが、全て行動が遅すぎた。
目の前には黒服の顔、そして右手には今にも振りかざしそうなフォトンを使わない刀のセイバー、
私は一瞬のうちに後方へ下がった、その瞬間に振り落とされるセイバー。
顔は無事だった、けれども胴体胸から腹まで切られてしまった。
体から噴出す血、視線を上に向けると黒服のつまらなさそうな表情、
黒服は目標ををエミリアに変えた。

「次は貴様だ」

その瞬間にエミリアの近くにいく黒服、左手からは闇属性のテクニックのようなものを纏っていた
左手がエミリアに触れる、叫び声が私の耳に響く。
助けなければ…体を動かそうとする、しかし指一本も動かない。
目の前が暗くなっていく…まだ私にはやらなければいけない事があるのに…
そのまま私はエミリアを助けられず、このまま意識が途絶えた……

――――――

これから先の出来事はあまり覚えていない、黒服に切り裂かれ、私の体から吹き出る血。
再び死ぬかと思ったけれども、今回の場合はシールドラインも装備

しているおかげて助かった。
しかし相手はほんの少しシールドラインを貫通させる程の攻撃力を持っていた、
スタリティアの攻撃よりもよっぽど強いであろう攻撃力から放たれる斬撃、これではまるで……

気絶している間はトニオに運ばれたらしく、運ばれている途中で目覚めた。
頭がクラクラし、体がふらついている中で自力でマイシップに乗り込み、、クラッド６に帰還した。
自分自身の傷は自分で治すとチェルシーに言った、自分で傷を縫合することはできた。
それからクラウチからカフェに来いと言われ、言われた通りにカフェに行くが、
薄れ行く意識の中、そこで覚えているのは何かに驚いていたクラウチの表情だけだ。
その後、途中で会ったバスクにマイルームまで運んでもらい、自分の部屋のベッドで寝た。

「……ねぇ、レイ、起きてるかな…ちょっと話してもいいかな？」

寝ている途中に起こされた、隣でエミリアが話しかけてくる。
エミリアはベッドの側に座り、寝ている私に視線を合わせている。
私は起きているから、話を続けてほしいと言おうとしたが、上手く喋られなかった、
仕方ないので私は首を少しだけ上下に動かした、それにエミリアは反応し、答えてくれた。

「ありがと…」

いつものエミリアとは違い、何だか元気のない言葉で話していた。
「あんたは知ってるみたいだけど、私の中に旧文明人がいるんだね……さっき、知った」
ミカはエミリアに接触し、エミリアもミカが見えるようになったようだ、
もしかすると、あの黒服の攻撃を受けた後に何かあったのかもしれない。
「それで…あたしのせいで一回、死んでるんだね……」
私自身も既にミカから聞いていた、一度死んだから体を再構築している最中と聞いている。
詳しい技術はわからないが、構築中とは言え実際に血が吹き出たり傷ついたりするというのはかなりの高等な技術だろう、どういった理由か知らないがミカにはその技術を持っている。
…そもそも、なぜエミリアにミカが宿っているのか、など疑問はあるのだが…
「あたし、戦闘じゃ何もしてなかった、ほとんどあんたに任せっぱなしだったし……
だから、あの黒服にもやられちゃって…またあんたを失うところだった」
あの時は自分も油断していたんだ。
そう言おうとしても声が出ない、上手に喋られない。
「あのさ、あたし…この仕事は向いていないと思うし、戦うのも好

きじゃない…
　けど…向いてなくても、耐えるから、あんたくらいに戦えるようになりたいから…」
いつになく真剣で、本気だという気持ちが伝わってくる、
これはもう断るような雰囲気じゃないし、私自身断るつもりは無い。
「あたしのせいで誰かがいなくなるなんて、もうヤだよ…
　だから、いつかでいいから、戦い方とか教えてほしいな…」
だめ？とエミリアは小声で付け加えた、私は声を出そうとしても出なかった。
だから首を上下に動かして、少しだけ動く腕を使い、手をエミリアの頭におき、そっと頭を撫でた。
「ありがと……レイ……」
その後の事はよく覚えていない…寝てしまったか、気を失ってしまったのだろう。
どちらでも問題ないように感じたのはそれほどまでに疲れていたからだろう。

――――――

「それで、レイはどんな様子だったんだ？」
クラウチはカフェにレイを呼んだことを後悔しているようだ、
少し傷ついたから来れないだなんて甘えてンじゃねぇぞという態度

だったのだが、
実際に来たレイは前身が血まみれになり、服は左右に引き裂かれた跡があった。
クラウチはそんなレイを心配し、ほんの少しの報告を受けた後、
レイはフラフラとカフェを出て行っていったようだ。

「傷は浅いが…切られている面積が多かったな
出血はしてない…傷は自分で縫合していたようだ…服も雑だが縫っていたな」

クノーは冷静にレイの今の状況を報告した。
彼女はカフェから出た後、フラフラで危なっかしかったので彼女を背負い、部屋の前まで背負った。
部屋の中まで背負ってもよかったのだが、本人が嫌がっている様子だったのでそのまま降ろした。

「エミリアは気を失っただけだが……レイにあれほどまでの重症を負わせるとはな…」

実際に幼い年齢でも、レイの腕前はかなりのものだ、
正直、俺とクノーが束になって勝てるのかどうかも危ういくらい強い人物だろう、
そんな彼女が大怪我をして帰ってきた、相手は恐ろしく手ごわい相手に違いない。
傭兵とは言え、子供であるレイを傷つけた挙句に、
貴重な文化遺産でもあるカーシュ族の村を焼き払うとは…許せる相手ではない！

「ともかく、だ。これからアイツら二人じゃ危なかしっくて任務に出せねぇ…

それで、だ。今さっき入社を希望してきたアイツらに任せる…これで大丈夫だろ」

「ちょっと待てクラウチ、その新入社員に任せて大丈夫なのか？」

「ソイツらは大丈夫だ、一人は元ガーディアンズだしな」

クラウチの言う新入社員とは恐らくレイとエミリアが一緒に戦っていた人物だろう。
彼らなら安心できる、しかし一人が元ガーディアンズだったとはな…予想外だ。
次の任務が危険かどうかは神のみぞ知る事ではあるが、二人の新入社員を信用していいだろう。
俺のパートナーの理由で俺ら二人が任務を共にできないのが少し残念さを感じるが、
同じような者同士で組んだチームを崩すつもりは無い、俺はこの結果で満足している。
それにしても…子供を傷つけ文化遺産を荒す輩など馬に蹴られて消えればいい…！
クノーに正気に戻されるまで俺は頭の中で怒り続けていた。

第二章ー３　ありがと……レイ……（後書き）

キャラ紹介その１

名前：レイ・ハークス
性別：女性
年齢：１５歳
種族：ヒューマン
職業：ブレイバー
容姿：ヴァルギリス黒×黄
髪型は３２タイプで金髪、アクセサリが５（アホ毛）
何も弄っていないストレートなのだが、アホ毛がぴょこんと立っている
瞳の色は黄色であり、ほとんど全身が黄色一色
身長は１３０ｃｍと最小、トニオとリイナと同じ大きさ
武器：スライサー＋ハンドガン
ウィップ＋シャドゥーグ
ダブルセイバー
ツインセイバー
ツインクロー
詳細：感情が乏しく常に無表情で受け答えする少女
どうして傭兵になったのかなど、自分の過去は決して語らない
戦闘能力はかなり高く、英雄にまで匹敵すると噂されている
事実原生生物を一撃、仕留めきれなくても２、３撃で倒している
なぜか大食いで、食事の量は普通の２、３倍は食べる

第三章ー1　苦痛に折れない心

「ん……」

眠りから覚めて最初に見たのはエミリアの寝顔、
エミリアはあの時のままここで眠ってしまったようだ。
私はベッドから起き上がろうとしたが、傷跡から鋭い痛みが走る。

「…！」

私はあまりの痛さに顔を苦痛に歪める。
胸元を押さえていると服は昨日の内に無理矢理縫い付けたものだ。
破れたのを縫い合わせていただけでなく、血の跡もついている、
もうこの服を着ることはできないだろう…長年着ていただけに、愛着も感じる服だったのに…
しかし、予備に同じ服がある為、その服に着替える為にドレッシングルームへ移動する。
ドレッシングルームの入り口はベッドのすぐ近くにあったので、
あまり動かずに移動できたというのはこの傷では大きかったかもしれない。

「……」

私は今着ている服と全く同じ新品の服を倉庫から取り出す。
今まで着ていた服は胸元が開くような構造をしていた、
しかし私は肌を露出する事は嫌いな為、胸元は隠すように縫い付けていた。
この新品も同じように縫い付けてゆく。

「……」

私自身の体が小さい為、胸元の大きさもさほど大きくなく、すぐに縫い終えた。
私は縫い終えた新しい服を着てドレッシングルームを出た。

「ふぁ……あ、レイ…おはよ」

エミリアは私が着替えるまでの間に起きていたらしく、朝の挨拶をした。
私の姿を見てホッとした後に続けてこういった。

「もう大丈夫そうだから…三人で話しても…いい？」

「問題無いです……」

すこし頭がクラクラするが、話を聞くことに問題は無い。
そしてエミリアから放たれる光、そこに現れるミカ。
ミカはエミリアが起きていても出現できるようになったようだ。

「呼びましたか？エミリア」

ミカは相変わらずエミリアの「保護者」のような雰囲気を出している。
エミリアの母親と言われても違和感は無いだろう…服装を除けば。
旧文明の人たちはみんな露出度が高い服を着ているんだろうか？
男性の旧文明人を見つけたらヘンタイがいるー！と叫ばざるをえない。

「旧文明人によるあたし達の抹殺計画を止めさせるにはどうしたら

いいのかなーってさ」

エミリアは短い文章の中でミカが言っていた事を簡単に述べる。
旧文明にもＳＥＥＤが襲来し撃退したものの汚染が酷く住める状態ではなかった為、
それに適応した人類を放ちそしてそれを奪うという計画だったハズだ。

「それは…これから探っていかなくてはならないのです…」

「…ようするに、何も決まってないってコトね」

拍子抜けである、自分から復活計画をやめさせてほしいというので、何か作戦があると思ったのだが…全くの無計画で、これから何をすればいいのか探ってくらしい。
ミカの話によると、旧文明人が眠っている空間'マガハラ'に亜空間実験で繋がってしまうと、
そこから旧文明人が現れて次々と体が乗っ取られてしまう。
しかしその旧文明人が眠っている空間「マガハラ」に繋がる確立は低いとの事。

「三惑星共同開発なんてでっかい話…どうやって止めさせればいいんだろ？」

「…一応上司のクラウチさんに話してみましょうか…？」

立場上、あんなのでも一応上司だが、こんな話をしても本気で信じるとは思えない。
それに信じたとしても何ができるのだろうか？
…しかし今の状況で話すべきなのはクラウチだ、あの人以外だと無

理だろう、多分。

「…どうせ信じてくれないよ。鼻で笑って、バカにされるだけ…
　それでも一応あたしたちの上司なんだし、話しといたほうがいいのかな……」

鼻で笑ってバカにされるのは間違いないが、グラールに危機が迫っているのは確実。
それを防ぐためにも少しでも努力していかなければならない。
かつて英雄達が守り抜いたこのグラールを旧文明人の手に渡すわけにはいかない。
エミリアはそれでも言うだけ言ってみる、との事でクラウチに話す事を決めたようだ。

「……っ！」

再び傷跡から強烈な痛みが私に襲い掛かってくる。
鋭い痛みに私は思わず座り込んでしまった、その様子を見てエミリアは心配してくれた。

「ちょっ…レイ！大丈夫！？」

エミリアは私の体を抱えてベッドに運んでくれた、とても助かった。

「…どうも」

私は小声でお礼を言った、なぜか恥ずかしくこれ以上大きな声を出すことができなかった。
それに気づいたエミリアはいいのいいの、と言うような仕草をしていた。

「レイは安静にしといたほうがいいよ。おっさんにこの話をするのは私だけで大丈夫だから！」

とエミリアはいい、私の部屋から出て行ったのだが…

ミカが何から困った表情をしていたのが私の心に突っかかっていた。

今は横になって寝ていたいので、初めてパートナーマシナリーを起動する。

ＧＨ４２０、ダンサータイプという青く猫耳のようなものを頭に付けているのが特徴だ。

基本的に頭の弱そうな言動が多く、一部のファンから熱烈な人気を誇っている…

しかし私はそんなアホの子に対しての特別な愛情を持っておらず、私がＧＨ４２０が欲しいと思っていた理由は青いし、猫耳が可愛かったから。

子供の頃に見たときの反応なんてそんなものだろう。

私のパートナーマシナリー、ニャンポコは眠りから覚めたように目をあけて、私を見つめる。

そして最初に発した言葉が……

「おはようポコ！ご主人様！！」

ぽ…こ…？

私はかつてこのタイプであるＧＨ４２０を見た事があるのだが、こんな変な語尾をつけてた記憶もないし、この時点で言葉のアホっぷりが凄まじい。

「どうしたポコ？ご主人様？」

ニャンポコが私の顔色を伺ってくる。

変な性格のせいで少し動揺してしまったが、私は何でもないコトをニャンポコに伝える。
すると満面の笑みでわかったポコ！と言いその場に座り込んだ。
…それにしても、ニャンポコは長いので面倒だからポコ、次からポコに改名しよう。
ポコはその場に座り込んで鼻歌を歌っている。

「〜〜〜♪」

正直、かなり下手だ、騒音以外の何物でもない、それに声が大きい、かなりうるさい。
これは鼻歌じゃない、騒音兵器だ、今度任務に連れて行くときはマイクを持たせよう。
私はポコに鼻歌を歌うのを止めるように言った。

「わかったポコ！」

下手な鼻歌をやめろ、と素直に言ったのだが、そんな言葉でも素直に聞くところを見ると、
頭は可愛そうでもパートナーマシナリーなんだな…と感じさせる。
ポコは…ポコだと何か足りない気がするので、ポコミに変えよう…
うん、それがいい。
ポコミは立ち上がり、広い空間がある方へ移動し、そのままくるくると回りだした。
…何かしないと機能停止してしまうパートナーマシナリーなのだろうか…？
ポコミの行動を見ていると、エミリアが私の部屋へ戻ってきた。

「…レイー戻ったよー」

瞳の色を失い、死んだ魚の目をしながら私に説明してくれた。
おっさんは信じず、ミカは普通だと見えず、エミリアは痛い子扱いに。
あまりの生気の無さと瞳の色の無さからこれ以上はほとんど何も言わないし、聞かなかった。
ただ、後でこっそりとミカから聞く話によると、
最初はエミリアは普通に説得していたようだがクラウチは当然信じない、
信じていないどころか、一方的に次の依頼内容の説明をしてたそうだ。
それでミカを見せて信用させようとしたら、ミカは普通の人には見えないようで、
そのまま危ない人を見る目でさっさと任務に行かせるようにしたようだ。
クラウチは私の傷が治ったと思ったか、大した傷じゃないと思っていたようで、
とっとと行くように命令したとの事だ。
確かに出血は収まったが切り裂かれた跡から痛みがある…けれども、
こんな状況で依頼をこなせないようでは、この先やっていけるはずが無い。
それと新たに入った新入社員、トニオとリィナを連れて行け、とも言われていたようだ。
最悪の場合だが、あの二人に頼りっきりにしてしまうのはどうしても避けたい。
…あの黒服に切り裂かれた傷跡からまだ痛みを感じる。
黒服に切られた瞬間に体が熱くなり、すぐに鋭い痛みを私の体に襲い掛かる。
痛いのは嫌いだ、二度と感じたくない…けれども、そんな理由で私は戦いをやめてはいけない。
こんな事で立ち止まってはいけない、私はもっと強くならなければ

ならない。
傷が痛いからといって休んでいる暇は無い、英雄に追いつけるほどに強くならなければ…
私はエミリアを無理矢理引っ張り出し、マイシップに乗り込み、トニオとリィナを呼び出し、私たちはミッションを遂行する事にした。

第三章－2　PSシリーズ名物ツインクロー使い

「……」

傷跡が今になってまた痛み出す
私とエミリア、トニオとリィナは今インヘルト社に来ている

「はぁ…」

エミリアもまたおっさんに変な目で見られたせいか元気がない
私も快調とは言えないが戦えないわけでもない
だから最初っから本気を出させてもらう事にした
今回の任務は逃げ出した原生生物の駆除
主に新種である「アスターク」という名の原生生物を一匹残らず殲滅してほしいとの事

「…エミリア、今は仕事中……」

「うー…分かってるよ……」

エミリアはまだ落ち込んだような態度で返答する
まぁ一応保護者から厨二病扱いされてしまってはこんなふうになってしまうだろう
私だってこうなってしまうかもしれない、むしろ信用できる人ならなおさらこうなる
エミリアを説得してなんとか普通に戻すように試みる

「エミリア」

「なぁに……？」

「この任務を成功させて信頼を得ましょう
…そうしたらきっと信じてくれますよ」

「…本当に？そんなんであのおっさんが信じてくれるかなぁ…」

確かに普段から堕落した態度をとっているクラウチは信用してもらえるかは不安なところだ
だけれどもそれ以上に人間であることに変わりは無い
だからこっちも本気だという事を全身全霊で向かっていけばかならず信じてくれる
私はそれを嫌というほど感じたからよくわかる、そのおかげで今の私がここにいる
どんな人でも必ず信じてくれるきっかけはある

「これで信用しないなら、次を頑張ればいいです
そうしたら、いつか必ずは成功を認められて信用してもらえるのですよ」

「そっか……信用を得ることか……」

エミリアはさっきまでの暗かった雰囲気は無くなり、普通通りになった
今一普通っぽくないと思うけれど、エミリアのいつもの雰囲気は普通じゃないから特に問題は無い

「さ、お喋りはここまでだよ」

リィナはあのエミリアのへこみっぷりからもう一度エミリアに説明

した
一度説明したハズなのにトニオがなぜかアスタークの事について疑問に思ってたりするが…
ともかくエミリアはやる気を出し、私たちは原生生物を殲滅するために先へ進む
…傷跡が若干痛みを感じるけど、またあの苦しみがいつ襲い掛かってくるかわからない
エミリアを鍛えさせるためになるべく前衛に出して自分は後衛に回ろうとしたけど…
もしかしたら倒れてしまうのではないか、最悪トニオとリィナに任せっぱなしになるのでは
それだけはどうしても避けなければならない
私は両手にツインクローを装備して先へ進む……

――――――

「なぁ……」
トニオはレイが装備しているツインクローを見てリィナに声をかける
「うん、あれって……」
「間違いないな、レイが装備しているのはツインクローだな…」
「うん、見間違いじゃないね……」
私は二人の会話の理由がサッパリ分からず、何を言っているのか、何を意味しているのか分からない

正直に何を言っているのか聞いてみる、そしたら

「今に見てればわかる」

トニオはそれだけ言い、黙ってしまった
リィナも同じような意見らしく、そのまま何も言わなかった
ドアが自動的に開く、現れる原生生物
私は武器を構えた瞬間――目の前の原生生物は殲滅していた
一体何が…？と思ったら横からトニオが説明をした

「レイは天才的な' ツインクローの達人' なんだよ
聞いた話だと、子供の頃に武器を持った瞬間に使いこなしてたみたいだぜ？
攻撃の仕方、どうしたら破壊力が出るか、どうしたら素早く振れるのか、とかな…」

「へ～…レイって戦う事の天才だったんだ……」

私はここで納得する、あの化け物じみた強さは天才的な才能だって事
それならレリクスで一人で戦ってたりするのも頷ける
…けれど、それならレイを殺しかけたあの黒服は…？
考えながら先へ進むとトニオはさっきまで考えていた事全てを否定した

「レイはツインクローを使うのが上手なだけで
昔は戦闘とか絶対にしない！って言ってたようなガキでな…惜しいな、とは思ってたんだが…」

まさかこんな事になるとはな、と付け加える
レイはレリクスを攻略する時はスライサーで殴っていた

黒服の時もスライサーで攻撃を受けようとしたら切られた
レイは最初っから本気を出していないって事かな……？

「ガーディアンズだった時もまさかレイが傭兵やるだなんて夢にも思ってなかったからな…」

「…え？トニオってガーディアンズだったの？」

「そうだ、アイツの兄貴と知り合いだったから最初に見たときはビックリしたぜ」

一瞬、私の頭をよぎる嫌な記憶…
それが何だったのかは思い出せなかったけれど、私はガーディアンズが嫌いだ

「……」

正直、この二人がガーディアンズだったなんて…
ガーディアンズなんか信用できない、でも元って言ってあったし
まだ本職じゃないだけマシなのかな…

「これで…最後っ！」

レイは三匹同時に出てきたアスタークを倒し、この研究所内にある原生生物の大体は駆除された

「今のでアスタークは最後だね、他の原生生物も倒しちゃったみたい」

レイは現れた瞬間に倒すか吹き飛ばすかのどっちかをしているから

私たちが手を出す暇が無い、私は勿論、トニオとリィナもレイの足元には及ばないのかも…

「でも…なんで警報が鳴り止まないのかな？」

リィナはこの鳴り止まない警報に疑問を持ち始めていた
この会社にはほとんどの部分に監視カメラが付いていて部屋のほぼ全てを監視する事ができる
あたし達の行動も全て見られているから警報が鳴り止んでもいい頃なんだけれど…
インヘルト社の社員が前から走ってくる、何かあったのかな？

「あぁ！リトルウィングの方ですね！よかった、お待ちしていたんですよ！」

奥から冴えなさそうな顔をした男性社員が待っていた、という
説明を聞くと、どうやら今度はマシナリーが暴走してしまったようだ
原因については不明…なんだけど、引っかかるところがある

「あの、マシナリーってどんな種類のがあったの？」

私の疑問にすぐ男性社員は答える
ＧＲＭ社のマシナリー、小型密集系とグリナ・ビートが数機
その多機種が一斉に暴走してしまうなんて、どこか制御等が狂ってるしか考えられない

「もしかして、何かリーダー的なのがいない？
グリナ・ビートよりもおっきいやつ」

「は、はい。最新鋭の「レオル・バディア」が試験稼動しています

が……」

「やっぱり？多分、それの制御装置が壊れてる。
そこから飛ぶ混線命令で、全マシナリーに影響が出ちゃってると思う」

考えるよりも先に言葉が出ていた
でもこれ以外には何も考えられないし、レオル・バディアが原因でほぼ間違いない

「それじゃあ、「レオル・バディア」
ってのを倒せば終わるって分かったから、早く止めよう！」

トニオは何か考え事でもしてるのか手を顎に当てている
レイは……

「なん…だと……？」

ツインクローで暴走していた為か、レイはぱたり、と倒れてしまった

「ちょ、大丈夫！？」

私が心配して声をかけるけど、レイの目は渦巻きでグルグル回っているようだった
トニオとリィナ、男性職員も気になってレイの周りに集まってくる
これじゃあレイは戦えないしマシナリーも鎮圧しなきゃ…どうしよう……

第三章ー3　エミリアの固い決意

「どうしよう……」

私の不安の声は自然に出てしまっていた
一人でツインクローを使って原生生物を倒していたレイが
ここにきて急に倒れてしまった…
私が少しでも戦えるようになっていれば
こんなにレイを過労させる事もなく、傷つける事もなく
レイを無事に任務を終了させる事ができたのかな……
無力な自分が堪らなく憎くなってきた

――――――

「くっ……」

頭が痛い、傷跡が疼く…
それでも私は無理矢理体を起き上がらせる

「……っ！」

トニオとリィナも私を心配そうに見ている
こんな事で倒れてしまうだなんて…とても情けない
エミリアは座り込んでうつむいてしまっている

「……っ！」

私は傷の痛みも頭痛も頭を振って振り払おうとした
こんな程度で倒れてはいけない、この程度で倒れてしまったら先が思いやられる
とにかく任務を成功させて、エミリアをクラウチに信用させなきゃいけない
その為にも私は頑張らなければならない

「エミリア…」

私がエミリアに声をかける、エミリアははっとしてこっちを見る

「私はもう大丈夫、だから先へ進もう？」

私はエミリアに手を差し伸べる、しかしエミリアは手を出して立ち上がろうとはしない
なんとなく分かる、今エミリアがどうなっているのか、何を考えているのか

「エミリア……色々考えるのは後、今は任務が先ですよ……」

「…うん」

暗い雰囲気のままだけれど、このまま放っておくと任務が失敗してしまう
悪いけど、説得をしている暇はない
それにトニオとリィナに前衛を頼み、私とエミリアは後衛に回るように頼んだ
三人はそれを快く受け入れてくれた、とてもありがたい
陣形と立て直した私たちは暴走したマシナリーを鎮圧させる為、
亜空間研究を開発しているといわれている奥の研究施設へ向かった

――――――

前にでた二人のコンビネーションは凄いものだった
片方が倒し損ねたマシナリーを隙を見て倒している
とにかくお互いを知っていなければこれほどまでのチームプレイは
できないだろう
道中、ミカが出現して亜空間実験で旧文明人が眠っている空間「マ
ガハラ」に
繋がる確立はほとんど0に近い……のだけれど、鍵が揃うと状況が
変わってしまうそうで
その鍵とは一体なんなのか…と聞こうとしたら前衛を任せていた二
人に置いていかれそうになって
二人の後をついていって……ついにレオル・バディアがあるという
部屋へたどり着く
とても広い円形のドーム、その上から降りてくるレオル・バディア
そして……

動かなくなったレオル・バディア

足が折れ、真ん中にあるコアのようなものが丸出しの状態で落下し
た為
コアが落下のダメージで壊れてしまったようだ

「なんじゃそりゃー！」

トニオが叫ぶ、私も叫びたい
今にも倒れそうな意識を無理矢理なんとかしてここまできたのに…
両方の意味で倒れそうだ、正直倒れるのが許されるなら倒れたい
エミリアは折れている足を調べている

「はぁ……」

私はため息をついてその場に座り込んだ

――――――

おかしいな……
あのレオル・バディアってマシナリーの足が折れていた
その落下の衝撃で足が壊れたのかどうかしらないけれど、
落下するって事はその衝撃に耐えられる耐久度を持っているはずだ
だけれども落下したら足が折れ、中心のコアが潰れて機能が停止した
ひょっとしたら何かあるんじゃないか…と思い折れた足を調べる
やっぱり何かあった
何者かによってレオル・バディアの足は切断されていた
それも、とても鋭利な刃物で……
それだけじゃない、切られているコードがとある場所をマシナリー
に攻撃しないようにされている
それがどこだがまでは分からないけど…どういうことなんだろう

「…ん？誰か来るよ？あの人は確か、ニュースで見たことが……」

リィナはこちらに歩いてくる男性の影を見つける
そしてその男性はこちらから話しかけてきた

――――――

「リトルウィングの皆さん。どうもありがとうございました」

こっちに来たのは初老の男性で、なんだか偉そうな服を着ている
多分この会社の社長か何かだろう
その偉そうな人は深々と頭を下げてお礼をした
インヘルト代表の「ナツメ・シュウ」というらしい、最近テレビを見る機会が無かったから
この代表者の人はもちろん、亜空間研究の事もつい最近になって知ったことだった
今回の事故は警備を厳重にしすぎた結果、逆に仇になってしまったようだ
亜空間の技術は旧文明による技術を今の技術で使えるようにしたのが亜空間研究だそうだ
そんな話を聞いて、私たちは任務を成功させてリトルウィングに戻った
これでエミリアを信用してくれるといいのだけれど…

――――――

「オカエリナサイ♪シャッチョサンが事務所でお待ちネ
レイとエミリア。お二人サン、ご氏名かかってるのヨー」

「うぇっ！？あたし、なんか悪いことしたかな……」

なぜかエミリアは悪いふうに感じているみたいだ
行ってみればわかる、というより行かなければなるまい
なぜかエミリアは覚悟を決めた！と言って事務所に入っていく
しかしエミリアの予想とは違い、クラウチはエミリアを褒めきっていた
最初はエミリアは戸惑っていたけれども、途中でやっぱ怒られるのかなーって感じをしてたけど
結局褒められまくって逆に同様しまくっているようだ
そしてクラウチは私たちに給料を渡して去っていった、多分酒を飲みに行ったのだろう

「ねぇ、私たち、きっと褒められたんだよね…？」

「きっと、じゃなくて絶対褒められてますね」

「うん、でも……」

エミリアは暗い表情のままだった
普通なら喜んでもいいような状況なんだけれど……

「私、ほとんど戦闘じゃ役に立ってないからさ……
あの時も、アンタはぐったりしてたのに、私なんてほとんど何もしてなくて……」

そういえば、あの時にエミリアに戦い方を教える、とは言ったもののまだ基本も何も教えていない、だから戦闘ができないのはしょうがない事だって

けれどもエミリアはそれが不服で、それに私も教えると言っておきながら、まだ何もしてないし…

「…わかった。それじゃあやりましょうか」

「でも、アンタはかなり無理してるから……」

確かに、傷跡はかなり痛い
けれどもこんなの大丈夫だ…と思ったけれども
そろそろ本格的に意識が飛びそうになる……
マズい、私が休んでいて勝手にエミリアを訓練させようか？
それじゃあ訓練にも練習にもならないと思う……
……久しぶり呼んでみようかな？大問題なあの人を

「エミリア、私が戦闘を教えなくても大丈夫ですか？」

「…うん、訓練とかできるなら誰でもいいよ」

「…その前に約束、できますか？
一つは過度なスキンシップをされても文句を言わない事
二つ、うるさい声は気にしないこと
三つ目はかなりキツい訓練だけれどちゃんとやりとげる事
…これを守れたらあの人を呼んでエミリアを特訓させようと思います」

「私は…早くレイと肩を並べて戦えるようになりたい
それに、レイは私のせいで一度死んじゃってるから…今度は私が！」

エミリアの決意はかなり固いようで、こっちが理不尽なルールを出

しても
それを受けて訓練に励む姿勢を見せる、これなら大丈夫だろう

「それじゃあ……」

私はある人物のパートナーカードを取り出して、その人に連絡した
これが、三日だけのエミリア強化計画の始まりだった……

第三章ー3　エミリアの固い決意（後書き）

俺「よくあるキャラとの会話コーナー！
　ちょっとだけやってみようと思います！」

レイ「……」

俺「えーっと、レイちゃん？」

レイ「気安く呼ばないで……」

俺「……」

レイ「……」

俺「最初はこんなキャラにしようとしてました
　けれどもストーリー進まないのでデレを入れました
　作者自体ツンデレ嫌いだしね！」

レイ「……」

俺「……なんか反応してよ…」

レイ「……」

俺「ちなみに、次回はオリジナル回です
　嫌な人は飛ばしてみてね」

レイ「……」

第三、五章－1　エミリア特訓計画（主不在）（前書き）

ストーリーとはあまり関係の無い番外編が始まります

第三、五章－1　エミリア特訓計画（主不在）

エミリアとレイは事務室で待機していた
これから来るエミリアの訓練をしてくれる人物を
普通ならレイの様子からマイルームで待機していてもよかったけれども
あの人はちょっと‘普通じゃない’からここであの人を待っていないといけない

「ねぇ…ちなみに、これから来る人ってどんな人なの？」

エミリアがレイに対して質問をする、レイは特にこれから来る人物について何も言わなかった
言わなかったけれども、むしろ言いたくなかった、という態度の方が正しいかもしれない

「……」

レイは相変わらず黙っている、喋る気は一切ないようだ
エミリアもそのまま黙ってしまった

「……」

ドアが開く、レイは警戒し、エミリアは期待した
そこから現れる人物、それは間違いなくレイが呼んだ人物だ
髪の色は緑で、ポニーテール
全体的に緑色が多いビーストの女性だ
彼女はレイを見つけると、素早く移動してレイに抱きついた

「久しぶり～～～～！」

この事務所全体に聞こえるような大声で叫ぶように言った
レイはうるさそうな表情をして耳を人差し指で閉じる
今は事務所は誰もいないからいいものの、誰かいたらかなり迷惑になっていただろう

「も～！レイちゃんがいなくなって二年間、ずっと探してたんだからね！」

それから色々とレイを心配するような事を延々と言い続ける女性、
よく終わらないものだ
途中、エミリアが痺れを切らし、質問を始める

「あのー……この人は…？」

視線を抱きしめているレイから質問をしてきたエミリアに変える

「む？君がエミリアちゃんかな？レイちゃんから鍛えてほしいって言ってた子？」

「はい、そうです……」

ビーストの女性に圧倒され、少し気弱な発言をしてしまうエミリア

「私、エリスってゆーの！気軽にエリスって呼んでね！」

名前を名乗っただけで特に自己紹介はしていない、
本名エリス・バークハード、彼女が後ろの名前を言わない理由は
本当に信頼した人しか名乗らない、とは言っているが、パートナー

カードに記載されていて丸分かりだ
けれども本人は気づいていないようで、信頼したと思い後ろの名前を言ったら
全員が全員「知っている」と言い、そこで「なぜ分かった！？」というのがお決まりのパターンになっている
私もやったし、知人もほとんどやっているし、感情的なキャストもやってるから、もはや間違いない
エミリアも仲がよくなったらやるのか…むしろ仲良くなれるのか、それが心配だ
ちなみにエリスはかつでヴィヴィアンというキャストと共にＨＩＶＥからＳＥＥＤの射出を阻止した
元ガーディアンズで裏の世界ではグラールの影の英雄と言われているではない人物だ
勝手にＨＩＶＥに進入し、そのＨＩＶＥを勝手に破壊した事からガーディアンズから退職処分を出されてしまった
本来なら進級ありでも良かったのだが、彼女の性格とヴィヴィアンの問題から二人のコンビは
かなり上層部から煙たがられていて、この際だから退職させてしまうという事になったそうだ
本人は特に気にしていない様子で、それはそれで自由気ままな生活を楽しんでいるようだ
ヴィヴィアンとは常に共にいたパートナーなのだが、理由があって別行動をとっている
ここ二年は会っていないのだが、連絡はとっている為、お互いの生存や状況は理解している

「えーっと…それで、エリスさん？」

「エリス！」

無理矢理にでもさん付けされてしまうとこれからが大変だとレイは
事前に言っておいた
だからここで無理矢理さん付けしてしまうと何が起こるかわからない
エミリアはそのまま呼び捨てで呼ぶ

「じゃあ…エリスがあたしを鍛えてくれるんだよね？」

「うん！任せてー！三日でものスッゴく強くなるからね！
主に接近戦とか強くなれるから！だから頑張ろう！」

そのまま有無を言わせずエリスはエミリアを引きずりマイシップへ
と移動した
レイはその様子を見てマイルームへと戻り、そして寝た……

第三、五章ー2　訓練後の食事風景（過労死寸前）

「これで最後っ！」

エミリアはセイバーでライジングストライクを放ち、最後のエネミーを倒した
息を切らし、汗まみれでこれ以上動けないと全身でアピールしている様子は
エリスの訓練の過酷さを物語っていた

「よっし！これで任務兼特訓完了！
ひとまずリトルウィングに戻ろうか！お腹もすいたしね！」

「はぁー…やっと終わりかぁ…厳しいなぁ…
レイもこんな訓練して強くなったの？」

エミリアはエリスに対して質問するが、エリスにとってそんな事はどうでもよかった
とにかく早くリトルウィングへ戻ろう、と言い引きずってマイシップへ移動する
その理由はエミリアの訓練を受けるにあたって条件が一つあった
たった一つの条件、それは「レイの手料理を食べたい」という条件だ
エリスは昔、レイから料理を振るわれたことがあり、
その際に驚いたのが味が美味い事と、レイ自身がよく食べる、と言うこと
エリスはレイと同じくらいによく食べる、昔どっちがよく食べるか勝負だと言った時に
食事は勝負ではありませんと年下の子供に注意されたりしていた
だから大食い勝負はしていないのだが、勝っても負けても本人は特

に問題なかったりする

「さーて！そろそろ戻ろうか！」

二人はマイシップへ戻り、リトルウィングへと戻った
途中、エミリアは質問する事があったけど、エリスは一度も答えなかった
エリスは献立がどんなのだろうとか、料理の味が変わってないといいなとかしか思っていなかった

――――――

リトルウィングに帰還した時、チェルシーから通信が来る
連絡によると、カーシュ族の子が目を覚ましたという
レイは既に接触しているからエミリアも来てほしい、という事で
リトルウィングの事務所に行くと

「……」

「……」

二人座りながら黙り続けている
正直、こんな状況じゃ自分から話しかけるのはつらい

「カーシュ族の子がなんであんな所にいるの？
　珍しいからって誘拐しちゃ駄目だよー」

いた、空気を読まない人がエミリアのすぐ隣にいた

とりあえず何だか喋るなら今の内かなーって事で無理矢理声をかける
「私の名前、エミリアって言うんだ、ねぇ、あんたの名前は？」
とりあえずまず名前を聞いたエミリア、いつまでカーシュ族の少年だと長いし覚えにくいし名前じゃない
「ゆ、ユート……ユート・ユン・ユンカース」
少年は仕方なく、といったように名乗る
やけにユが付く名前だ、あだ名でユユユとかユー3とか呼ばれても仕方が無い
こんな状況に痺れをきらりたエリスが半ば叫ぶようにいった
「ねぇねぇユート君！お腹すいてたりしてないかな！」
エリスは早く食事にしたいようだ
それにユートもエミリアも食いついてきた
「ちょっとだけ、すいてる……」
「あ、それアタシもー…ずっと練習中だったからね…」
二人も空腹を訴え、それをいい事にエリスはレイに主張する
「それじゃあ決まりだね！条件は守ってもらうよ？レイ」
ちょっと脅すようにレイに言う、仕方が無いというような顔で立ち上がり、
マイルームへ向かう、それに続いてエミリア、ユート、エリスと続

いていく…

――――――

「おいしい！これ、おいしいぞ！」

ユートは二人分ほどの料理を食べながら素直な感想を述べる

「ね？おいしいでしょ？レイの作る料理は絶品なんだよー！」

エリスもレイの料理も褒める、昔のレイと同じ料理で、同じ味を保っている

レイの作る料理は上手だ、その美味さはレストランで作るコックのようなものではなく

家庭で作る料理、いわゆるお袋の味、というような感じだった

「すっごい…レイってこんなに料理上手だったんだ」

エミリアも黙って料理を食べている

二人とは違って普通に食べている…というより二人ががっつきすぎている

「おかわりー！」

「こっちもおかわり！」

二人は次の料理を食べようとした

レイは必死で料理を作り、ポコミはそれを運んでいる

エリスだけならまだしもユートが加わってレイの調理の進行度は遅れていた
かなりの激務にレイは何度か倒れそうになった

「……」

それでも弱音を吐かずに黙って調理を続ける
それがレイの今なすべき事なのだから

「……」

――――――

「ふぅ……」

レイはようやく二人が満足する程の料理を作り、やっと休憩をしていた
エリスとユートだけでなくエミリアまでもデザートを要求し、今は冷凍庫で冷やしている最中だ

「ねーまだー？」

エリスは子供二人より気が短いのかレイに対して催促するように言うけれども冷蔵庫が仕事をしない限りはできない事だからこればっかりは待つしかない
その時、エミリアが空気を読んでくれたのかエリスに対して質問した

「ねーエリス、あたしって訓練しててどうだった？」

今回のエミリアの訓練の結果をエリスに聞いた
エリスはさっきまで子供みたいにおやつを催促していた人とは別人みたいに答えた

「んー35点、でも戦闘経験ないんならかなりの高得点だね
本当に戦闘経験なんですか？って感じだね、このまま行けば接近戦はなんとかなるよ」

でもね…とエリスは付け加える

「テクニックも見たところまだまだかな、これは教えられないけどね……
私は接近戦の専門だからテクニックは無理かな……私の知り合いにもテクニック上手なのいないし…」

レイはちょっと真面目なエリスを見てちょっと驚いていた
昔からレイにとってエリスは私によく料理を頼む人だ…というイメージしかなかった
それから接近戦にはかなり強く、昔は力強い戦法を好んでいたから「暴君」なんて呼ばれていたそうだ
本人は当時それを知らなかったし、しっても「へ～」としか言わなかった
この話に興味を持ったのか、ユートが会話に割り込んでくる

「もしかして、おねーさんって今修行してるのか？」

ユートの言葉を聞いたエリスがおねーさんという言葉に反応したのかすぐ答えた

「私は修行してないよー！だけど今エミリアの修行を見るように頼まれてるから
…ユートも一緒にやる？」

「やる！修行ならやるぞ！」

「それじゃあ決まり！明日からよろしくねー！」

こうしてエミリアの訓練にユートが加わる事になった
エミリアの訓練はまだ続く……

「できました……」

レイが冷蔵庫で固めていたのはプリン
三人の中で特に反応したのはユートだった

「おいしい！これすっごくおいしいぞ！」

「ホント！レイはデザートもうまいんだね！
おねーさんレイの料理なら毎日食べてもいいなー」

「うん！これから毎日作ってくれって頼んじゃうかも！」

三人から絶賛の声、レイはベッドで横になりながらその反応を聞いた
レイは表情が見えないように壁を向けてねていた

「えへへ……」

レイは心底嬉しそうに笑っていた
誰にも聞こえないように小声で笑っていた

（レイ…なんだか嬉しそうだな）

（レイ…このまま笑ってくれればいいだけど……）

二人にはすっかりバレていた
エリスはこういう雰囲気に鋭く、たまにカリスマ性を発揮する事がある
ユートは感…のようなもので感じていた
エミリアにはレイが笑っていた事に気づいては無かった

――――――

「なん…だと…？」

パートナーマシナリーのポコミは主人から皿洗いを命令された
洗い場にある皿の量は尋常ではなかった
天井近くまである皿の量、これを全て洗えと言われていた

「ぽ…こ……」

洗う前から既に倒れそうなポコミだった

第三、五章ー３　二日目の修行内容（輝ける者）

エミリア特訓計画から二日目
エリスはエミリアとユートを呼び出し、マイシップで移動する
移動した先はモトゥブ、ローグスからの依頼で大量発生した原生生物を駆除してほしい、
という依頼だった、駆除してくれれば何日かかっても構わないと依頼主が言った為
それを利用してエミリアの訓練に利用している
ちなみに何でローグスからの依頼を受けているか、というと
ガーディアンズから退職された後に、ヴィヴィアンと共にしばらくローグスに入っていた事があり
しばらくして理由があってモトゥブを旅する事にした

「さて、それじゃあ訓練開始！」

エミリアとユートの二人にまず原生生物を倒させる
その後、その動きを見てどこをどうしたらいいかという訓練をしている

「ふふん、エミリアはかなり頭良い子みたいだね
　言うことをどんどん吸収してそれをすぐ使い、応用している…」

かなりデキる子だね、と誰にも聞こえない声でつぶやく
エリスはそのまま二人の訓練を見守り続けている…

――――――

「今日はこんなものかなー」

二人はすでにかなり疲れ果て、ユートは息切れてるだけだが、エミリアはもうこれ以上動けないと言い
その場に寝転がって休んでいた

「あの方の訓練は厳しいですね……」

エミリアに宿る旧文明人の精神体、ミカがエミリアに言う

「すっごく…苦しいけど……これでレイと一緒に戦えるなら……
もっと訓練したいし……このくらい…なんとも無い…から……」

息切れをしながらエミリアはミカに答える、ミカは普通の人には見えないから
会話も普通なら聞こえない、けれどもさっきのエミリアのセリフは聞き取り方によっては独り言にも聞こえる
だから特に問題は無かった

「うーん、そんなに厳しいかな…？
でも、短期間で鍛えろって言われてるし…スパルタになるのはしゃーないよ～」

「そうだぞ！それにもっと沢山修行しないと…
大地神さまを取り返せるくらいに強くならないと…！」

「だって…私、あまり運動もしてないし…
って、二人とも！ミカの声聞こえてるの！？」

エミリアはかなり驚く、ミカも同様に驚愕した
普通ならミカの存在は見えないし、聞こえないのに二人はミカの会話に反応していた

「え…？普通にその、エミリアの横にいる人…
…もしかして、幽霊？」

「ミカって、そのエミリアの隣にいるおねーさんの事か？」

二人は存在まで確認できているようだ
エミリアはミカに問う、なぜならレイとエミリアのみでしか確認できないと思っていたからだ
エミリアは宿主だから、レイは体を復活させたからミカの存在を確認できる
けれども、この二人は？ミカが見える理由が無い

「わかりません…クラウチという方には見えなかったようですし、
なぜ、あなた方に私が見えているのか……」

「…もしかして、幽波紋ってヤツ？
それなら名前はミカって呼んで「輝ける者」って書いたりして？」

「ちがーう！そんなんじゃないよ！」

「…エリス、すたんどって何だ？ミカはすたんどなのか？」

だんだんと話がややこしくなっていく
結局理由はわからずじまいで終わり、二人はリトルウィングへと帰る道中、ミカは大地神さまっぽいとユートが言っていた
大地神さまの正体はレッドタブレットといい、あの黒服が持ってい

たノートのような物がそうだ
ミラージュブラストの技術もそのレッドタブレットに記録されていたようだ
今日あった事全てをレイに話すと

「そうなんですか」

あまり反応は無かった、特に興味を持たないようだ

「……」

その反応にエリスは真剣な表情で考えている
何を考えているかはわからないが真剣だから変な事は考えていないだろうと思っていた
エリスは今、今日の献立は何だろうな～と考えていた、初日と同じ思考だった

――――――

「ふぅ……」

全員分の食事を出し終え、レイはベッドに寝転がる
ポコミは再び洗うべき皿の量を見て絶望する、それがここ最近の出来事だ
今回、デザートをプリン以外の物に変えたらユートがプリンを食べたいといいだし
急遽プリンを作る羽目になってしまった…
怪我をしているから休みたいけどエミリアを鍛えたいという事から

エリスを呼んだのだが
これじゃあ一日中寝ていられない…とはいえ、傷は治ってきている
ので特に問題は無い

「……」

レイがエリスと知り合った理由、それは兄が連れてきたから
その時は料理を始めたばかりで上手にできなかったが、それでも美
味しいと食べてくれた
少なくとも兄の使っていたパートナーマシナリーと同じくらいだっ
たが、
あの時は色々と複雑な事情があり、レイに料理を任されていた
それから徐々に料理の腕が上手くなり、色々な料理も作っていった

「……」

褒められる事が嫌いな女の子はいない、とあの人がこっそりと言っ
ているのを聞いた
普段から兄に褒められて、それで嬉しくなってもっとしてほしくて、
上手になっていたのを思い出す
……今の私には褒められなくても上手になるしかない、もっと強く
なりたいという願望をレイは持っている
でも今エリスの修行に参加すると傷口が開いてしまうかもしれない
危険性もあった為
しばらくは安静にする事にしたレイ、ベッドで横になったレイはこ
のまま眠りについた……

第三、五章－４　訓練の終了（荒ぶる暴君）

「これで……最後っ！」

エミリアはセイバーを使って原生生物を倒す
この瞬間にエリスの訓練は終了を告げた

「よし！これで終わりだね！
　エミリアもかなり強くなったよ～！」

と言い、エリスはエミリアに抱きついて頭を撫でる
抱きついて頭を撫でるのはエリスにとって最強のスキンシップだと思っている
実際にエミリアはかなり満足そうな顔をしている

「ねぇ…あたし、強くなったかな？
　レイと一緒に戦えるくらい、強くなったかな？」

エミリアは疑問に思う
本気と言ってツインクローを装備したレイの化け物じみた強さ
それ以外でもスライサーを使った強引だが強い戦法
あんなものを見せ付けられると戦力差が圧倒的なのがわかる
その疑問に対してエリスは自信を持って答える

「うん！じゅーぶん強くなったよ！大丈夫！自信を持って！
　接近戦だと昔に比べればかなり強くなってるから！」

エリスからかなり評価され、エミリアのテンションはかなり上がった

「そっか…あたし、強くなってるんだ……」
心の底から笑顔を出しているエミリア、エリスはそんなエミリアを見て微笑ましく感じている
しかし、エミリアは満足しているがユートは不満足そうだ
「…エリス、こんなんじゃ修行し足りないぞ……
たった二日じゃ、全然強くならないぞ？
修行はたっくさんして、それから強くなってくものだぞ？」
そのユートの発言に対してエリスは答える
「うーん、今回はエミリアを短期間で修行させて…って言われてるしなー
それに、エミリアの場合は私は動きを教えただけだから、修行というか勉強かなー
ユート君の場合、戦闘経験よりももっと他の経験を積んだほうが強くなると思うよー？」
ユートはカーシュ族の戦士だからエミリアよりは強い
けれども、欠落している「何か」がある、それをエリスは見抜いていたが、言わなかった
言ってしまえばそれを自分で理解せず、成長しないからだ。
ユートは納得できないようだが、これ以上聞いても無駄だということはユートも理解していた
「うー、さてと、これでお別れかなー」
「えっ！？ここで別れちゃうの？
レイの料理を食べてから別れると思ってたのに……」

「それもいいんだけどね、私の仲間が近くまで来てるし、私にはやらなきゃいけない事があるしね…」

エミリアとユートはエリスの別れを惜しんだが、
エリスは二人にパートナーカードを渡し、後ろの名前を名乗った。

「私さ、フルネームはエリス・バークハードってゆーんだよね！」

「うん、知ってるけど……」

「なぜ分かった！？」

エリスは本気で驚く、二人は呆れる…
これも何人の人がやっただろうか、通過儀礼のようなものである

――――――

エリスは二人の乗る船を見送る、船は上昇し、そのまま宇宙へと飛び立ち、その姿は見えなくなった
そこに現れる‘二人’の影、一人は白いキャストでエリスの相棒でもある、ヴィヴィアンだ

「よかったの？カーシュ族みんなは知り合いじゃなかったっけ？」

「私はまだあの子と会う資格は無いと思います」

それに、とヴィヴィアンは付け加える

「私はまだカーシュ族の村を発見してませんし…
あの子に村が無事だって分かるまでは行動を起こさないつもりです」

エリスはうんうん、と首を上下に動かす
そしてヴィヴィアンの隣にいるピンク色のキャストに言う

「レイがいないのは寂しかったんじゃない？カノン。
今から会いに行っても遅くないと思うんだけどなー？」

ピンクのキャスト、名前はカノンといい、彼女はエリスの言葉は答えなかった
黙って首を振り、空から飛んでくる悪意の方向へ視線を移動する
それを見たエリスとヴィヴィアンはカノンを同じ方向を見る
その方向からは空から飛んでくるディマゴラス、それも二匹が同時にこっちに飛んでくる
本来のこのローグスの任務、それは三匹のディマゴラスの討伐が本来の目的であり
そのついでに原生生物も駆除してくれ、というのが本当の依頼だった
エリスがリトルウィングに戻らない理由はこれにあった
二人を守りながらではこの三匹を討伐する事はできない、しかし

「このっ…！せっかくのご馳走食いそこねたんだ！この怒り、ぶつけてやる！！」

エリスとヴィヴィアンとカノンならば、三匹でも倒すことが可能だ
光がエリスを包み、大きな獣人へと姿を変える、ビーストのみが使えるブラスト技、
その名も「ナノブラスト」、エリスは白いキツネのような大きな体

へと変化した後
地上に降りた一体のディマゴラスに飛び掛り、羽を毟り、顔を全力で殴り、吹き飛ばす
「ウラァァァァァァッ！！」
別のディマゴラスの拳を素手で受け、その拳を力のままに破壊する
そこにはかつてガーディアンズから「暴君」と呼ばれていたエリスの姿があった

――――――

「え？帰ってしまったんですか？」
ちょっと意外そうにレイが言う
食事も既に用意済みだったのに、食べないで帰ってしまうのは予想外だった
エリスは報酬の一つとして食事を要求してきたのに……
今はユートしかテーブルに座っておらず、そのまま用意されていた食事を食べ始める
「うーん、それにしてもさ、レイ」
エミリアは疑問に思ったことを口に言って出す
「あれだけの食料費…いったいどれだけ使ったの？」
レイは黙ってエミリアに家計簿を見せ付ける、明らかに赤字だった

「うわぁ…ボーナス使い果たしてるじゃん……」
エミリアはよくこんなに食材に金使えるなーと思い
率直な感想を述べる、けれどレイは…
「好きな事にお金を使ってますから…」
と、エミリアに言った
その時エミリアは自分のボーナスはまだ一回も使ってない
「好きな事にお金を使う…かぁ…いいこと思いついた！」
エミリアはレイのマイルームから出ていく
そしてしばらくしたらエミリアは自分の身長以上はある包装された箱、
いわゆるプレゼント箱を大量に持ってきた
「ただいまー！へっへー、ショッピングフロアでいろいろ買ってきちゃった」
エミリアは買ってきた大量の荷物を一旦置き、一番大きい荷物を私に渡す
「はい！レイにあげる！」
レイは黙って受け取り、包装用紙を剥がし、中身を見る
中身はカクワネのヌイグルミ、決して可愛いといえるデザインではないが、女子供には人気があった

「……」

レイは何も言わない、けれども雰囲気がとても欲しかった物を手に入れた喜びをだしていた
小さいころから小さくて可愛いキャラクターのグッズで部屋に沢山飾りたいと思っていたからだ

「後、レイにはもう一つ…その、あたしの為にエリスとか呼んでくれて…
　その…いろいろとさ……ありがと」

「……どう、いたしまして…」

レイはぬいぐるみで顔を隠しながら言った
ぬいぐるみの事を気に入ったようでそのまま抱きかかえていた
しばらく二人は笑顔だった、あの警報が来るまでは
突然響くアラーム音、赤く光るマイルーム、そして流れるチェルシーの声

「リトルウィング全社員に連絡、非常事態発生デス！
　クラッド6、リトルウィング管轄ブロックに武装した集団が侵入しまシタ！
　これにより、該当ブロック及び店舗は被害縮小の為閉鎖されマス」

ホールから響く銃声、赤いアラーム、この事態は異常だった
レイとエミリアはホールへと向かう、マイルームへ続く入り口以外は全て閉鎖されていた
マイルームへ続くドアが開く、ホールの中心部にはこちらに銃口を向ける侵入者が三人いた

「…エミリア、気をつけて。
あなたに向けられた強い敵意を感じます…この方々は、あなたを狙っている…」

ミカはエミリアに警告する、理由はわからないが、なぜかエミリアを狙っているようだ

「や…何であたし…？」

エミリアは怯え、レイの後ろに隠れるように下がっていく
レイは黙ってツインクローを装備し、エミリアを守るため、侵入者に対し敵意を見えた
侵入者は銃の引き金を引こうとした瞬間…
上空から降りてくる人、そして侵入者に向かって素早く走る
それに気づく侵入者は後ろを振り向く、侵入者は全ての行動が遅すぎた

「遅いっ！」

女性はウィップで三人を一撃で倒す。三人の侵入者は吹き飛び、戦闘不能になった

「すっご…！」

エミリアは驚く、現れた女性はエルフ耳をしたニューマンという種族
なぜかニューマンには男性が少なく、ニューマンの人口比は男女で2：8の割合だそうだ
そこに酔っ払ってフラフラと現れるクラウチ

「おう、何だ喧嘩か？」

今の状況をまるで理解していないのをよく分かる一言だった
女性はクラウチに近づき、グーで殴ってクラウチを吹き飛ばした

「この給料泥棒が！」

女性は見下すようにクラウチを罵った
クラウチは一瞬何がなにやら、というような状況だったが、
殴られた相手の顔を見ると全ての酔いが覚め、今の状況を理解する
理解した瞬間にお互い何やら喧嘩をし始める…
少なくとも、レイとエミリアにとっては二人の喧嘩の内容の意味が
わからなかった。

第四章－1　捨てられる箱、怒るエミリア

前回と飛ばして見た人用のあらすじ

エミリアを特訓させる為に主人公であるレイが呼んだオリキャラ、エリス
無印版ポータブルの主人公である彼女は
レイの食事を取引としてエミリアの訓練を引き受ける
途中でユートが目を覚まし、ユートと一緒に特訓をする事になった
エミリア
エミリアはかなり鍛え上げられ、戦力としての腕を持つ
そしてエミリアは普段からお世話になっている人たちへのプレゼントを購入
大きなカクワネのぬいぐるみをレイに渡すとレイは意外にも嬉しそうな表情をする
そして二人の間に和やかな雰囲気が流れる…が、突然の警報
リトルウィングに侵入者、エミリアを狙っている侵入者はあっけなく突然現れた
女性のウィップの一撃により倒されている
ちなみにユートはレイが出していた食事を食べている最中なので今、この場にはいない
女性はクラウチを殴り飛ばし、今に至る

――――――

突然現れる女性とクラウチはお互いを知っているかのような感じだった
実際に昔のお前、とか今の貴方、とか昔に知っていなければ出ない

言葉もあった

「大丈夫？エミリア」

レイはエミリアを心配する、エミリアはぽかんとしている
どっちかと言うと襲われた事よりもクラウチが吹き飛ばされた事に驚いているらしい
そしてエミリアはある違和感に気づく、さっきまであったプレゼント箱の一つが無くなっているようだ
レイは言われるがままに周囲を探す、するとクラウチがそれを見つけた

「あん？なんだこりゃ？包装されちゃいるが……ぼろぼろじゃねぇか」

クラウチは汚いものを触るように指先のみで持ち上げる
プレゼント箱はさっきの侵入者の騒動で踏まれてしまい、靴跡が汚らしく残り、折れ曲がっている

「あ、それ……」

「なんだ？これ、お前のか？
どっちにしろこんなボロいもん捨てちまってもかまわねぇだろ」

と、クラウチは指先で摘んでいたものをゴミ箱に捨てる
プレゼント箱はゴミ箱にぶつかる音を立て、その中に入っていく

「あ……！」

これからあげようと思っていた物を捨てられた、しかも本人の目の

前で
酔っ払っているからといってもこれはさすがに酷すぎる

「……バカ」

こっそりと小声で聞こえないように言ったつもりが、クラウチには聞こえてしまい、
それがエミリアの怒りを増やす結果となった

「あぁん？何だよ、聞こえねーぞ？
言いたいことがあるんならはっきりとだな……」

この場の空気を唯一読んでいない駄目なヒゲオヤジが無神経にもエミリアを注意する
それに怒りを募らせ耐え切れなくなったエミリアは暴発する

「バカヤローッ！！」

クラウチの耳元で全力でどなり、そのままエミリアは走り出す
レイもエミリアの後を追う、クラウチに言いたい事はたくさんあるけれども、
とにかく今はエミリアを優先させ、後を追う

「おっさんのバカ、おっさんのバカ！おっさんのバーカ！！」

エミリアはマイシップの中で思いっきり暴れていた
ミカがそれを静めようとするけれど、エミリアの暴走は止まらない

「エミリア」

レイは暴れているエミリアをまずは静めようとした
前回で鍛えられていたエミリアの能力を見ようと考えていた
エリスはああ見えてもかなりの腕前で短期間で接近戦を教えるのが上手な人だ
このままミッションへ行きその成果を見ようとしたけれども…

「二人とも、少しだけよしいでしょうか？
先ほどの侵入者について少し、お話があります」

ミカはエミリアとレイとでさきほどの侵入者の事を言いたいようだ
聞くと侵入者はかなり異質な視線を感じていたようだ
それはもしかするとあの黒服の存在かもしれないが、それはわからない

「…まぁそれはともかく、レイはさっき何て言おうとしてたの？」

「暴れるなら、ミッションで暴れましょうか」

「うーん…そうだね、身体を動かしてれば気もまぎれるかもしれないし…
それじゃあ！ミッションでも行こう！特訓もしたし、色々と試してみたいしねー！」

エミリアはやる気まんまんでミッションに行こうとする、けれどもまた途中で止められる

「その前に、ちょっといいかしら？」

先ほどの侵入者とクラウチを吹っ飛ばした張本人が現れる
彼女はレイをまじまじと見た後に自己紹介をする

「あなたが期待の新入社員ね？私はウルスラ・ローラン
　このコロニー「クラッド６」の艦長、及びリトルウィング社の統括をしているわ」

つまり、このコロニーの中でかなり偉い人、という事だ
なぜこのリトルウィングに来たのか、その理由は二つあった
一つはこのリトルウィングの監視、先ほど軍事会社と言えど、侵入者を許してしまった失態がある
おそらくクラウチを監視する為にきたのだろう
それともう一つ、カーシュ族の持つ「古の力」と言うのが衰えているようで
このままだと一族が存続できないらしい
その為、カーシュ族の復興の為に用意したシュミレーションプログラムがあるのだが
モンスターの資料や調査、討伐のデータが全く足りない状態なので
このＶＲミッションに挑んでほしい、との事
ちなみに報酬はあるらしく、ほとんどのリトルウィングの社員は参加するようだ
レイとエミリアも参加を決定した、エミリアはレイに訓練の成果を見せたいようだが、
レイの方は報酬リストを見て目をキラキラさせていた、中には有名なルームグッズがあり
その有名なルームグッズを手に入れるためにミッションに参加する事にした

「よーし、それじゃあ「マキシマムアタック」！頑張っていこー！」

二人はかなりやる気まんまんでカーシュ族の復興シュミレーションプログラム

マキシマムアタックに挑んだ

――――――

「あれ？みんなどこ行ったんだ？」

ユートは途中で部屋が赤く光ったと思えばすぐ消えて
そのまま気にせずに出された食事を全て食べ終えた
二人の「足跡」を追い、ホールへと出たが途中にマイシップへ移動する為の
円形のテレポーターで足跡が途絶えていて、そのままウロウロしていた

「アラ？どうしたノ？」

ウロウロしている所をチェルシーに発見され、ここで足跡が途絶えている事を言うユート
中央のテレポーターの使い方を知ったユート、その後にチェルシーに言われて
リトルウィングの事務所へと移動した、このまま社員に登録するようだ
黒服によって焼き払われてしまったカーシュ族の村とはまだ連絡が取れず、
このままでは危ないという事でこのままユートをここの社員としていた方が安全だと判断した
本人も黒服から大地神さま、レッドタブレットを取り返せるくらいに強くなりたいと思っている為
どっちにしてもこのリトルウィングに登録される事になっていた

そしてリトルウィングは新たな仲間を加えた中でドタバタしながら
マキシマムアタックが始まった……

第四章－2　亜空間実験、登場するガーディアンズ

「……」

無言だが少しだけ微笑みをしているレイ
彼女はマキシマムアタックの報酬としてソニックとテイルスのルームグッズを貰った
こういった物が好きなレイは表情では微妙そうだが、内心はすごく嬉しがっていた
他の二つのナックルズとエミーを入手できなかったのは少しだけ残念だが、
これだけでも十分に嬉しかった、ルームグッズを見ているとクラウチから連絡がきた
仕事があるから事務所に来い、と
エミリアは呼ばなかった、呼んでしまうとまたごちゃごちゃになってしまうだろう

「おう、来たか、エミリアは…まぁ、いねぇな」

当然、エミリアは呼んでいないし呼ぶ気も無い
クラウチはちょっと残念そうだが、すぐ仕事の話を出してきた
今度もインヘルト社からの依頼だそうで
内容は亜空間発生実験の際に原生生物に機械を破壊されないように警備してほしいとの事
この任務はかなりの大規模で行われるようで、リトルウィング以外にも
同盟軍、ガーディアンズ等の様々な民間軍事会社による大々的な警護となるようだ
これは失敗は許されない大きな任務だ、とクラウチは特に言う

レイを殺しかけた黒服のような化け物とは戦わず、負けそうならすぐに逃げろ、と強く言った
後、カーシュ族の少年であるユートもリトルウィングに登録されている為、
ユートも一緒にミッションに連れて行け、とも言う
リマ夫婦は別の任務についている為、共に行動する事はできないからその戦力埋めだろう
途中でクラウチがエミリアの様子を聞いてきたが、レイはそれを無視してそのまま任務へと向かう

――――

桜の花びらが舞い落ちるニューデイズという惑星
その中でエミリア達は亜空間実験の様子を眺めていた
中心にあう亜空間へ進む物とそれを囲む八つのビット
それらが空中へ移動し、ビットは開いて中心の物が現れる
そのままグルグルと高速で回るビット、そのまま円形の空間を作り出す
中心部分は空間を無理矢理突き進むように回転させて空間の中へと入っていった
その様子は神秘的でこのまま亜空間へ行けそうな様子だった
しかし現実はそうでもないらしく、ミカから言わせてもらえばまだ実験途中のようだ
このままエミリア達はこの実験の様子を見続ければ任務完了だ
途中、クラウチから連絡が入る

「おう、お前ら、聞こえてるか？」

エミリアはクラウチの顔を見ず、そっぽを向いている
唯一マトモに反応しているのはユートのみだ、レイもあの事は怒っている
しかし上司は上司である為仕事上仕方なく、といった感じである
クラウチの話によると、グラール教団の研究施設に原生生物が侵入した、と騒がれている
そこから一番近いのがエミリア達のチームだそうだ
どうもかなり危険らしく、今までレリクスとかインヘルト社の原生生物よりも危険、と言われた
けれども危険なのは今更過ぎるし、最初っから危険なのは承知の上だとレイは思い、それを引き受ける

「最後に、お前らに一つだけ言っておく事がある
…怪我せずに帰って来い！以上だ」

そう言うとクラウチは連絡を切る、最後までそっぽを向いていたエミリアはレイに質問する

「ねぇ、今の…心配してくれたの…かな？ははは、まさかね……」

エミリアかなりの疑問系だが、レイは何も答えなかった
レイはただ先ほど任された依頼をこなす為に研究施設へと向かう

――――――

（レイも…こんなに強いのなら、お兄の言葉の意味を知ってるのか？）

と、ユートは道中でレイの強さを見ながらそう思った
エリスに特訓してもらってる最中に、お兄が残した言葉の意味が分からなかった
「死に触れることで強くなれる」と、エリスに答えを迫った、けれどもエリスは答えなかった
ユートには自分で考えなければ、修行にはならないと言われ、以後は自分で考えるようにしていた
そして、ユートのカーシュ族による特殊能力…というよりも自然が教えてくれる力によってなんとかグラール教団の施設に入る事ができた

「それにしても…どこに原生生物が入り込んだんだろ？」

エミリアは周囲を見渡してみるが、そんな生物のようなものは見えない

「二人とも、あっちみて！」

ユートが指し示す方向は、大量にこちらに走ってくるウバクラダ

「えぇっ！ちょ、ちょっとー！」

エミリアはその数に圧倒され、ユートの手を握り逃げ出した、
レイはダブルセイバーをナノトランザーから取り出し、武器を構えた。

「ちょっと、レイ！逃げて……」

その刹那、逃げ出すエミリアの横から擦れ違う二つの影…
一つの影は大量のウバクラダに突っ込む際にレイの顔を少しだけ見

ていた
もう一つの影はロッドを振り、テクニックを唱えた。
「はぁっ！」
そしてレイを少し見ていた影は大量のウバクラダの中に突入したと思うと、
大量のウバクラダが吹き飛ばされていた、そして二人の影は姿を表す。
その姿は青と白の色でデザインされたガーディアンズの制服。
ロッドを振っていた一人は女性、茶髪で気が強そうな少女、
もう一人もまた女性、死人のような肌、左目は包帯で隠されていて見えてなかったが、
片方の目から見えた瞳の色も白、髪の毛は腰よりも下にいってしまっている程に長い。
その白に包まれたような少女はレイを片方の目で見る、レイは少女に対してたしかにこう言った。
「……姉さん」

第四章－3　共同任務、明かされる事実

「…姉さん」

死人のような白い肌をしているガーディアンズの少女に、レイは確かにそう言った。
その相手もレイの一言に気づき、レイがいる方向へと振り返った。
お互いに殺気のようなものを放ち、かなり近寄りがたい雰囲気を出している。

「…何故ここにいるのです？」

この白い少女はまず間違いなくレイを知っているという風に言った。

「施設内に侵入した原生生物の殲滅、及び実験装置の防衛」

レイはそれ以上の事は何も言わなかった、
むしろ言いたくないという言い方のほうが正しいのかもしれない。

「私はそんな事を聞いているのではないのですよ、
二年前、急に姿を消したと思ったらこんな所で再開するなんて…」

「……姉さんは関係ありません」

二人は近寄りがたい雰囲気を出すだけでなく、この場に居にくい雰囲気になってしまった。
その光景を見たガーディアンズの茶髪の少女はやれやれというような溜息をつき、小声で呟いた。

「…レイちゃん…どうして……」
茶髪の少女はレイの過去を知っているような口調だった。
エミリアはその少女の呟きを聞き逃さず、その疑問を茶髪の少女に聞いた。
「…ねぇ、もしかしてあんたってレイと知り合いだったりする？」
茶髪の少女はエミリアの言葉に気づき、振り返った。
「…アナタには関係ありません。そんなことより、
ここは避難勧告が発令されています、速やかに施設外へ移動してください。」
少女は冷たく、機械的に喋っているように感じた。少女の言葉にエミリアは反応する。
「いや、あたしたちはこの施設にある
実験装置を守れって依頼を受けてるんだけど……」
「…やっぱり、傭兵なのね…でも、あの程度の敵にてこずっているようでは
この先にある実験装置の防衛と原生生物の殲滅なんて任務、到底無理よ」
彼女の言葉に苛立ちを感じ始めるエミリアは強気になって言い返す。
「むっ…！あんたこそ、どこのどいつなのよ！」
「私は、ガーディアンズ総合調査部所属、ルミア・ウェーバー

私たちはこの施設に閉じ込められた人たちの救助に来たの」
「……ガーディアンズ…」
エミリアは片手に持った通信機を使い、クラウチに連絡を取ろうとしたが…
「ルミア！」
「エミリア」
二人はほぼ同時に声を重ねて言った。
「私達は一緒に行動するのです、目的と行動は一致してるはずなのですよ」
「お互い利害は同じはずです、別々でやるよりは時間を短縮できるはずです」
エミリアとルミアは二人の強引さにガックリとうなだれ、二人に渋々と了解した。
こうなれば二人は何を言っても聞かないとお互いに分かっていたからだ。
「うー……わかったよ…」
「……メルがそう言うなら」
二人は仕方なく、という感じを出しながら二人の後をついていった。
「戦闘しながらでも、会話はできますよね？」
白い少女、メルはレイに対して質問する、レイは当たり前だと言う

ように首を上下に振った。

――――――

今回三人のリトルウィング社員に課せられた任務は施設内に侵入した原生生物の殲滅、
一方、二人のガーディアンズの任務は閉じ込められた人の救助だ。
人々はシェルターらしき場所に閉じ込められ、
救助を行う為にはコンピューター操作は必須だというのだが、
どういった理由か、原生生物はそのコンピューターを壊そうとしている。
それは亜空間の実験も行っているコンピューターなのでお互いに破壊されてはいけない物だった。
二人の少女、レイとメルは原生生物に突撃し、攻撃しながら会話をし始める。

「どうしてレイは傭兵になったのです！？」

メルはセイバーで原生生物を一匹退治する、レイもダブルセイバーで複数の敵を倒す。
二人が原生生物を仕留めた時間はほぼ同じだった。

「ガーディアンズには任せてられない、それだけです！」

レイは技量など関係というように乱暴にダブルセイバーを振るう。
力に任された剣は周囲にいた原生生物を切り裂くには十分すぎる威力だった。

「二年間！私達が何もしていないと言いたいのですか！？」

メルは左手に持つ装備ハンドガンに変え、遠距離にいた敵を狙撃した。

遠方にいた原生生物は頭部と思われる部分から緑色の血を流し、死亡した。

「何も結果を出してないじゃないですかっ…！」

レイはツインセイバーを使い二匹同時に撃退する。

「見つからないのは仕方ないのです！」

ウォンドを装備して闇属性のメギドを放つ、メギドは貫通して三匹を倒した。

「姉さんはどうでもいいんですか！？」

レイはダブルセイバーに切り替えて周囲の敵を薙ぎ倒す、

一振りでその数は数十匹くらいの敵が吹き飛び、力尽きて息絶える。

「どうでもいいわけないじゃないですか！」

メルはつい感情的に喋ってしまう。

どうでもいいだなんて心外だ、私達だって必死に探している。

けれども二年間、全く手がかりが無い、それどころか足取りも一切見つからない。

早く見つけたい、けれどもどこにも見当たらない、見つからない。

二人はお互いにそれを理解していた、しかし納得はしようとしなかった、

なぜなら、お互いに生きていると信じていたかったからだ。
「兄貴のことは私たちに任せてもよかったはずなのです！
……レイは傭兵になんかになる必要はなかったのです！」
「……私はっ！」
たった二人だけでこの大量の原生生物を殲滅させた。残るは閉じ込められている人の解放のみ。
コンピューターを制御し、シェルターに閉じ込められた人々は解放されてもいい筈なのだが、
その入り口らしき場所から一向に出てこない事をガーディアンズの二人は不審に思う、
その理由は、教団最強の生物「アルテラツゴウグ」が周囲を飛び回っていた。
こちらの存在に気づいたアルテラツゴウグは五人の近くに着陸する。
「邪魔なのです！」
「消えてください！」
レイは氷のミラージュブラスト「コンル」を発動させた。
メルは体から蒼い炎を纏い、そのまま腕で巨大な剣を作り出す。
最初に発動したコンルの突進攻撃を食らい、その勢いで空中に押し出される、
そしてメルは浮いたアルテラツゴウグに目掛けて手に纏った巨大な剣を振り下ろした、
アルテラツゴウグはその攻撃を受け、左右に真っ二つとなり死亡した。
ほとんど二人が原生生物を倒してしまった為、流石の二人でも息があがってしまった。

「……すごい」

エミリアは二人のコンビネーションとその圧倒的な戦闘能力を見せ付けられた。
レイの強さは前から知っていたが、その姉であるメルという人物も引けを取らなかった。
ルミアはなぜか少し悲しげな表情をしたが、すぐに普通通りの表情に戻していた。

「さて、お互いに任務は完了したのです
…時間はあるし、ゆっくり話を出来るのですよ」

「……」

「…レイが何も言わないのなら、相棒にでも聞いてみるのです。
何か言いたい事や聞きたいことがあるんじゃないのですか？」

メルはエミリアに視線を向け、エミリアは顔すら見るのも嫌だ、というような表情をする。
なぜかエミリアはガーディアンズに良い印象を持っておらず、敵対視している。
敵に送られた塩は使いたくないが、、普通の状況なら一切なにも話してくれない。
だから今が少しでもレイの過去を聞くチャンスがある状況だった。

「二人が戦闘中に言ってた探している人物って……」

エミリアは既に見当がついていた、レイのパートナーカードに書かれていた苗字、

「ハークス」という姓はグラールにおいて何かと有名な姓だからだ。
かつて英雄と呼ばれていたルミアの兄、イーサン・ウェーバーは'
'英雄''と呼ばれていた。
しかしもう一人、英雄と同格に扱われている人物がいた。
それが、彼女たちの兄と呼ばれている存在、''鬼神''と呼ばれ、
六本の刀を操る剣豪。

「……私にとっての元''教官''だった人でした」

「…兄貴の名前は''クロノ・ハークス''
私たちがガーディアンズになった時に教官となってくれた人物なのです」

メル自身が自分とレイの兄である彼の名前、そして自分の元教官であった人物を言った。
かつてガーディアンズコロニーが落下した際にガーディアンズの機能が復興してない際に、
ルミアともう一人、メルはこの隙にガーディアンズにこっそりなっており、
その時に教官としての責任を持っていたのがメルとレイの兄、「クロノ・ハークス」だ。

「……帰還しましょう。これ以上ここに居続けるのは無駄です」

レイはエミリアとユートにさっさと帰るように言う。
しかし帰ろうとする途中にメルに呼び止められた、
レイは今になって呼び戻すなと言わんばかりの雰囲気を出す。

「私のパートナーカードを渡しとくです、お互いに連絡できるようにしとくのです」

メルはレイにパートナーカードと--もう一つの--物を手渡す、
レイはその--もう一つのもの--を見ると表情が変わった。
ガーディアンズの二人は事後処理があるといい、しばらくこの場に残るようだ。
時間があればリトルウィングで、と言っていたがエミリアは心底来てほしくならしく。

「どーして連絡先とか教えちゃうのかなー……」

と言っていた、心底ガーディアンズが嫌いだってのがよく分かる一言だった。

第四章－４　エミリアの誕生日、微笑ましい光景

「……レイちゃん、変わってましたね…」

「…昔に戻ったようだったのです」

二人は悲しそうに小声で会話する、普通の声で会話する気力もなかった。

「あの時はやっと普通の女の子になれたと思ったのですが……」

ルミアはかつて小さかったころのレイを知っていた。
一昔前にガーディアンズコロニーが落下した事件のどさくさに紛れ、人手不足という事もあって特別にガーディアンズに任命された二人。
二人の出会いはそこから始まり、もはや二人はお互いに頼れる相棒となっていた。
その後はちゃんと研修もして正式なガーディアンズへとなった。

「……この事も一言一句嘘偽り無く報告する必要がありますね」

――――――

「ハーイ、ミナサンおかえりネー。
早速でゴメンだけど、シャッチョさんとボスがお待ちヨー」

帰還してからすぐにチェルシーから連絡が入る。
エミリアとレイとユートはその通信内容を聞き、リトルウィングの

社長室へ向かう。

「うー…もしかしてまたおっさんに怒鳴られるのかなー…ウルスラさんもいるのに…はぁー…」

エミリアはため息をついて渋々と社長室へと向かう。
レイはいつもどおりに普通に無表情で何のためらいも無く入っていく、
そして鳴り響くクラッカーの音、室内は楽しそうな音楽が流れていた。

「お誕生日オメデトーネ、エミリア！」

チェルシーがエミリアの誕生日を祝う言葉をいい、それにつられて全員も同じ言葉を言った。
それに戸惑っているエミリア、レイは相変わらず冷静でそのまま表情を崩さなかった。

「え、え…？どういう、事……？」

今の状況がよくわかっていないエミリア、自分自身の誕生日も今まで忘れていたようだ。
こっそりとチェルシーが誕生日会の準備をしていたようだ。
社長室に集まりエミリアの誕生日を祝うメンバーはリトルウィングの固定メンバーだった。

「どうもこうも、お前の誕生日を祝う会に決まってるだろ」

「え…？あれ？今日って私の誕生日だったっけ…？
それに、呼び出されたのも怒るためじゃないの…？」

「怒るわけないじゃない、怒る理由は無いし、それ以上にこっちは感謝したいくらいなのよ。
貴女達の協力によって、多くの人が救われたって
ガーディアンズ総裁から直々にお礼の言葉が届くくらいなのよ？」

「ガーディアンズから…？あの二人が、そんな報告を……」

「ま、仕事の話はそのくらいにしておいてだな……エミリア、ちょっとこっち来い」

「な、何？近づいたとたんにゲンコツとかヤだよ？」

「しねぇよンなことは！ほら、これ受け取れ！」

クラウチは手に持っている包装された箱をエミリアに渡す。

「え？これ、何？」

「…うるせぇ、さっさと袋を開けてみろ」

クラウチに言われたとおりに、エミリアは包装された袋を開ける。
その中には羽を象ったイヤリングが箱の中に入っていた。

「…これ、イヤリング？え、おっさん、これなに？」

エミリアはこんな状況になっても今の状況を理解できていないようだ。

「何って…誕生日プレゼントに決まってるだろ」

「……誕生日プレゼント！？おっさんが！？あたしに！？」

何故か意外そうな反応をするエミリア。

「それ以外に何があると思ってんだお前は！
…それとだな、あん時は……悪かったな」

最後の最後で小声で謝罪するクラウチ、しかしエミリアには聞こえなかったようだ。
エミリアはむしろクラウチの胸元にあるそれに注目していた。

「あれ…？その胸元にあるアクセサリー！その、ネックレスって……
あれだよね。捨てたんじゃなかったの……？」

「…あぁ、誰もいらねぇようだったから、
そのまま捨てたことにして、俺が貰った。…なんだ、文句あんのか？」

クラウチの最後の喋りが少し早口になっていた、怒るっているとかそういうような口調では無い。

「…う、ううん！文句なんてない！おっさんよく似合ってる！
そうだ！このイヤリングつけていい？つけていい？
返事待てない！つけちゃおーっと！」

エミリアはクラウチのプレゼントである
羽を象ったイヤリングをエミリアは早速嬉しそうにつける。

「うわー、うわあぁぁぁー！綺麗、すっごく綺麗！」

とても嬉しがっているエミリア、とてもはしゃいでまるで初めて喜んでいるような感じだった。
レイはその様子を黙って少しだけ微笑みながら眺めている……

「誕生日パーティを開く、とか言ったときは
一体何事かと思ったけど…なるほど、こういう事だったのね
貴方にしてはなかなか小粋なマネするじゃない？」

ウルスラはソファで寝転がっているクラウチに言う

「俺は…チェルシーの案に乗っかっただけだ」

「でも、今のあの子の笑顔は
間違いなくあなたが作り出したものよ？ほら、見てみなさい」

エミリアは耳に着けたイヤリングをまだ嬉しそうに喜んでいる。

「…あいつも、ああやって笑うんだな」

「プレゼントを貰ったら誰だって嬉しいし、喜ぶものよ」

「へっ……それにしたって喜びすぎだ」

「大切な人からのプレゼントは格別なの。
あなたにだって、わかってるはずよ？」

「…どうだかな」

「相変わらず、素直じゃないわね」

「テメェも相変わらず、遠回しな言い方しやがるな」
クラウチはエミリアから渡されるはずだった首飾りをかけている、
その首飾りは照明の光でキラリ、と光った。

――――――

「こんちゃー！ひっさしぶりー！今まで元気だったー？」
「お久しぶりです、エリス様もお元気でしたか？」
「ちょー元気！それに私はエリスって呼んでよ！！」
「あ…その、すみません」
「謝ることは無いよー、あたしたちの仲でしょー？」
「は、はい……」
「うん、それで私が連絡した理由なんだけどねー
レイちゃんはリトルウィングってゆー会社に所属してるんだって」
「はい、その件に関しましては先ほどメールで確認しました」
「それでねー、やっぱりリトルウィングに向かうの？」
「はい、レイお姉様が行方不明になってしまってから二年間、ずっ

と心配していましたしね」

「うーん、やっぱりすっごい喋り方が敬語すぎるよねー、やっぱ癖？」

「そうですね、敬語を使ってしまうのはレイお姉様も同じだと思います」

「…アンタ達を縛る物はもう無いのにね」

「幼少の頃から受けた傷は簡単に治らないものですよ…」

「ま、その話は今はいーよね、とにかくレイちゃんは無事…だけどもさ、昔に戻っちゃったみたいな感じになっちゃってる」

「そうなの…ですか……」

「…うん、これで私の連絡は終わりかなー、じゃあね！リオちゃん！」

「あっ……エリス様はいつも間違えますね…

…もしもし、民間軍事会社リトルウィングですか？」

第四、五章　兄妹集結（前書き）

今回から更新ペースは遅くなります

第四、五章　兄妹集結

「レイ、お前にお客さんだぞ」

クラウチからマイルームのビジフォンで連絡が来る、それに反応してベッドから起き上がる
今日はミッションを受けずにゆっくりしようと思った日にレイに客が来る
しょうがない……と重い体を引きずりリトルウィングの事務所へ向かう

「来ましたね？レイ」

客とはメルともう一人、赤い髪をした人物が一人いた
赤髪の人物は耳が尖ったニューマンで、身長はかなり小さく、レイの少しだけ大きい程だ

「久しぶりです、レイお姉様」

赤髪はそのまま深々と頭を下げる

「リオ！あんたの方が年上なのですよ！」

メルは赤髪、リオを怒鳴る、リオはレイより一歳年上なのだが、事情があり姉として慕っている

「も、申し訳ありません…」

メルはしょうがない…という風な態度でため息をして、そのままレ

イに話をする

「それで私たちが来た理由ですが…」

「私、ですか？」

レイはメルの答えにとっさに答える、それに冷静に受け答えるメル

「そう、レイがこのリトルウィングに所属するまでの経緯を話してもらう前に……」

メルは話の前に一つだけレイに頼んだ

「いつもの、作ってほしいのです」

いつもの、メルは二年ぶりにそれを言った

それはレイの作るクッキーと紅茶の事であった

――――――

「お前さんら、ちょっといいか？」

クラウチは三人に話しかける、それに対してメルが受け答える

目を閉じながら優雅に紅茶の味を楽しんでおり、視線はクラウチに向けていない

「一体何なのです？こっちはティータイム中ですよ、邪魔しないでほしいのです」

「お前さんらがティータイムとやらをするのは勝手だがな…
どうして事務所にわざわざテーブル持ち込んでるんだよ！」
全くの無関係なリオが黙って謝り続ける、リオはこういう人だ
リトルウィングの事務所の中心に大きなテーブル、その上にレイお手製のクッキーと紅茶が置いてある
わざわざ事務所に持ち込まないでマイルームでやれというのがクラウチの主張だ、しかし
「別にいいじゃない、紅茶がおいしいし」
「レイの淹れる紅茶は美味しいネー、いいおヨメさんになれるヨ」
この辺りを仕切っているウルスラは別に反対しなかった
チェルシーもいつの間にか紅茶を飲んでいる、少しだけ休憩するようだ
むしろレイの淹れた紅茶に勝手に買収されたような感じだ
いい加減クラウチの存在がうっとうしくなったのか、二人に退場させる魔法の呪文を唱える
「酒代を経費で落とそうとした人がよくいいますね」
その言葉に反応するウルスラ、クラウチはぎょっとしてウルスラを見る
「クラウチ、貴方は私と楽しい楽しいお喋りをしましょうね」
表情は笑っていた、けれども目は笑っていなかった
先日までエミリアの誕生日パーティを行っていた場、
社長室へ無理矢理引きずり込むウルスラ、抵抗するクラウチ

そのままクラウチは社長室へと姿を消した……
チェルシーもその様子を見て休憩を止め、仕事に戻った
これでやっと邪魔者がいなくなった、と思い三人は話をする

「…私は別に傭兵になる事に疑問をもってないですが…
急に行方を暗まして勝手に傭兵になってるのは問題なのですよ」

それに、と付け加えメルはそのまま話を続ける
レイは黙って話を聞き続ける

「…それと、兄貴はパルムのレリクスを調査して行方不明になったのです…」

レイが最初にパルムのレリクスの調査の任務を優先させてほしいといった理由
それは行方不明になった兄がいるかもしれない、という理由だ

「リトルウィングには既にお兄様の捜索の依頼は出しておきました」

リオはすっ…とテーブルにその依頼の内容を書かれている紙を出す
その報酬…３５万メセタ、普通の依頼に比べるとかなりの破格な条件だ

「リオはリオなりの方法で兄貴を探そうとしてたのですよ？
…グラール教団の下で働いていたのも任務の報酬を稼ぐためなのです」

メルはガーディアンズで兄を探していたが、リオはあんまり戦闘能力は無い為
自分なりの方法で兄を探そうとしていた、それが軍事会社に依頼を

頼む事である
しかし中途半端な報酬だと誰も受けようとしないだろう、ガーディアンズでも見つからず
リオは任務の報酬を大量にしようとグラール教団の施設で働いていたそこから予想外の手柄を立てたリオはボーナスを貰い、そのまま今の依頼を出した、との事

「…さて、私からはこれで終わりなのです」

メルはそのまま席を立ち、事務所から去ろうとする
事務所の扉が開いたとき、言い忘れていた事を思い出し、後ろに振り返る

「そうそう、言い忘れてたのですよ、レイ」

メルは冗談を言うわけでもなく、真剣な表情で語る

「相手に尽くすのと相手を支える事は違うのですよ」

そう言ってメルは事務所から去っていく
それからすれ違い、エミリアが事務所に訪れる
メルの顔を見たエミリアは少しだけムッとするけどレイを見ると態度を変える

「おっはよー！レイー！！」

エミリアはかなり元気でハイテンションに挨拶する
前回貰った誕生日プレゼントがかなり気に入っているようで
かなり嬉しくて今日に至るまで最高にハイ、って状態になっていた

「あっ！クッキー美味しそう！いっただきー！」
エミリアはテーブルの上に置かれてあったクッキーを一個摘み、口に入れる
表情は緩くなり、実においしそうに食べている
「レイお姉さま、この方は…？」
さっきから少ししか喋っていないリオはレイにエミリアの事を聞く
「エミリア・パーシバル、私の相棒」
「お初にお目にかかります、リオ・ハークスと申します
レイお姉さまがお世話になっています」
と、深々とおじぎをする、エミリアはその凄い丁寧さに逆に引いた
「ど、どうも……」
エミリアはリオをまじまじと見る
「ふーん、レイ含めて三人の姉妹かぁ…お姉さんや妹がいるってどんな感じなんだろ」
エミリアの独り言、それはリオを傷つける意味が含まれていた
リオは態度は崩さないものの、今にもため息をつきそうな雰囲気を出していた
「その、私…いえ、ボクはそんな風に見えるでしょうか…？」

その言葉に疑問を浮かべるエミリア、何か間違えてしまったのか
それは本人にはまったくわかっていなかった

「え？どういう…事？」

このままの二人では問題は解決しないので、レイは助け舟を出した

「レイ、私がミラージュブラストの試作品の使用者を言ったとき、
私は何て言いました？」

「え？レイの……」

エミリアは黙る、リオもレイも自分からは言わない
三人は黙って紅茶を飲む、そして飲み終えたエミリアの第一声が

「……マジ？」

信じられない、という風な言い方だ

第五章－1　サブタイトルがこれ以上思いつかない

エミリアと他五人は雪山を歩いている
静かな雪山に少しだけ響く足音、雪を踏む新鮮で気持ちのいい音が聞こえる
けれどもその音を楽しむ者は誰もいない、

「……」

六人は黙って雪山を歩いていく、どうしてこんな大人数で
こんな雪山を歩いているのか、それは先日にクラウチから頼まれた
'依頼'だった…

――――――

「美味しそうな匂いがしたと思ったら…
二人とも、こんな所で何をしてるんだ？」

ユートは事務所に入る、事務所の中心にはどういう理由かテーブルがある
それに置かれているクッキーの匂いに誘われてここまできたユートだった
何も言わないエミリア、黙って紅茶を飲むレイ、恥ずかしがって顔を赤くするリオ
この状況を疑問に思うユート、テーブルの席についた一言

「プリンないのか？」

「ないです」

レイはきっぱりと言う、無いものは無い
それに本人も作る気は全く無い
ユートはプリンが無いことに不満を感じるが、
それを口に出さず黙ってクッキーを頬張っている

「…この方は女性らしい外見のようですが、男性なのですね……」

ミカもかなり驚きを隠せない様子だ
エミリアはリオの外見を見る、幼い顔立ちで何より女性らしい柔らかい表情をしている
リオはそれに気づき、ニコッとエミリアを見た後に少しだけ頭を下げた
リオの外見は新デフォ沼男の服装が赤くなった、と言ったほうが簡単に説明できる

「うーん、やっぱりミカから甘い匂いがするぞ」

「におい…って、ミカからそんなに匂うかな…？」

エミリアは匂いを嗅いでみるが、クッキーとクッキーの香ばしい匂いしかしなかった

「このクッキーと紅茶の匂いと混ざってるんじゃないの？」

「そんな事ない！ミカが出てるとき、いつもミツのように甘くていい匂いがしてるぞ！」

ユートは自信を持って答える、しかしまだよくわからないエミリア
そこでミカはこの匂いの元を答える

「ああ、それはきっと「テティの花」の香りですね」

「テティの花？そんな名前の花、聞いたこと無いけど」

「かつて、私が好きだった花ですよ」

突然、エミリアとレイの脳内に直接テティの花の映像が送られる

「うわわっ！急に画像が出てきた！」

「…！」

エミリアは思いっきり驚いたが、レイは少しだけ驚き、体が少しだけビクッと跳ねた
その様子を見て微笑むリオ、レイはキッと睨みつけるが、リオは何とも無い様子で紅茶を口に含む
そして先ほどから彼の疑問をやっと声に出して言えた

「それで、あの……ミカ、というのは…？」

エミリアはリオに言われた瞬間にはっ、として言い訳を考えていた、けれども

「あの…実体が無い、ように見えるのですが…」

リオはミカの事が見えていた、けれども特に驚いてはいなかった

「…へ〜、リオも見えるんだ〜…ユートはともかく、エリスも見えたしなー…」

もはや慣れた事態、というより別にミカが見えていても特に問題は無い、と感じていた

理由はどうあっても、ミカが見えるっていうのはむしろ都合が良いそれよりも理由があるリオは言う

「あの、それでボクがいまだここにいる理由なのですが……」

リオは自分から話したいことをようやく話す

「ボクも一時的にリトルウィングで働かせていただく事になりました」

リオは席を立ち、二人に向かって深々とお辞儀をする

レイはリオはよく頭を下げるのを昔から知ってる、年下にもよく頭を下げていた

「へ〜、そうなんだ…じゃあ、これからよろしくね、リオ」

「こちらこそ、よろしくお願いします」

再び頭を下げるリオ

奥の社長室から出てくるクラウチ、丁度いいと言わんばかりのタイミングだ

「おう、お前ら、丁度揃ってんな」

クラウチはそのまま仕事の話をする

「ここ最近、失踪者が増え続けているだろ？
リトルウィングも失踪者も探していたが…そいつらも失踪しちまった」

「うわっ…それって泥沼じゃん」

「リトルウィングで動けるのがお前達しかいないんだ…頼めるか？」

「任せてよおっさん！ちゃんと失踪した人たちをちゃんと連れて帰ってくるから！」

やけに自信満々に答える、つい最近までは働きたくないと喚いていた少女が
このような言葉を言う事になろうとは誰が思っていただろうか
今日はとりあえず連絡を待ち、明日に失踪者を探す、という事になった

――――――

「おや、奇遇なのです」

雪山に入った瞬間に出あったメルとルミア
ルミアは小声で「どうも…」と言う
エミリアはどうして二人がいるのかはとりあえず放っておき先へ進もうとしたが
ガーディアンズからもここの辺りから失踪者が出ている、という理由によって再び協力する事になった

エミリアはガーディアンズからも失踪者が出ている事を嘲るように笑うが、
リトルウィングでも失踪者は出てるから笑えないだろ…とメルは思ったが口には出さない
道中、雪玉が転がってきたり、巨大な雪玉が転がってルミアがパニクったり、
再び雪玉が転がってくる以外は特になんとも無かった

「みんな、気をつけて…この先に、すごい嫌な感じがする……」

「君も感じるのですか……この反応、私と同じ…？」

「そう、メルと同じ感じがする…三年前の…いや、ちょっと違う…？」

「どちらにせよ、普通じゃない事態なのは確かなのです」

二人はこの先にある邪悪な気配を感じ取っている
この反応の意味に気づいたものはルミアだけだった

「そんな…！メルがそんな反応するって事は…！」

「…信じたくないですが…いや、それにしては違う…？」

この三人の会話についていけないエミリア
レイは普通通り、特に何が出ても問題ない、と行動で表している
リオは三人の会話を聞いても、少しだけしか分かっていない

「あの…もしかすると」
「あーもう！さっさと先に進もう！」

リオの声が痺れを切らしたエミリアにかき消される
エミリアは一人で先へ進んでいったが…

「…！」

レイはエミリアを蹴っ飛ばす、勢い余って顔面が雪まみれになる
雪が大量についた顔を拭い、レイの様子を見る
レイは怪我をしておらず、少しだけ安心したエミリアだが、それ以上の恐怖がそこに存在していた
かつてグラール全体を恐怖に陥れ、英雄達によってその存在を葬られた
自分自身以外の生命を全て滅ぼしてしまうという凶悪な生物、ＳＥＥＤ
エミリアを襲おうとしていたＳＥＥＤはレイの打撃スライサーによって消失した

「ちょ、ちょっと！ＳＥＥＤフォームが出てくるなんて聞いてないわよ！」

エミリアは叫ぶようにいった、それはこの場にいる全員が思ったことだ

「でも、今のＳＥＥＤは少し違う気がします……」

先ほど現れたＳＥＥＤとはなんだったのか、それを否定したのはメルだ
続けてメルは言う、エミリアも黙って聞く

「…正直、私自身ＳＥＥＤの体でできてるようなものなのですよ…

でも、今回のＳＥＥＤに…今一ピンとこなかったのです…ですから」

「ちょっと待って…メルの体がＳＥＥＤで出来てるって……」

「その話は後、とにかく今は失踪者を探さなきゃなのです」

メルは無理矢理に話を切り上げてさっさと先へ進んだ
先ほどのメルの言葉を聞いて表情が暗くなるルミア
しかし先へ進むとそこは行き止まりで先へ進むことは出来なかった

「…ん？この壁……」

メルは少しだけ気づいたが、真っ先に気づいたのはエミリアだった

「この壁、映像でできてる……」

エミリアは壁に手を触れてみようとしたが、腕は壁をすり抜けた

「やっぱり、色彩パターンのズレが妙に論理的だったから……それに…」

エミリアは勝手に語りだす、その間にルミアはレイに質問してくる

「急に人が変わったように…あの子、一体何なのですか？」

レイはエミリアをちらっと見た後に頭に疑問の符号を浮かべる
その間にメルは先へ進んでしまう、それを見たリオとユートは後からついていく
エミリアとルミアは急いで先へ進んだ、レイはいつも通りにその後

を付いていく…

第五章ー２　サブタイが行方不明（前書き）

ここ最近忙しくて中々更新できません…
楽しみにしてる方がいるかどうかは別として申し訳ないです
少しでも更新できるように頑張ります

第五章ー2　サブタイが行方不明

「なに、ここ……？」

隠された壁の奥へ進む、洞窟を通った後、坑道のような場所に通じる
エミリアはインヘルト社の構造に似ている、と言い何か関係がある
のでは？と言う
ルミアとメルはこの施設の情報を探っていたが全く見当たらなかった
このまま先へ進んでみると立派な研究施設、襲ってくるマシナリー
それを蹴散らして奥へ進んでいく

「はぁ…それにしても、なんでマシナリーが襲ってくるのよー…」

エミリアはクタクタになりながら疑問を言う
リオも息が切れてしまい、追いつくのでやっと、といった感じだ

「よっぽど、この先に見られたくないものがあるのよ……」

ルミアはエミリアの疑問に答える、恐らくルミアの言ってることが
正しいだろう

「はー、リオも疲れてるし、一旦この辺で休んでかない？」

エミリアはここで休む事を提案する、エミリアはルミアが反対する
と思ったが
以外にもルミアはそれに賛成し、六人はここで休むことになった

「さて、エミリアは気になってるのではないですか？私の正体の事
を」

メルは自分から話を進める
是非聞きたいですという表情をするエミリア、それにメルは応える
「話が長くなるのは王道としてもですよ？
…その前に言っておく事があるのです、私たち兄弟の事を」
メルは言葉は真剣なのだが表情はいつもと全く変わらない
そのままの顔で語り続ける
「…私たちは血の繋がった兄弟じゃないのです」
「…やっぱ、そうだったんだ…全然顔が似てないと思ったから」
エミリアは既に知ってました、というような反応をした
頭の切れがいいエミリアはレイとメルとリオが血の繋がらない兄弟なのでは？と思い続けていた
そして今日、やっとその疑問は確信に変わった
「話を続けるのです
…実は私は生まれた時からヒューマンとは決して言えない種族だったのです」
「生まれた時からヒューマンじゃない…って、どういうこと？」
「まぁ、焦らないで聞くのですよ、エミリア
…私はとある大富豪の娘のコピーだったのです」
メルは言い続ける、エミリアも黙って聞き続ける

「聞いた話、大富豪は子供に何かあった場合の為にコピーを何体も作ったそうです
もしも、の場合があった時に対応できるように、というだけの理由なのです
こんなふざけた語尾を付けてしまうのはオリジナルの口癖なのだそうです
私の場合、ＳＥＥＤが襲撃した際に感染し、廃棄処分になったのです」

ま、それがよかったんですけどね、とメルは付け加える
けれどもエミリアはまだ納得できていない様子だ

「…昔にＳＥＥＤ感染した人達なら沢山いるのに…どうしてメルだけ…？」

エミリアはまだ天才的な頭脳を持ってもまだ理解できていない
体はＳＥＥＤで出来ている事と、あのアルテラツゴウグをバラバラにした
巨大な剣を象った蒼い炎のようなものもＳＥＥＤの力だと思っていた
しかしＳＥＥＤ感染者にはそんな能力を得た、という情報は無い
エミリアが理解できない理由は、まだメルは真相を語ってないのだから

「…これであの力を手に入れられるのなら
ほとんどの人類は私のような力を持っているのですよ…」

メルはこの後の事も言い続ける

「…昔にイルミナスと戦ってた時期が私たちにはあったのです
その時、要人警護をしていた際にルミアと共に誘拐されてしまい…

ルミアはヘルガの生贄になってましたが、私には素質があったようです
人工生命体である私には適正があったようで、作り変えらたのです」

「…？メルの言ってること、よく分からないぞ…？」

ユートはメルが言う話を理解できていないようで
リオは簡単にユートに言ってみたが、それでも通じずにいた
頑張ってなんとか理解させようとするけれど中々理解してもらえず
奮闘するリオ

「…この左目を隠す眼帯、そこに注射器を突き刺され、中身の液体を注入された…
そして気がつけばこの白い肌と白い髪、そしてＳＥＥＤの力…という事なのです」

ルミアは悲しそうな表情をしている、それに気づいたメル
メルはルミアに対して言う

「ルミア…私は今、生きている…それにルミアだって死ぬかもしれなかったのですよ？」

「…そう、私はあの時も、教官に…」

これ以上会話を続けていると暗い雰囲気になってしまうと思ったエミリアは
ほんの少ししか休んでいないけれども、っさと奥へ進んで失踪者を探そうと言い出す
レイはエミリアの後を追い、ルミアとメルも同じように追った

リオは結局ユートには伝えられなかったようで、結局ユートは何が何やらといった感じだ
しかしエミリアはまだＳＥＥＤの力という事は暴走するのではないか？とも考えた
けれどもユートがさっき言っていたように、ユートは既にメルからＳＥＥＤの力を感じていた
ユートはメルを嫌わず、敵視もせず、共に行動してても問題は無かった
だからＳＥＥＤの力というのは嘘か、別の物なのかもしれない…
もしかすると、ＳＥＥＤの力と別の何かが働いている能力の一種なのだろうか？
例えば、乾電池で光る電球で例えてみよう
乾電池、これが無ければ電球は光らない、光の源、そしてそれら二つを繋ぐ電線
乾電池はＳＥＥＤの力、そして電線の役割をする何かが働いて
そこから力を出す特殊能力だとしたら…？
後にメルから語られるが、実際そんなようなモノらしいが
本当の能力はわかっておらず、三年たってもなお調査中…との事だ

――――――

「うぅ～…また寒いところに出た……」
研究所らしき場所を出たら、そこにはまた洞窟が続いていた
さっきまでは研究所ということもあってある程度の温度調節はされていたが
今度は完全に自然の洞窟で、温度を変化させるような機器は一切見当たらない

「しっ…何か聞こえます」

ルミアは全員に喋らないように命じる、全員はそれに従い、耳を澄ましてみる
かすかにするハンドガンの発砲音、ルミアとメルを筆頭にその後をついていく
そこには何も無い場所に発砲するリトルウィングの社員とガーディアンズがいた

「あ！あれって失踪したウチの社員じゃん！」

エミリアは近くにいる社員を指して叫ぶ、それに気づいた失踪者達
エミリア達を囲み、敵意を明らかに示している
その反応は以外なものだった

「くそっ、まだいたか！ＳＥＥＤめ！」

一人のガーディアンズがレイに向かって発砲する、それをレイは回避する
表情を特に変えずにレイは冷静に言う

「あの時のような洗脳でしょうか…？」

ルミアはレイに反応する

「洗脳…！？とにかく、各自武器をスタンモードに切り替えて！
一旦動きを止めさせてから動かしますよ！」

各自、武器をスタンモードに切り替える、リオはユートに言う

「ユートさん、手加減して戦ってくださいね」
「まかせろ！気絶させればいいんだな！」
しかしレイだけはまだ武器を弄っていた
メルはさっさとするようにレイに言うが、レイの装備のほとんどは自身の腕力のみが攻撃力としている部分もあり、スタンモードをできる武器が無かった
スライサーは本来の攻撃に使わず、腕力で叩き潰す戦法を使っていた、スタンモードが
全く関係ない、他の装備もほとんどがそれと同じような武装だった
「…これでいいですね」
レイはナノトランザーからウィップを出す、黒く、鋭利な刃物のようなモノもついている
左手には能力を上昇させる攻撃しないシャドゥーグがぷかぷかと浮いている
試し撃ち、といわんばかりに周囲を囲んでいた失踪者にウィップを叩き込む
失踪者達は全員倒れ、動かなくなった
「…死んではいないのです」
メルはそばにいたガーディアンズの脈拍を測り、死んではいない事を証明する
レイがやっと手加減できる装備を発見し、先へ進んで失踪者達を気絶させ続けた
その様子を見てエミリアはレイの強さは腕力にもあるという事を確

信させた

六人は失踪者達を気絶させながら奥へと進んでいく

第五章－2　サブタイが行方不明（後書き）

内容が薄いような気がしますが…
ちょっとずつ更新していこうと思います
五章が終われば全体の修正をするかもしれません
この章が終わったら白い旅人です

第五章ー3　方向音痴のサブタイ

「たぁっ！」

レイは襲ってきたガーディアンズの隊員を蹴り飛ばし、気絶させる。

「これで、全員ですね…」

これでようやく失踪したガーディアンズとリトルウィングの社員を全員発見し、気絶させ、救助する事に成功した。

「はーっ…これで、やっと終わりかぁ…」

エミリアは襲い掛かってくる失踪者にかなり善戦していた。
テクニックはあまり上手ではなかったが、かつてエリスによって鍛えられていただけでなく、レイやユートの動きを真似してみたりすることで
エミリア自身の動きもかなり良くなっていた。

「……」

ユートは出口と思われる穴を睨むように見ている。
それに気づいたエミリアはユートに声をかける。

「ユート、どうしたの？出口なんか見つめて」

「…感じる、間違いない！あっちに大地神さまがいる！」

ユートは怒鳴るようにエミリアの問いに答え、出口に向かって走っ

ていった。
エミリアはすぐに追いかけようとするが、一つの問題がその行動を邪魔した。
けれども沢山いる失踪者達をこのまま放置していくわけにもいかないし、
それに目が覚めたらまた襲い掛かり失踪してしまうかもしれない。
エミリアの雰囲気を察したリオ、メル、ルミアはエミリアに言った。

「失踪者達の介抱は私たちにお任せください」

「襲い掛かってきても私達なら大丈夫なのですよ」

「だから、エミリアとレイはあの子を追いかけなさい」

三人はエミリアとレイにユートの後を追うように言う。

「…ありがと！」

エミリアは三人に礼を言い、ユートの後を追いかけていった。
レイは既に三人に言われる前に追いかけていたので、レイを追いかける事で
ユートを見失わずに済んでいた。

――――――

雪が吹雪いている雪山で黒服とユートが対峙していた。
周囲に響くように聞こえる斬撃の音、
ユートはそれを槍で防ぐが、強い攻撃に耐え切れず、吹き飛んでし

まった

「うあっ！」

「ユート！」

エミリアはユートが吹き飛ばされた方向へ駆け寄る。
レイはツインクローに装備を切り替え、黒服に向けて腕を振り下ろす、
しかし黒服はそれを一本の剣で受け止める。

「ほう…あの時の小娘たちか。
どうやら私の邪魔をしたいらしいな」

黒服は相変わらずエミリア達を見下すような言い方をする、
しかしエミリアも負けずにこれまでに言いたかった事を言い放つ。

「やっぱり、あんたの仕業だったのね…！
最近の失踪者の事件も、もしかすると襲撃者の事も…
全部、アンタが黒幕だったってワケね！」

「愚問だな。答える時間すらも惜しいほどに」

黒服は喋る間にも、レイは攻撃の手を止めない、
けれども黒服は余裕を持ってレイの猛攻を受け止めている。
レイはそれでも攻撃をし続けるが、やはり全ての攻撃が止められている、
装備する武器をツインセイバーに切り替え、黒服に切りかかる、
黒服はほんの少しに服が切られた程度でダメージを与えるまでにはいかなかった

「小賢しい…！」

黒服は少しでも傷ついた事が癪に障ったのか、レイに攻撃を仕掛ける、
それに気づいたレイは少し後退し、防御する態勢に入る。
黒服の手に持っていた刀がレイに向かって振り下ろされる。

「…っ！」

レイは左腕で刀の攻撃を受け、右腕に持っていた片方の剣で黒服の心臓を狙う、
それに気づいた黒服は回避しようとするが、完全に回避できずに右手に攻撃を受ける。

「くっ！」

黒服の右手から血が垂れる、それを見た黒服は心の底から汚いモノを見るような目で
その血を傷を見ていた。
レイはその場に倒れ、黒服はレイの体を蹴り飛ばした。

「レイ！」

エミリアはレイの側に駆け寄り、無事かどうかを確認した、
左腕が黒服によって切られ、今回はもう動けないというのは素人でも理解できた。

「大地神さまをかえせ！それはユートたちの大地神さまだ！」

ユートも黒服に攻撃を仕掛ける、手に持った槍で黒服を狙う、
しかし黒服の左手にはダガーを持っており、それを使い攻撃を防いだ。

「大地神…？レッドタブレットの事か。
何をバカな事を言っている、これは元々我々の物だ。
消え行く存在如きがこれを持とうなど…おこがましいにも程がある」

ユートの槍の攻撃を防いだダガーでユートを吹き飛ばす。
黒服は無傷である左手でレッドタブレットを取り出し、エミリア達に見せびらかした、
レイはそれを奪い取ろうと体を起こし、黒服に向かって走り出そうとしていたが…

「レイ、駄目！」

黒服はレイとエミリアに視点を変えると同時に、彼女らの目的が分かってしまった。
実は背後からリオがこっそりと近づき、レッドタブレットを取り返そうとしていた、
エミリアはそれに気づいていたが、レイが黒服に向かって走り出してしまった、
それを止めようとエミリアはレイを押さえつけたが、黒服はリオの存在に気づいてしまい、
リオに向かって左手のダガーを振りかざし、その衝撃で吹き飛ばした。

「ふん、消え行く存在如きがいくら集まろうと
脆弱な存在には変わりない……」

「その物言い…やはりあなたも旧文明の残滓なのですね」
ミカは黒服に言う
「フン…出てきたな。愚かな裏切り者め」
「私達の文明は終焉したのです。
今この時代、この世界があるのはここに生きる人々の努力の結晶
誰も、それを奪う権利はありません」
ミカは黒服に訴えかける、しかし黒服はミカを嘲るように笑った。
「クッ…クックック！ハァーハッハッハ！
この時代に築かれし平和は旧文明の遺産によってもたらされたものではないか！」
確かに、黒服の言うとおりに、旧文明の技術が無ければ
世界はＳＥＥＤに破壊されていただろう。
「我らこそが万物の創造主！必要ならば奪い、不要なら捨てるまで！」
しかし、この黒服の主張は明らかにおかしかった、
かつて滅びた文明の人々が今になって世界の乗っ取るとは…それこそがおこがましい。
「旧文明の栄華が戻るそのときに全ては消え行く運命にある！
この身体に宿る、意識のようにな！」

「ならば私は…力ずくでも貴方を止める！」

「面白い…旧文明の支配者たるこの私に刃向かうつもりか？
お前の宿主も、その側近たる者も既にボロボロではないか？」

黒服が言った側近、という言葉にエミリアは反応した、
そしてその黒服の言った言葉がエミリアにとって許せなかった。

「レイは…レイは私の側近とかじゃない！私のパートナーだっ！」

「ほう、貴様如きの貧弱すぎる者がパートナーとはな
弱き者ほど群れを作りたがるものだな……
裏切り者よ、よく考えるのだな！
旧文明の復活こそ、このグラールが選ぶべき道なのだ！」

黒服は背を向けてこの場から立ち去ろうとする。

「ま、待ちなさい！」

ミカは黒服を引きとめようとするが、黒服は振り返りもせずに言った、

「そう急かずとも、またすぐに会うことになる。
その時は、全てが手遅れだろうがな……！」

黒服は吹雪の中に姿を消し、その姿を消した。

「……」

ミカは悔しそうに黒服がいた場所を睨みつける。

「レイ！ねぇ、大丈夫！？」

エミリアはレイの傷を心配している、
これでレイが傷つくのは三度目だ、しかも二回は同じ相手によって攻撃された。
しかしそれ以外にもエミリアは考えている事があった、
リオの存在にも気づかず、一人で黒服からレッドタブレッドを取り返そうとした事だ。
レイの行動を見てみると、戦闘でも何でも一人で行動を起こしていた。
エミリアも最初は自分が頑張らなきゃ…と思っていたが、
それはレイが全て一人で行動していたからエミリア本人も自信をつける機会が無かった。

「ユートとリオも大丈夫？二人とも吹っ飛ばされてたけど…」

「はい、大丈夫です」

リオはエミリアの側に近寄り、自身の無事を報告する、
しかしユートはシュンとしたままその場を動かなかった。

「ユート、どうしたの？」

エミリアはユートにしゅんとしている理由を聞いた。

「勝てなかった…アイツに勝てなかった…」

ユートはあの黒服に勝てなかった事を悔やんでいた。

「あー…まぁしょうがないよ。
あいつもムチャクチャ強いし…今は負けてもしょうがないって」
エミリアはユートをフォローするが、
ユートはエミリアのフォローも聞かずにお兄が言う言葉の意味を知りたがっていた。
「はやく…死に触れないと……お兄のように強くならないと……」
「あー、あの時の言葉かぁ…」
エミリアはエリスと修行していた時の事を思い出していた、
あの時にエリスは意味は知っているが教えないと答えた、
ユートはそれが意地悪だと思い全力で知りたがり、最終的には襲い掛かったが
指一本も触れずにユートは倒されてしまい、最終的には渇を入れられ、
それからユートはお兄の最後の意味を自分自身で考えるようになった。
「…そういえば、この事件を解決するためには、あの黒服を倒さなきゃいけないのか…
はぁ、勝てるのかな……」
エミリアはあの黒服の実力に既に戦意喪失しかけていた、
けれどもそれ以外にもエミリアは考えてる事があった。
「…あなたの実力だって、そう悲観する事もないんじゃない？」
突如、さっきまでいた洞窟の入り口から出てきたルミアとメル、

ルミアはエミリアを弱いという事を否定してきた。

「ルミア？えっと…どういうこと？」

「つまり…もっと自信を持ちなさいってこと！
あのメルでもほとんど感じなかった精巧なホログラフを見破っておいて
自信が無いとか言われると一緒にいたこっちがショックなのよ！」

ルミアは逆ギレするようにエミリアに言った、
エミリアも褒めるなら褒めてよーと言っていたが、うるさいの一言しか言わなかった。

「まぁ、今回の調査についてはあなた達がいなければ
私達も失踪していたのかもしれないし…
一応、お礼は言っておくわね。……礼儀として」

「もう、いつも一言多いなぁ！」

「口の減らないあなたよりはマシです、
失踪者も目を覚まして帰還しました、私達も帰還しましょう」

任務を終了した為、六人はこのまま帰還しにマイシップへと向かった、
メルとルミアがガーディアンズのシップに乗り込み、そこで別れた。

第五章ー３　方向音痴のサブタイ（後書き）

俺「謎のキャラと会話コーナー！
今回はメルとリオです！よろしく！」

メル「……」

リオ「よろしくお願いします」

俺「んで、二人なんだが…」

メル「さっさと終わらせてくれますか？」

俺「すみません……マジすみません…睨むの威圧感ヤバいんで止めてもらえませんか？」

メル「チッ……」

リオ「まぁまぁ、メルお姉さま、この方も悪気があって…」

メル「……」（黙ってテーブルを叩く）

リオ「す、すみませんでした……」

俺「で、メルはこの小説の設定上はＰＳＵイルミナスのｅｐ３の主人公という設定です
本来ならＥＰ２とＥＰ３の主人公は一緒ですが、この作品の場

合こういう事になってます」

メル「……」

俺「それでリオなんですが……あまり出番がありません」

リオ「えっ」

俺「だけど、実は新しいテクニックを開発したり…
　実はそういう設定なんですよね、グラール教団で働いてた理由がそれです」

リオ「…でしたら、失踪者を新テクニックで倒すなどしては……」

俺「うん、めんどい」

リオ「……」（黙って杖を構える）

俺「ちょ、ちょっと待て！ここまでお前の影が薄い理由は…ギャーッ！」（消し炭）

リオ「第五章、時を越えた邂逅は次回で最後になります」

第五章－４　サブタイの消失

「ん？なんか通信ログがいっぱい溜まってる…？なんだろ？」

私はマイシップの中で溜められていた通信のログを開く、その内容のタイトルはどれも私たちを心配しているような内容だった。

溜まったログのタイトルを見ていると通信が入る、恐らくおっさんだろう。

「あ、もしもしおっさん、どうしたのー？」

私は普段通りに通信でおっさんの用件を聞こうとしたが…

「……ようやく通じやがった！この、バカ！さっさと報告に来い！」

通信から聞くおっさんの声は私たちに対して大声で怒っていた、しかもその上でさっさと報告しろという…戦闘から帰ってきたばっかりなのに…

「ちょっ…大声で呼ばないでよ！あたしたち帰ってきたばっかりで疲れてるんだけど！」

私はおっさんに反論する、けれども…

「んなこと知るか！こっちがどれだけ連絡したと思ってるんだ！上司からの通信にはきちんと答えろ！」

「あー…そういえば、途中から通信途絶エリアだったっけ……」

そういえば、失踪者を探していたのだから通信が出来なくなるのは当然だった…
それにしても、一々そんな事を連絡する必要があるのかな…？

「ドアホ……いういうときは突入する前に連絡が不可になる旨を伝えとけ！
ったく、もうそれはいいからとりあえず俺んトコまで来い」

「へーい」

私はしぶしぶと事務所へと向かった…
レイは何も言わずにマイシップがクラッド６に到着した瞬間にマイシップから出て行くし…
ユートはまだ落ち込んでるし、リオはぐったりしてるし…今動けるのがあたしだけ…
つきたくなるため息も出さずに黙ってリトルウィングへと向かう。

「……」

おっさんは黙って私を見ている、正直、気持ち悪い…

「他の三人はどうした」

「ユートは落ち込んでリオは休んでる、レイはマイルームに行ったけど……」

「…全員、無事なようだな。なら、連絡の不備は大目に見てやる」

実はレイが左腕に怪我をしている…なんて言ったら怒鳴られそうだ。

「で、今回の事件だが…お前たちが探し当てたウチの社員も
案の定、失踪時の記憶がなかった」
やっぱり、失踪者には記憶が失っていた…
あの黒服もいたことだし、あの施設で何かをしていたのだろう。
「何かをしてしまう前に見つけられてよかったけれども、
失踪の理由などは依然つかめないままね」
「あ、それなんだけど……」
私はあの洞窟の奥にあった施設のことをおっさんに言おうとしたけど…
「どうした？他に何か見つけたのか？」
「え、ええっとぉ…証拠って、わけじゃないんだけど…
信じてもらえないかもしれないんだけど……」
正直、ミカの話も信じてもらえなかった、
けれども今回は失踪者を実際に捜索して、その奥に洞窟があったこと、
これは紛れも無く実際にあった事だ、きっと信用してくれる。
「おっさんさ…カーシュ族の村が襲われた事件の後
あたしとした話の内容、覚えてる？」
「……ああ。なんか、亜空間がヤベェとか、旧文明人だとか、話してたな

あとは…黒服のヤツがリーダーだったとか…インヘルト社はやばい。とかだったか？」

その通り、あまり信じていないわりには結構覚えてくれていたようだ。

「失踪したヒトたちがいた場所、奥に見たことのない施設があったんだ、

その施設は、インヘルト社のものだと思う。

設計とか、ロジックパターンとか……そっくりだったから」

「…なに？」

「物的な証拠はなくて、あくまであたしの記憶だけだけど…

インヘルト社で見たものと一緒だった……ううん、それだけじゃない！

一番奥には、あの黒服のヤツがいたんだ！ユートの村を襲ったヤツがいたの！

失踪事件、黒服のヤツ、インヘルト社……

明確な証拠はまだないけど、絶対に関係があるはずだよ！」

「……」

「……おっさん！」

「…大企業を疑うっていうのは、そのまま、敵に回すって意味だぞ。

わかって、言ってんだな？」

「うん、あたしは間違ってない」

今度こそ、実際に見て、本当に掴んだ証拠。
それは絶対じゃないけれど、確実に関連しているハズ。
私は心からインヘルト社は怪しいと思うし、失踪事件にも関係している。

「ハァ……なんつーか申し合わせたようなタイミングになったな。
……ウルスラ、言っちまっていいか？」

「ええ、構わないわ。決定事項、だからね」

「……リトルウィングの親会社であるスカイクラッド社は、
亜空間研究のスポンサーを降りることになった」

「ウチだけじゃないわ。続々とほかの企業もスポンサーから降りている。
実質、積極的に動いているのはもう、インヘルト社だけになっているわ」

「え！ど、どうして？」

私は思わず驚いて声をあげてしまった、亜空間研究はグラールで
今最も必要とされている技術のハズ…それが、なんで…？

「亜空間発生実験の影響で、原生生物が暴れだすってことがわかったんだよ」

「お前たちは、インヘルト社での事故と
この前の実験の事故に立ち会ってるからよく知ってるはずだ」

「亜空間が生み出された際に、『周囲にいるヒトの思考が具現化す

る』という
不可思議な現象も確認されてしまったの
それを受けて、亜空間研究の継続について
各社が議論と唱え始め、結果としてみんな手を引いている。という
ウワケ」

ウルスラさんの言った『周囲のヒトの思考が具現化する』…？
もしかすると、ＳＥＥＤが現れたのも、この現象が原因……？
それだけじゃない、あの施設はもしかすると、亜空間の研究所…？
私はその事をおっさんとウルスラさんに言った。

「なるほどな、封印されちまった今となっては
その具現化現象を疑うのが可能性としてじゃ一番だろうな」

「形を残さず消失するという特徴も具現化現象の報告にある通りだし、間違いないわね」

「……ああ、エミリアの言うことを信じるしかなさそうだな」

「ホント！？」

「その黒服のヤツが主犯格だろうから、捕まえられれば一気に解決しそうだが……
まだインヘルト社と繋がってる証拠も薄い。まずはその辺を探っていかねぇとな」

「とりあえずお前たちはしばらく休んでいいぞ。
この件については俺が預かっておく。
…それとリオを見かけたら俺んトコまで来いと言っとけ」

「おっさん…あたしの言うこと、信じてくれるの？証拠も見てないのに……」

「何度も言わせんじゃねえよ！オラオラ、仕事の邪魔になるからさっさと帰れ、ホラ！」

私は半ば追い出されるように事務所を出た。
おっさんが、私の話を笑いもせず、疑うもせず、信じてくれた……
…レイが私の事をパートナーとして信用してくれる日はいつなんだろうな……

――――――

コンコン
レイの部屋のドアをノックする音が部屋に響く。

「レイ、入るよー」

エミリアは相手の反応も確認せずレイのマイルームへと入る。
レイはベッドの腕に座りながら、自分の左腕の傷を治している最中だった。

「あれ、ポコミは？」

「うるさいので起動しません」

レイのパートナーマシナリーである『ポコミ』は主人の意思によって電源を切られている。

普通ならここでパートナーマシナリーに治療させたりとか、普通ならそうするのではないのだろうか？
だが、それ以上にレイはうるさいのが嫌いなようだ。

「それでさ、レイ…今日のことなんだけど……」

エミリアは言いにくそうにゴニョゴニョと小声で言う。

「あー、文句を言うのは私より強くなってからーとか言われるかもしれないけど…」

エミリアはレイに対して頭が上がらないようだ、
レイも無表情まま左腕の治療をし、エミリアの言葉を聞いている。

「ほら、インヘルト社へ行った時も、体に傷があったのに自分から攻めにいってたでしょ？」

レイの左腕を治療する動きが止まる。

「それ以外にも、ほとんど全部のことをレイだけでしようとしてる……」

「……」

レイは何も言わない、けれどもエミリアは言い続ける。

「あのさ、もっと私たちの事を頼ってもいいと思うんだ。
だってさ…なんでも一人でできる人間なんていないでしょ？」

「…だからなんですか？」

レイはエミリアが部屋に入って初めて喋る。
相変わらずの感情が全く出ていない声でエミリアに聞いた。
「私はレイのパートナーだって事を胸を張って言えるようになりたい…
でもその為には、まずレイも今から変わらなきゃいけないと思うんだ……」
「……どうしてそう思いました？」
「だって、レイは自分自身の心を押さえ込んでるでしょ？」
「……なんで…」
「だってさ、私のせいでレイが死んだって分かった時さ……
普段のレイからは想像できないくらい、すっごく優しかったの覚えてるんだ…
それだけじゃなくて、インヘルト社でレイが倒れたときもさ、
レイは普段から冷たい態度をしてるんじゃなくて、しなきゃならないと思ってるんじゃない？」
「…っ！」
「レイはさ、もっと自分を出していいと思うんだ。
ここには何も縛るものも無い、それにお兄さんだってきっと生きてるよ！」
エミリアはレイを元気付けようとしたが、レイにはそれが不快に思っていた、

しかしレイはエミリアの言葉に混乱し、どう反応していいのかわからなかった。

「帰っ……て…」

俯きながらレイはエミリアに言った、普段なら大きな声で部屋を出るように言うのだろうが、
今回の場合は強く言わなかった、むしろ強く言えなかったという方が正しいだろう。
エミリアはそんなレイの態度を察し、マイルームから出て行った。

「……」

レイは黙って左腕の治療を続ける、右手が少しだけ震えてしまう。

「……私は……」

右手だけでなく、左手も震えてしまう…
それだけじゃない、視界が歪んで見える、頬から何かが重力によって垂れていく、
そして両手にそれは落ちる、ほんの少しの水滴音が両手にピチャンと音を出す。
どんどん頬から雫が流れていく、目尻にその雫が大量に溜まって行く。

（あ…れ……？）

レイは自分自身がどうして泣いているのか、全くわからなかった。

……ここはどこだ？
見渡す限り真っ暗だ…何も見えやしない…
手を使って周囲に壁があるかどうか捜してみるが、壁のようなものもない。
そもそも、足が地面を付いていない。
まいったな…独り言を言おうとしても全く口が動かない、
いや、それよりも手や足を動かしている感覚はあるのだが、視線を動かしても手足が見えない。
…真っ暗だからなのだろうか？それとも視界が見えなくなってしまったのか…
むしろ足が地面を付いていない時点で変だと思うべきだよな、悪い癖だ。

「――――――」

後ろから声が聞こえる、俺は驚き振り返るが、そこには誰もいなかった。

「――――――」

だが、音が聞こえる位置からするとまず間違いなくそこに誰かいるのだろう。
誰だ？声をかけようとしても口が動かず喋ることができない。

「――――――」

まず目の前？にいる人物の会話を聞いたが、普段ならこんな話はデ

タラメだと思っただろう、
しかし今の状況を考えるとそれもありえなくはない話だ。
人物はそのまま語り続ける。

「――――」

話を聞くと悪くない提案だ。
そもそもこんな状況なら誰でもいいから手を貸してほしい、それがどんな人でもだ。

「――――」

とにかく道がほしかった、暗くても歩ける道が、
だから相手の提案を受け入れることにした――――

「――――」

しかし相手の提案を受け入れようとしたらさらに別の声が聞こえてくる。
今度の声は後方から聞こえ、しかも聞いたことのある女性の声だった……

「――――」

名前を言おうとしても、その名前を口に出すことはできない。
後方にいるあいつはそのまま目の前にいる相手に語り続ける。

「――――」

正直、今の状況ですら信じられないというのに、

あいつの話していることはもっと信用できない事を言っていた。
しかしまぁこんな状況ならあいつのいう事も信じられるし、元々仲間だったのだから
信用に値する人物だと思う、しかしピンチなら誰でも信じてしまうんじゃね？

「――――――」

喋られないのに心に思ったことを読み取る、昔からそういうヤツだったな……

「――――――」

だが、あえて前方にいる初対面の相手の話に乗ることにしよう。
こんな状況程度であんな助けを受けていたらこの先に何があっても助かりはしない。

「――――――」

そう言うとあいつは嬉しそうに言い、去っていった。

「――――――」

目の前の人物はこの選択でよかったのか、と聞いてくる。
少なくともこの空間を脱出したければアイツの誘いに乗るのが普通だろう。
しかしこれから幾多のトラブルに巻き込まれているというのに、
こんな程度で手こずっていたら後々で痛い思いをするだろう。

「――――――」

相手も納得したようで、やっとあの誘いに乗ることができる。
ようこそ、新たな相棒――――――

「おねーちゃん」

「なあに？急に抱きついてきて」

「お姉ちゃん、大好き！」

「えへへ…ありがと、私も大好きだよ！」

「お姉ちゃんにぎゅってされるの、大好き！」

「大好きって言うの好きなんだね～
私もぎゅってするのは好きだよ！」

「お姉ちゃんと一緒だね！」

「ふふふ…そうね、一緒だね……」

「んぅ、お姉ちゃん…暖かい……」

「…うん、暖かいね……」

「おねーちゃん、私ぎゅってしてて気持ちいい？」

「うん、気持ちいいよ…」

「ホントに？ホントに気持ちいいの？」

「ホントだよぉ、ぎゅってすると気持ちいいもん」

「えへへ……お姉ちゃん、大好きー……
ねぇ、このままなでなでしてー？」

「ふふふ…欲張りさんね、いいよ～」

「あ、んぅ……お姉ちゃん、気持ちいいよ……」

「あら、眠っちゃったのね……
ふふふ、ホント可愛い子ね……」

「くぅ……ん、お姉ちゃん、大好き～……」

「あらあら、寝言まで私が好きなのね…
ホントに、可愛い子…私も大好きだよ……ずっと、いつまでも…」

第五、五章－1　幼い少女の苦悩（前書き）

過去の作品を修正するので投稿が遅くなりました。
最近受験やら何やらで忙しいので更新速度が遅くなりますが
どうかよろしくお願いします。

第五、五章ー1　幼い少女の苦悩

「ヴィヴィアン、そっちはどう？」

エリスはモトゥブの砂漠地帯で高い岩山からヴィヴィアンに対して連絡していた。
この砂漠地帯にいる理由はあるのだが、高い岩山で連絡をする意味はない、
それはきっと本人がカッコいいから、というような変なこだわりだろう。

「カーシュ族の村は発見しました、エリスさんとカノンさんはどうですか？」

連絡しているヴィヴィアンという女性キャストはエリスに状況を報告した。
ヴィヴィアンは自身の目標を発見し、後はエリスに合流するだけだ。

「私はもう任務完了だよ！原生生物も全部ぶっ潰したし！…でもカノンはまだみたいだね」

「…二年間も存在が確認できない、しかも存在が目立った人物の足取りを探すのですから…」

「ま！少しでもあの子達の負担を少なくしておかないとね～
…あ！それとさ、なんかトゲトゲした石には気をつけてね」

「…トゲトゲした石、ですか？」

「うい、それが何か青く光っててさ～…
拾ってみたら…なんか、こう…ダークパワーみたいなのが溢れてくるというか…」

「…エリスさん、今になって中学2年生にかかる病気を発症したのですか？」

「ちっがーう！そんなんじゃなくて！ホントのホントにそんな石があったの！」

「…ホントですか？」

「ホントのホントだって！ヴィヴィアンも見ればわかるよー！」

「それで、その石は…？」

「あ、うん、その石なんだけどさー
青いんだか白いんだか分からない子が持ってっちゃった…」

「青いのか白いのか分からない子……？エリスさん、一度病院に…」

「現実の話だってーのー！とにかく、トゲトゲ石拾ったら、
その青白おっぱいボイン子ちゃんに切りかかれるから気を付けてねって言いたいの！」

「フフフ、そうですか…では、私はこれで…」

「おう！じゃあの～」

エリスはヴィヴィアンとの連絡を切った後、高い岩山の頂上から飛

び降りた。
普通の人なら着地の衝撃で死んでしまうほどの高さだったが、エリスは躊躇い無く落ちた。
その山の頂上はエリスの足跡しか残らず、その足跡も風で消えてしまった。

――――――

「レイ、どこ行くの？」
エミリアはマイシップへ向かおうとしているレイの存在に気づき、声をかけた。
しかしレイはエミリアの顔も見ずに無視してマイシップへと移動した。

「……はぁ…」

エミリアは悩んでいた。
もしかするとあの時、的外れな事を言ったかもしれないし、説教っぽく言ってしまったし、
それにあの時からレイはエミリアの存在を無視するようになっていた。
その理由がわかるのは今のところ本人だけだ、エミリアに分かるはずが無い。
「…私はエミリアの推理は正しいと思います。あの子は自分の心を

塞ぎこんでしまっている……」

ミカも悲しい表情をしながらエミリアに言った。

「…もしかすると、あの子は自分自身の感情を理解していないのかもしれませんね……」

ミカが言うには、レイ自身もなぜあんな風に荒れているのか、分からないとのことだ。
エミリアはミカの言う事に納得し、しばらく様子を見るという事にした。

「おいエミリア、ちゃんとリオに事務所に来いと連絡しておいたよな……？」

急に後ろからクラウチに話しかけられる、そしてその内容を聞き冷や汗をかいた。
あの時にリオにクラウチが呼んでいる事を全く言っていなかったからだ。

「あー…忘れてた……」

エミリアがクラウチにそう告げた瞬間、リトルウィングの事務所に怒鳴り声が響いた。

――――――

「――――っ！！」

レイは力に身を任せ、視界に入った原生生物を一匹残らず退治していた。
自分自身、なんでこんな事をしているのか理解する事ができなかった。

「っ！！」

背後から忍び寄っていた原生生物をダブルセイバーで撃退する。
複数の相手にも確実に急所を狙うところを見ると、完全に冷静さは失っていないようだ。

「はっ！！」

仲間の死に次々と原生生物が集まってくるが、レイは怯まずにツインクローを装備し、
原生生物の群れへと走り、そして通りがかる全てを切り裂いた。

「――――！！」

気がつけば、周囲は原生生物の血と死体の山が出来上がっていた。

「……足りない」

レイは大量に原生生物の命を殺めておきながら、まだ殺したりないなどと言い出した。
しかし力が抜けてしまったようにその場にぺたんと座り込んでしまった。

「もっと…もっと強くならなきゃ……！」

既にエミリアどころかユートの戦闘能力を凌駕している彼女はまだ力を求めていた。
原生生物を倒し、今以上の力を得ようと行動に移そうとしたが、なぜか足に力が入らず、
レイは立ち上がろうとしても立ち上がることができなかった。

（どうして……？）

立ち上がれないだけでなく、急に涙が溢れ出てきた。
瞳からボロボロと流れていく涙、なんでこんなに涙が出てしまうのか、
そして自分自身何を思って泣いているのか、それが理解できなかった。

「レイはさ、もっと自分を出していいと思うんだ」
『レイはレイのままでいいんだよ』

（……！）

突然、エミリアに言われた事を思い出すと同時に過去に同じような事を言われたのを思い出す。

『優しい心を忘れないで…』

次々と過去の言葉が頭に流れてくる。

『戦えなくたって、レイはレイだ』
『あなたの優しさは、皆を笑顔にしてくれる……』
『お前は全てに気を配りすぎだ、もっと力を抜け』
『折角できる素敵な笑顔、忘れないで…』

『もっと我侭言ったっていいんだぞ？遠慮する必要は無いからな！』
『笑うと他の人も自然に笑っちゃうのよ？』
『お前はお前だ、その心も体も全部お前のモンだ、もっと自信を持て』

『私はずっと一緒にいるよ……』
『俺はどこにも行かない、必ず帰るさ』

「う……あぁ…！」

二人の言葉を思い出し、さらに涙は溢れるばかりだった。
周囲の原生生物を虐殺した一人の屈強な傭兵の姿は見当たらずに、
その代わりに幼く、精神が未熟な少女の姿がそこにあった…
しかし、この光景を逃さない大きな影が密かに迫ってきている事を
レイは知らなかった。

第五、五章－2　それぞれ三つの行動

「失礼します。リオ・ハークス、ただ今戻りました」

赤髪の少年、リオはリトルウィングの事務所のドアが開くと同時に礼儀正しく入室する。
先ほどまでリオはリトルウィングの任務を一人で達成したところをクラウチに呼ばれ、
リトルウィングの事務所に入り、今に至るというわけだ。
リオの丁寧な対応に関心するウルスラとチェルシー、その反応を感じ照れながら
クラウチがいつも居座っているデスクの前へと移動する。

「…来たか」

クラウチは先ほどリオがこなした依頼の報告書を一通り目を通した後でリオに言う。

「…今度からお前さんには事務の仕事をしてもらう、何故だか分かるな？」

「……分かっています」

リオは何も言わなかった、何故クラウチが事務の仕事をするように頼んだのか。
それはリオ自身がよく分かっていたからだ。
ニューマン男性であるリオはテクニックの扱いには長けている、
しかし職業がフォースという事もあって防御力はかなり低い組み合わせになっている。

本来ならニューマンでフォースである彼はそれに見合った身体能力が必要なのだが…
生憎、彼はそのような身体能力を持っていなかった、
何故なら彼は普段は戦わないし、戦闘の訓練も一切していないからだ。
それでも一人で依頼をこなしたというのはリオの天才的なテクニックの扱いがあるからだろう。

「あぁ、それとだ」

クラウチが何かを言う前に事務所の扉が開く、そこに視線を移動させると、
そこに立っていたのはエミリアだった。

「おっさん、来たよー」

「おう、とりあえずこっち来い」

クラウチはエミリアを呼び寄せる。

「それで、話って何？」

「それなんだが…お前、リオにテクニックを教えてもらえ」

「え…？あ、うん」

「はい…？わ、わかりました」

急すぎてクラウチの言ったことが一瞬理解できなかったリオとエミリアだが、

とりあえずエミリアはテクニックを教えてくれる人をずっと探していたし、
リオは妹のレイを支援できるならどんな仕事でも構わなかった。
二人は訓練用のＶＲ空間で練習する為、マイシップへと向かった。
何でＶＲ空間へ移動するかというと、リトルウィングにその施設は無い、
だがリトルウィング専用といえるＶＲ空間は所持していた。
完全実力主義であるこの会社が志望してきた人物の力量を測るためだけに。
しかしクラウチの低落とした経営態度によってそれが使われることはほぼ無かった。

「…さて、アイツらは無事だといいんだがな……」

クラウチは独り言を誰にも聞こえないように呟いた。

――――――

「二人とも、遅いぞ！早くしないとおいて行くからな！」

元気にモトゥブの自然地帯を走っていくユート。
最近出番が無かったのか体力を持て余しているようだ。

「待て！待ってユート！……ったく、
相変わらずの突撃思考だな。どれだけ言っても全然なおりゃしねぇ」

「それがカーシュ族の戦士の気質だからね。でも、急ぎたくなる理由もよくわかるよ」

「行方不明だったカーシュ族が見つかった、か……随分と急な連絡だぜ」

「でも、それって出所不明の匿名情報なんだよね？そんな簡単に信頼していいの？」

「…あぁ、そこは心配しなくていい。ワナにしては、随分と曖昧な場所の指定だったからな
　それに、暗号の形式に気になることもある。とにかく信用できそうってことだよ」

トニオはかつての友人からそれに似たような事をしていた人物を思い出していた。
もしかすると、その人物がこの事に絡んでいるのかもしれないと考えている。
ふと、リィナの様子を見ると、どこか様子がおかしいように見える。

「そういやリィナ、お前、調子は大丈夫なのか？最近、よく体調崩してるけど……」

「…大丈夫、大丈夫。ずっとトニオばっかりに頑張らせているわけにもいかないからね」

「ならいいけどよ……くれぐれも、無茶だけはするなよ？」

「…その言葉は、あの一人で進んじゃってる子に言ってあげたほうがいいと思うけどね」

「あっ、コラ！ユート、テメェ、一人で行くなって言っただろうが！」

「やれやれ、結局こうなるんだね」

リィナは二人を見失わないように後をついていった。
しかしリィナはどこか様子がおかしく、いつもの調子が出せずにいた。
その理由を知るのは、彼らが彼女と出会ってからの事だった。

――――――

「うっ…ぐずっ……」

少女はまだ泣き続けていた。
その泣き声のせいで、この辺りに生息していたボスの原生生物がレイの存在に気づく。

「ギァァァァァァ！！」

レイはドラゴンが叫ぶ声がする方向へ顔を向ける。
今回の依頼の討伐目的であった『ディ・ラグナス』が目の前に存在していた。
アルテラツゴウグ同様に左右に割れた二つの頭がレイを視界にいれ、その姿に向けて再び吠えた。

「ギァァァァァァ！！」

「ひっ…！」

レイは何故か目の前に存在している双頭のドラゴンが恐ろしく感じた。
普段なら絶対に驚かず、武器を手に持って果敢に立ち向かう少女の姿はそこには無く、
そのかわりに普通の少女らしい年相応の態度をとってしまっている。
すぐに立って逃げようとするが、腰に力が入らない。

（何で……！）

レイは自分でも自分が何をしているのか、なんで逃げようとしているかが分からなかった。
ただ、今感じられることは、今目の前に恐ろしく強い生物が睨み、
それに加えて自分は動くことができない状態だという事だけだ。
双頭のドラゴン、ディ・ラグナスはレイに向けて炎と氷の息を吐いた。

「うぅっ……」

レイは今の攻撃でかなりのダメージをくらい、その上でディ・ラグナスは
体を反転させ、尻尾を使ってレイを全力で叩きつけた。

「……」

小さな体はその攻撃をモロにくらってしまい、木々に向かって吹き飛んだ。
一本の木に叩きつけられ、レイの意識は失ってしまった。
トドメだ、といわんばかりにディ・ラグナスはレイに向かって突進をしようとした……が。

「はっ！」

突如現れた二人のガーディアンズによって、ディ・ラグナスはその命を終える事になる。

「やれやれ、とんだ無茶をするな、この娘は」

一人は青髪をした女性のニューマン。

「ホントだな、こういう所は兄貴にソックリなんだよなー」

もう一人は、茶髪のヒューマンの男性であった。

「…あの人は、つねに無茶に無茶を重ねていたからな…無茶苦茶な存在だ」

「でも、その無茶が通ってこの今のグラールがあるんだろうな」

「…そうだな、私達が守ってきたグラールを……クロノにも見せてやりたい」

「早いトコ、少しでも手がかりを探さないとな、アイツの妹達が可哀想だしな」

「……ん？どうした、カノン？」

青髪のニューマンは--もう一人--いたキャストの女性に声をかける。

彼女は倒れたレイの事を心配している様子だった。

「レイの事が気になるのか？大丈夫だって、あの不死身の超生命体の妹だし……」
「ちなみに、クロノとメル達は血は繋がっていない兄妹だと忘れていないよな？」
青髪は茶髪に対して速攻突込みを入れる。
「分かってるって、あの様子だとレイは無事だろうしな。
レイの事はカノンが何とかするようだし、俺たちはこのままレリクスの捜索を続けようぜ」
「…分かった、合流はＥ－４０２地点で落ち合おう」
「よし、それじゃあ行くか、カレン」
茶髪は青髪の名前を呼ぶ。
「また一人で突っ走っていくなよ？イーサン」
茶髪の男性の名をイーサンを言う。
彼ら二人はグラールで知らない人は誰一人としていないだろう。
二人は先へ進み、少しでも失踪したクロノの情報を探していた。
ここで桃色のキャスト、カノンと呼ばれた彼女はレイを抱え、
レイの所属しているリトルウィングへと足を運ぶことになる。

第五、五章ー3　白き旅人の正体

「たぁっ！」

エミリアは愛用しているロッド'' クラーリタ・ヴィサス'' を使用してフォイエを放つ。
放たれたフォイエはヴァーチャルで再現されたガードマシナリーに命中した。
エミリアが倒した敵が最後だったらしく、ＶＲ空間は姿を消し、周囲は元に戻っていた。

「お疲れ様でした」

リオはエミリアを労い、スポーツ飲料を渡した。
エミリアはそれを受け取り、ぐいっと一気に半分くらいを飲み込んだ。
その後にふぅ、と一息を入れ、リオに先ほどの戦闘がどうだったかを聞いてみた。

「ねぇ、今の戦い方とか、どうだった？」

するとリオは悩むようなポーズを取り、しばらくしてこう答える。

「百点満点で言うとしたら……七十点程でしょう。
運動能力もエリスさんから教わっているようですし、数日も練習すればコツは掴めますよ」

エミリアさんは才能がありますから、とリオは付け加えた。
リオに褒められ、いい調子になったエミリアは次のミッションを開

始しようとしていた。
その様子を見てリオは少し意地悪そうな顔をし、少々手強いミッションを選択する。
それはガーディアンズでもごく一部の人物しか攻略できないと言われている超高難易度、
'' マガシ抹殺計画'' を選択する、攻略できた人は英雄と呼ばれている人物しか攻略できていない。
……そのミッションに、エミリアはボロボロになるのだが、それはまだ後の話。

――――――

私は懐かしい夢を見た。
かつて私が姉と呼び、慕っていた人と一緒にいたときの夢。
桃色の髪をした姉は、とても優しかった。
冷たくても、抱きしめられると暖かかったお姉ちゃん。

「おねーちゃん」

「なあに？急に抱きついてきて」

私は姉に抱きつく。
姉は嫌がる様子も無く、私の事を抱きしめてくれる。
そんな優しい姉が好きだった。いや、今でも好きだ。
好きと言えば姉も好きだと言ってくれる。
幼い私の面倒を見てくれた、最高の姉。
でも、ある日を境に白い目で見るようになった。

――嫌だ

思い出したくない、お姉ちゃんがあんな事するなんて
あの時私が悪いんだ、お姉ちゃんは悪くない
私が悪い子だから、お姉ちゃんはあんな事に…

――嫌だ

思い出したくない、だってあの時私が――

嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ
嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ
嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ
嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ
嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ
嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ
嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ
嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ
嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ
嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ

アノトキノことハオモイだしたくナイ――――

――――

ここ、どこかな？
リトルウィングはクラッド６の中にあるって聞いたけど、
そのコロニーがこんなに広いだなんて聞いてないよ…
あ、あそこに黒いキャストのヒトがいるから聞いてみようかな。
「あの、民間軍事会社リトルウィングってどこにありますか？」
黒いキャストのヒトは少し困惑した表情で言った。
「リトルウィングはここなのだが…」
…あら、いつの間にか着いていたみたいだ。
「それで、事務所の方はどちらにありますか？」
「すぐそこの大きな扉の先がそうだ」
「ありがとうございます」
と言って私はその扉に向かおうとした、けど…
「待て、そっちは逆方向だ」
「…あれ？」
いつの間にか反対に移動してたみたいだ。

どうしてこうなっちゃうんだろう？

「…こっちだ、付いて来い」

と言って黒いキャストは事務所へ案内してくれた。良い人だなぁ…
しかし案内されたのは五秒、すぐに目的地にたどり着いた。
どうしてこんな近い場所で迷っちゃうの？私って…
思考プログラムにバグでもあるのかなぁ…？

「ハーイ、お客サン、リトルウィングへ……」

と、受付嬢らしい人が言ってくる、が様子がおかしい…
私の顔を見るなり、ハッとした表情でこっちを見ている。
周囲もしーんと静まり返った、何か禁句でも言ったのかな？言ってない。
しかし、私もあの人はどこかで会ったような…？

「もしかしテ…カノン、カノンなノ？」

受付の人は私の名前を言う。当たっているんだけど…
私の方はどうも思い出せない、どこかで会ったのだろうか？

「久しぶりネ！私、私ヨ」

私と言われても思い出さない、そんな彼女の手助けをしたのが…

「あらチェルシー、それじゃあ分からないわよ。
久しぶりね、カノン。同盟軍を別れて何年ぶりかしら？」

何故かウルスラさんまで居た。

私は同盟軍に所属し、理由があってガーディアンズとなった。
しかしそのガーディアンズも辞め、今ではただの旅人だ。

「お久しぶりです、ウルスラさん。
私はＳＥＥＤ事変以来に同盟軍を辞めているので…五年ほどでしょうか？」

「相変わらず、キャストらしく無いわね」

「よく言われます…」

えへへ、と少しだけ褒められたような気がして嬉しい。
キャストらしい頭脳明晰な感じが私には無いらしく、
それに引き換えかなり高度な感情プログラムがあるみたい。

「カノン、アナタがリトルウィングに来た理由ハ何カシラ？」

受付…チェルシーって言ったっけ…
ん？あれ…ひょっとして…

「まさか、チェルシーって……あ、あの…！？」

「ソウ！あのトキは生意気だったワネ～
デモデモ、それがアッテ今の私がいるようなモノだから、カノンは恩人ミタイなモノヨ？」

と、チェルシーさんは言うけど、私は以前のチェルシーの姿を知っている。
…自分があの時にあんな事を言わなければ…いや、そんな事を考えるのは止めよう。

「あ、それで用件なんですけど、この子……」
私は背負っていた子を近くにあったソファーに寝かせる。
それを見た全員の反応は驚愕していた。
「レイ……！？この子、どうしたの！？」
ウルスラさんは驚いてレイちゃんの事を聞いた。
「大丈夫です、少し気を失ってるだけですよ。…では、私はこれで」
「エ？もう行っちゃうノ？少し位ユックリしてイッテモ……」
「そうよ、それとも急ぎの用事があるの？」
チェルシーさんとウルスラさんは私にゆっくりしていけ、と言うけど…
「私は……一度その子を見捨てたんです…
話がしたなら、今度別の場所で呼んでください…！」
少しでも見捨ててしまったあの子に会いたくなかった。
あの子の笑顔を崩してしまった私は…あの子に会う資格は無い。

…私のこと、怨んでいるよね？レイちゃん……

――――――

「ふぅ、これでもうすぐってところか？
人為的ななものはなさそだし、罠じゃないみたいだな。なぁ、リィナ」

三人がいる場所はカーシュ族の村がある地点まで残りわずかといった所だ。
ここらでトニオはリィナが疑問に思っていた罠であるという事を否定し、安心させた、が…

「うん……そうだね」

何だかリィナの様子が変だった。
顔色も悪いし、息も切れている。

「…おい、リィナ！？どうした、どこかケガでもしたか！？」

トニオはリィナの心配をする。

「だい……じょうぶ。
ちょっとめまいがしただけ、だから……」
「また例の発作か……だから無理すんなって言っただろ。まったく……」
トニオは少しだけ安心する。
しかし、ユートの行動は彼を全く休ませてはくれなかった。
「ん……？この感じ…覚えがあるぞ……もしかして！」
ユートは感じた懐かしい感覚に向かって走っていった。
「あっ、ちょいコラ、ユート！どこへ行くつもりだ！
……くそっ、聞いちゃいねぇ！あいつ、帰ったらみっちり説教してやる！」
トニオは勝手に走り出していったユートに怒りを感じていた、
しかしそれ以外の、ユートの持つカーシュ族特有の能力によって
懐かしい覚えがある感覚へ向かっていった。だから村が近いのかも、
とトニオは考えていた。
「…しかし、リィナも放っておくわけにはいかないし、ここで少し
休んでいくか……」
「…たしか、このあたり。あの感じは間違いないはず……」

ユートは懐かしい感じがする場所まで来た。
そこに居たのは…白いキャストだ。
青色の髪の毛をし、ウサギの耳のようなものを頭につけている。
ユートはその白いキャストに向かって走っていった。
そのキャストもユートの存在に気づき、振り向いた。

「……あら？あなたは…」

「やっぱり！やっぱりいた！
旅人さん、ぼく覚えているか！？ぼくはよく覚えているぞ、旅人さん！」

ユートは白い旅人と呼んでいるキャストに随分と懐いていた。
まるでそれは弟が仲のいい姉としばらく会っていないようにも見える。

「はい、覚えています。カーシュ族のユート君、ですよね？一人でここまで来たのですか？」

旅人はユートの存在をハッキリと覚えていた。

「あ、あれ？トニオとリィナがいないぞ……？」

今になって仲間がいない事に気がついたユート。

「…どうしたのですか？もしかして、
仲間を置いてきてしまった、とかでしょうか？」

「う…ついて来てると思って……」

「ユート君は相変わらずせっかちですね。
皆が君のように動けると思ってしまってはダメですよ？」

「……ごめんなさい」

ユートは旅人に向かって謝る。

「それで、ユート君がここに来ているということは目的地はカーシュ族の村ですか？」

「旅人さん、ぼくたちの村がどこに移動したか、知ってるか？」

「はい、記憶していますよ。そこから出てきたばっかりですしね。
すぐ近くですし、私が道案内しますけど…どうでしょうか？」

「いいのか！？やった！旅人さんといっしょ！」

「ユート君、張り切るのはいいですけど、私を置いていかないで下さいね」

「う……も、もちろんだ」

ユートは勝手に自分から一人で進んでいかない事を旅人に約束した。

――――――

「おっ、丁度いい所で合流できたか？」
トニオとリィナが後ろからユートを追っかけてきた。
「…ごめん、ちょっと遅くなっちゃった。ユート、ケガとかはない？」
「大丈夫だぞ！旅人さんも一緒にいてくれたからな！」
「旅人さん…って、あんたヴィヴィアンじゃない！どうしてこんなところにいるの！？」
リィナは旅人、ヴィヴィアンに対して驚いた。
それ以上にヴィヴィアンはリィナに対して指摘をした。
「トニオさんに、リィナさん……それに。
……お言葉を返すようですみませんが、リィナさんこそ、
どうしてこんなところに？仕事をしている場合ではないでしょう！」
ヴィヴィアンはリィナの体調不良の存在を認識していた。
キャストである彼女はリィナの身体に宿る一つの小さな命が宿っている事を言った。
それに気づかなかったトニオと、隠し続けていたリィナを優しく怒り、そして。
「おめでとうございます」
夫婦が新たなスタートラインに立った事を祝福した。
トニオはカーシュ族のある村を教えた匿名の情報が

かつて三年前のイルミナス事変の際にヴィヴィアンが似たような事をしていた為、
それに気がついて罠ではないと信じる事ができた。

「それでは、私は失礼します」

ヴィヴィアンはそのまま行こうとした、がそれをユートが引き止めた。
しかしヴィヴィアンは目的があると言って去ってしまった。

「…行っちまったな。さて、俺たちはカーシュ族の村に向かうか。
ユートも久々に家族に会いたいだろ？」

「…いや、ぼくは帰らないぞ」

「…は？」

「ここまでで、十分だ。みんなが元気だって事が伝わってくる。
みんな無事だったってわかったからそれだけで十分。
後は、全部終わった後に取っておく！」

「おいおい、せっかくここまで来たんだぜ？
ちょっとぐらい会ったっていいじゃんないか？」

「ぼくはまだ戻らない。ぼくにはまだ、やるべき事が残ってるから。
エミリア達、リトルウィングの……ううん、ぼくの家族たちを助けること。
それが今のぼくがやるべきことのハズだから…！」

と言ってユートは来た道を戻っていった。

トニオはやれやれ、といった表情でユートの後について行った。

第五、五章ー3　白き旅人の正体（後書き）

久しぶりに更新しました。
ＩＳの二次創作も書いているのですが、
これに比べると圧倒的に書きやすいです。
なにが違うんでしょうかね…
ちなみに、今の状況でレイの過去が分かった人がいるでしょうか？
もしこんな感じではないか、と思ったら感想等で書き込んでくれると嬉しいです。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6283v/

三つの惑星が交差する世界で英雄達は生き続ける

2011年10月31日22時08分発行